

近畿地方における経容器の研究

橋本 侑大

総合研究大学院大学 先端学術院 日本歴史研究コース

要 旨

近畿は経塚の集中地域であり、早くから研究が行われてきた。従来の経塚研究の中心は、青銅製経筒やその銘文研究であったが、攪乱や盗掘を受けて遺跡の当初の姿が明らかにできない経塚が多くを占めている。遺物が散逸しており、研究の進む青銅製経筒が未発見な経塚においても、陶器系や土器系の容器が出土する経塚がみられる。本論はこうした陶器系・土器系経容器に焦点を当て、これらの経容器から経塚の造営実態や位置付けなどを明らかにすることを目的として検討を行ったものである。これまでの研究の状況から、地域性、時期（時代性）、階層差（造営主体）の3点の解明を中心に検討を行った。

まず、材質別に分布傾向を確認し、陶製経容器を多く使用する山城周辺と伊勢地域でも分布傾向が異なることを確認した。さらに、先学でも指摘された須恵器系容器を使用する播磨周辺、土師質容器が主体の丹後周辺の地域的傾向を再確認した。

その後、専用品経容器のうち、陶製経容器、瓦質経容器、石製経容器の考察を行った。陶製経容器では形態分類を行って属性を分析し、器高や口縁部形態に時期的な特徴が反映されることを確認した。時期的な変化の検討では、紀年銘を有する資料を中心に口径・底径と最大径の差を数値的に分析することで器形の変化を明らかにした。瓦質経容器は、製作技法によって4種類に分類でき土器工人と瓦工人による製作技法の差を明確にし、陶製との比較によって粗製品と捉えられてきた瓦質経容器にも瓦工人によって製作された精製品といえるものがあることを明らかにした。また、精製品の一群の出土地が山城周辺や紀伊を中心としていることから京周辺で用いられた可能性を指摘した。さらに、ミガキ調整が施された一群が経筒として使用されたことを指摘し、先学に指摘された青銅製経筒の模倣として使用されたことを裏付けた。これらの検討を総合して、陶製経容器（三筋文）、陶製経容器（無文）、瓦質経容器の消費地での編年を提示し、併せて階層差を含めた各容器の位置付けを提示した。

経塚からみた地域性の検討では、京周辺と東海西部の両地域と類似した地域性を示す伊勢地域についての検討を中心に行った。それぞれの地域と比較検証し、伊勢の中心部が類似した傾向を示す京周辺と東海西部の経塚とは異なる独自の地域性を持つことを明らかにした。こうしたことから、近畿の経塚は「京の経塚」、「伊勢の地域」、「播州の経塚」、「三丹の経塚」の4つの地域に分けられることが明らかになった。

以上の検討によって、陶器系・土器系経容器から遺跡の造営実態や位置付けが可能となった。

キーワード：経塚、経筒、外容器、経容器、近畿地方、三筋文、瓦質土器、地域性、階層差、編年

A Study of Sutra Containers in the Kinki Region

HASHIMOTO Yuto

Japanese History,
Graduate Institute for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

The Kinki region has a high concentration of sutra mounds which have long been the subject of research. Although the focus of traditional sutra mound research has been on bronze sutra cases and inscriptions, there are many sutra mounds that have been disturbed or looted and the original appearance of the sites cannot be determined. There are sutra mounds where ceramic or earthenware vessels have been excavated, but bronze items have not been found. This paper focuses on ceramic and earthenware sutra vessels and seeks to clarify the construction and positioning of sutra mounds. The study focuses on elucidating three points: regional, timing, and hierarchical differences.

Research on the distribution trends by material confirmed that there are differences in distribution trends between the Yamashiro and Ise areas, where ceramic sutra vessels were mainly used. The study also reconfirmed the previously noted regional trends in the Harima area and the Tango area; the former is known to have abundant Sue ware, and the latter earthenware.

Ceramic sutra vessels, tiled sutra vessels, and stone sutra vessels were then considered. The ceramic sutra vessels were classified according to their morphology to determine the respective attributes, which confirmed that the height of the vessel and the shape of the mouth rim reflect the characteristics of the period. In examining the changes in the temporal characteristics, the author clarified the changes in vessel shape by numerically analyzing the differences between the diameter of the vessel mouth and the largest diameter and between the diameter of the vessel base and largest diameter of the vessel that has period inscriptions. The comparison with ceramics revealed that some tiled sutra vessels, which have been regarded as crude products, can be regarded as fine products made by tile workers. The study addressed the production techniques of earthenware and tile workers. The author also points out that a group of refined vessels may have been used around Kyoto, as their places of origin are concentrated around the Yamashiro and Kii areas. Furthermore, a group of refined vessels were found to have been used as sutra cases, which confirmed that the tiled sutra vessels were imitations of bronze outer containers, which was pointed out by an earlier researcher. This paper presents the chronology of ceramic and tiled sutra vessels according to the area of consumption and the positioning of each vessel, including hierarchical differences.

Examination of regional characteristics revealed that Ise has its own unique regional characteristics. Sutra mounds in the Kinki region can be divided into four regions: the Miyako-area, the Ise-area, the Banshu-area, and the Santan-area.

The above research has made it possible to determine the conditions of construction and positioning of sites based on ceramic and earthenware sutra vessels.

Key words: sutra case, outer container, sutra container, sutra mound, Kinki region, regionality, hierarchy, chronology

はじめに

1. 研究史

1.1 経容器の研究史

1.2 近畿の経容器研究

1.3 課題と問題の所在

2. 材質別の傾向

2.1 専用品の傾向

2.2 転用品の傾向

2.3 分布にみる地域性

3. 専用経容器の考察

3.1 陶製経容器

3.2 瓦質経容器

3.3 石製経容器

4. 経容器の位置付け

4.1 近畿の経容器編年

4.2 経容器の位置付け

5. 地域性の検討

5.1 伊勢地域の地域性

5.2 近畿における経塚の地域性

6. まとめ

はじめに

近畿¹⁾は九州と双壁をなす経塚²⁾の集中地域であり、早くから青銅製経筒に対する研究や、その銘文に関する研究が相当数行われてきた(図1)。しかし、経塚造営において、もう一つの主要遺物ともいえる経筒外容器の研究は青銅製経筒に比較して活発でなく、材質による分類や、生産地編年に頼るところがある。経塚では攪乱や盗掘によって、当初の遺跡の全容が窺えない事例も多くを占めるが、一方で遺物が散逸し青銅製経筒が未発見な状態でも陶器系や土器系の容器が残されている経塚がみられる。こうした状況から、本論では陶器系・土器系の経容器から経塚造営の実態や位置付けを明らかにすることを目的とした検討を行う。副納品の和鏡や古銭が発見される経塚では、一定の幅で造営時期が特定できるが、伝世期間もあり経塚の造営時期を窺う強い要素とはならないので、専用品である経容器の陶製経容器、瓦質経容器を中心に取り上げて論を進めていく。本来は経筒外容器として使用されることの多い陶器系・土器系の経容器に直接経典を納めたと考えられる事例も認められるので、経筒外容器に加えて陶製経筒などを含めて陶器系・土器系容器全般について検討していく(以下一括で「経容器」とする)。これらの容器について、使用法が明確に判明し

ない個体についても、「経容器」と呼称しておきたい³⁾。

本論の目的である経容器からの経塚造営の実態の解明や経塚の位置付けでは、地域性、時期(時代性)、階層差(造営主体)の3点に主眼を置く。経容器の材質別の傾向や専用品の経容器の考察によって地域区分を提示し、専用品の考察から近畿の経塚を通じた陶製経容器の消費地編年を提示したい。その用途についての検証が求められている土師質容器については、分布などからの地域性を言及するに留めておきたい。

これらを総合して、経筒外容器を中心とした経容器に反映される地域性、時期、階層差について明らかにしていきたい。

1. 研究史

まず、近畿を中心とした経容器の研究について、編年に関する研究や地域性に関する研究を中心に研究史を整理し、問題の所在と課題を明確にしておきたい。本論は主に研究の進む青銅製経筒以外の経容器を扱うため、外容器を中心とした経容器研究と近畿の経塚研究に係るものに分けて整理する。

1.1 経容器の研究史

青銅製経筒以外の経容器研究では、外容器(外

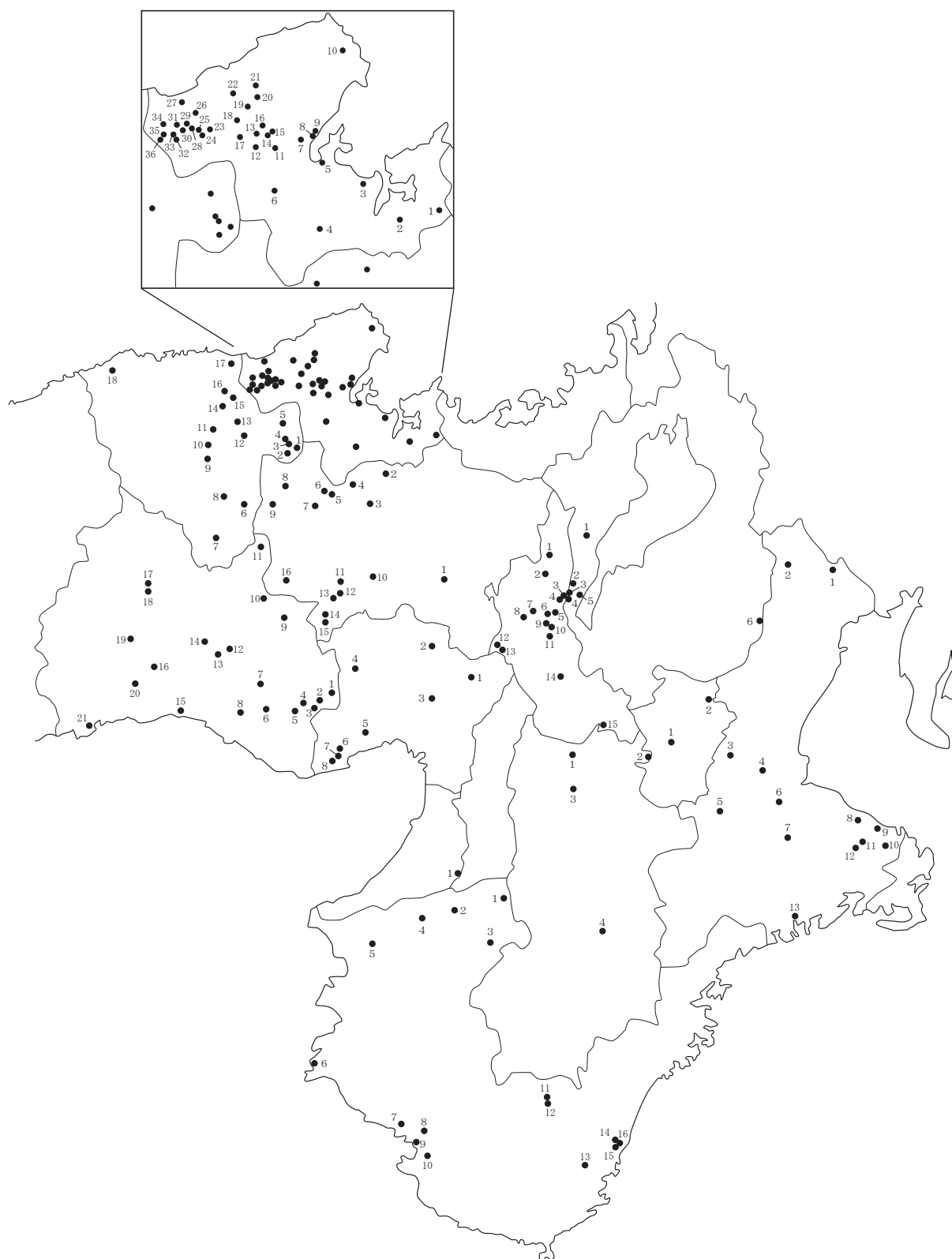


図1 経容器出土経塚の分布 (筆者作成)

筒)の研究が中心となって進められてきた。総合的な経塚研究において、陶製外容器を中心とした分類を提示したのは石田茂作であり、陶製経筒と陶製外容器を区別して陶製経筒の諸例を提示した(石田 1929)。外容器に使われる材質には陶製が多く、次いで石製がみられることを指摘し、陶製のものは筒形と甕・壺形に大別できることを示している。陶製については、この当時確認されていた型式として蓋などで分類し8種を提示した。石製については、筒形と櫃形がみられることを指摘している。これら経塚造営のために作られた専用品の外容器については、経筒の大きさに比例すると指摘をして、器高が藤原時代で9寸から1尺前後、鎌倉時代では7、8寸が普通であるとしている。

三宅敏之は、陶製外容器について石田茂作と同様に専用品の陶製外容器が青銅製経筒の大きさに合わせて作られたことを指摘した(三宅 1977)。円筒形が多く、蓋や筒身と蓋の組み合わせ方によって分類できることを示し、石田茂作の分類を引用して多くがこの分類に該当するとしながらも、特殊なものを中心にさらに数例を加えている。

関秀夫は全国を対象として、陶製や石製の経容器について紀年銘をもつものを中心として言及しており、古代から近世の経塚まで広く目を向けた研究を行っている(関 1990)。関は、本論で扱うような平安時代と鎌倉時代初期の経塚に「古代の経塚」の語を用いている(関 1985)。

吉岡康暢は、経塚の容器に転用された須恵器系陶器を中心として集成し研究を行った(吉岡 1985)。転用品外容器に対する全国的な研究であり、近畿の経塚の隆盛期を転用品外容器から示した壮大な研究である。

この他に、転用品外容器として用いられることの多い甕や壺などの各生産地では、それぞれ編年研究が進められている。常滑窯では「赤羽・中野生産地編年」として、14型式に区分された編年が提示されるなどしている(中野 1995)。

須恵器系の生産地では、東播系須恵器では複数の編年研究が提示され、近年においても鉢を中心とした新たな編年研究が公表されるなどして研究が続けられている(荻野 1985; 中世土器研究会事務局 2015; 森田 1986)。また、近畿の経塚では少数のみ使用されるものであるが、四国の十瓶山窯でも編年研究が提示されている(片桐 1992; 佐藤 1993)。

1.2 近畿の経容器研究

ここでは、近畿の経容器に関係する研究について確認しておく。特に編年研究や地域性の研究を中心として扱った。

(1) 陶製経容器の研究

近畿の経塚では、専用品、転用品を問わず多くの陶製容器が用いられている。特に愛知県下の窯で製作された専用品の陶製経容器が多く用いられており、生産窯での研究の視点も外すことのできないものとなっている。

植崎彰一は、三筋壺に代表される三筋文系陶器の研究を行っており、この研究では三筋文をもつ経筒外容器も対象となっている(植崎 1978)。このなかで、猿投窯、常滑窯、越前窯、渥美窯でそれぞれ編年が提示された。特に猿投窯編年には、経容器の編年が提示されており、胴部の膨らみや受け部に変化がみられることが指摘された。

さらに、生産窯での研究としては『愛知県史』に愛知県下の窯業についてまとめられている(愛知県史編纂委員会 2007, 2012, 2015)。経容器に関係するところでは、猿投窯編年に一部経筒外容器が組み込まれ、渥美窯では経筒外容器独自の編年が提示された(愛知県史編纂委員会 2012, 2015)。

また、消費地遺跡である経塚側からの視点では、『伊勢市史』において朝熊山経塚群出土陶製経容器の編年研究が試みられた(山澤 2011)。この編年は朝熊山経塚群単独の編年であるもの

の、近畿の経塚で最も多い50点を超える陶製経筒が出土している経塚群の経容器を対象として、時期を検討した注目に値する試みである。編年作成には、蓋と筒身の口径・器高や器形、成形、胎土、焼成、銘文による視点が用いられ、朝熊山経塚群の陶製経容器は4期に区分された（山澤 2011）。しかし、未だ朝熊山経塚群での総合的な報告書が刊行されていないため、この編年研究でこうした正確性の検証が困難であることは残念である。

（2）瓦質経容器の研究

菅原正明は西日本の瓦器生産に関する研究を行い、このなかで瓦器経筒についての考察を行った（菅原 1989, 1990）。西日本で瓦器経筒は、高価な経筒の代用品として用いられたことや西日本でも地域性がみられることが指摘され、製作工人が一樣ではなく土師器系工人、瓦工人による差がみられることも指摘された。さらに図において陶製経筒を写した（模倣）瓦器経筒の例も提示された。

（3）土師質容器の研究

土師質容器には、杉原和雄の一連の論考を中心に長年にわたる研究の蓄積がある（杉原 1987, 2021など）。杉原の研究は、近畿で最も土師質容器が集中する地域である京都府北部を主な対象地域としたもので、経塚と墳墓の土師質容器を中心に考察を行っている。土師質の容器は、経塚遺物としての経筒、外容器の用途のほかに墳墓の蔵骨器の可能性があることが指摘された（杉原 2001）。よって、杉原はこれらの容器を「土師製筒形容器」と呼称し、遺構の検討によってその用途の判定を求めて即座に経塚遺物とすることには否定的である。土師質容器については、現在まで研究が続けられており用途や判定方法についてさまざまな検討が行われている。

（4）近畿の経塚研究

地域的な研究は、旧国単位を中心に論じられている。小地域としての地域性や当該地域の経容器の諸相に関する研究が進められてきた。

橋本勝行によって丹後地域、京丹後市の経塚が、松本達也によって中丹波の経塚と古墓の事例がそれぞれ提示されている（橋本 2002, 2008; 松本 2002）。さらに森内秀造によって兵庫県下や但馬地域の経塚の研究が進められるなど、地域的な視点による研究が進められており、それぞれに経容器の地域性の視点が含まれている（森内 1992, 2011）。

近畿の総合的な経塚研究を行ったのは、村木二郎である（村木 1998a）。経筒、外容器、埋納方法、地域区分の検討によって、近畿の経塚を3地域に区分した（村木 1998a）。のちに東日本の経塚研究を行い、伊勢地域の経塚を東海に含め「東海西部の経塚」と位置付けている（村木 2003）。この一連の研究は、地域区分の提示や広域な視点による地域的な研究として注目すべき研究であり、今日においても最も広域的な視点による総合的な研究である。

1.3 課題と問題の所在

ここまで、経容器の研究について、近畿の経塚研究や編年研究、地域性の研究を中心に概観した。近畿の青銅製経筒以外の経容器研究としては外容器の総合的な研究が行われているが、その数は青銅製経筒ほど活発ではない。青銅製経筒では型式設定が行われているが、一方で外容器では基本的に材質による分類に留まっており、製作技法などによる踏み込んだ分類が求められる。また、近畿の経塚の代表的な経容器である陶製経容器は、使用時期に関して生産窯での研究に頼るところが多く、近畿の経塚を通しての編年、いわゆる消費地編年は確立されていない。生産地編年には差異がみられることや、生産地が特定できていない専用品の経容器がみられるので、消費地遺跡での使用時期をより明確

にしておくことが必要であるといえる。生産窯での編年研究や朝熊山経塚群での編年研究の視点を参考としながら、近畿の消費地編年を組むことが必要である。消費地編年の確立は、各遺跡の造営年代を窺うためにも求められる重要な課題といえるであろう。

このように外容器は、材質での分類や生産窯での編年研究、転用品の研究に留まっているのが現状である。また、陶製経筒を用いるとされる地域もあり、陶製経筒と陶製外容器の判別も課題といえる。この問題については地域性と合わせて検討してみたい。

地域性では、村木二郎によって青銅製経筒の型式と外容器の材質からの地域区分が提示されているが（村木 1998a）、こうした地域性の妥当性の検証を行うためにも、外容器として多く用いられる青銅製経筒以外の材質の経容器の検討をもとに地域性の再検討を行う。特に近畿の経塚や東海西部の経塚の影響が見え、地域区分が難解な伊勢地域の扱いが重要である。

近畿では、貴族層や神官層の華やかな経塚だけでなく、簡素とも言える経塚までさまざまな階層による経塚造営が行われている。今後、造営主体や経塚造営の背景を明らかにするためにも、こうした造営主体の階層差と経容器への影響についての検討が求められる。瓦質や土師質が陶製に比べて粗製であることや、専用品と転用品の差で語られることがあったが、これについて検討してみたい。さらに地域性の視点も含め、外容器や陶製経筒の差が地域性、階層差などの影響を受けているのか検討してみたい。特に瓦質経容器が単なる粗製品であるのかなど、外容器や陶製経筒、瓦質経筒を中心として論じていきたい。

2. 材質別の傾向

近畿で使用された経容器の材質には、専用品では陶製経容器、瓦質経容器、土師質容器、須恵質経容器、石製経容器などがみられ、そのほ

とんどが円筒形を呈している（図2）。

また、日用雑器を中心とした転用品には、東播系須恵器の甕、常滑焼の壺・甕、十瓶山窯須恵器の甕などが用いられており、青銅製経筒を入れるために意図的に口縁部付近を欠失させているものもみられる。転用品を使用する際には、鉢などを蓋代わりに使用し組み合わせる形態が多いが、経筒を置きその上に甕などを倒置する例もしばしば見受けられる。材質別の分布傾向は既に先学によって示されているが（村木 1998a）、資料数の増加もあるので改めてここで材質別に分布傾向と概要を確認しておく。

2.1 専用品の傾向

(1) 陶製経容器

専用品の陶製経容器は、胴部に沈線を巡らせるものと無文のものの2種に大別できる。近畿で使用される専用品の陶製経容器は、主に東海地方の諸窯で製作された専用品を取り寄せており、猿投窯、渥美窯で製作されたものが多く流通している。この他に稲荷山、笠置寺、峯連山、朝熊山10号Gなどの、色調が主に褐色系などを呈する個体が度々報告され、常滑窯や信楽窯が生産地として推察されているが、現在まで生産窯は発見されていない。常滑窯や信楽窯と推察されてきたこれらの個体は共通して蓋の天井部が扁平で、つまみをもたず、筒身の口縁部付近には段状の受け部をもつ、いわゆる印籠蓋の形をとっている。生産窯の発見が無い以上、生産地の特定は困難であるが、類似する形態を呈する一群があることは、猿投窯や渥美窯の他に経容器生産を支えた主要生産地があったことが窺える。ここでは、三筋文経容器と無文経容器に分けて、それぞれの傾向を確認していく。

陶製三筋文経容器…（近江）打見山、横川／（山城）花背別所、鞍馬寺、弁天島、清水寺、石作、白川金色院、笠置寺／（紀伊）粉河産土神社、那智、神倉山／（和泉）槇尾山⁴⁾



図2 専用品経容器の種類

(1 笠置寺蔵, 2 善峯寺蔵, 3 南丹市立文化博物館蔵: 1～3 筆者実測,
4 森田 1983, 5 杉原 1981, 6 秋山 1983 を再トレース)

三筋文経容器は、胴部に三筋壺に類似する沈線を巡らせるものである。胴部の沈線は、二条の沈線を三段巡らせるものが一般的であるが、時期によって沈線の本数や沈線の位置が変化することが指摘されている（植崎 1978; 村木 1998a）。

三筋文経容器は山城地域を中心に分布しており、京周辺の貴族層による埋経に使用されたことを感じさせる（図3）。紀伊地域にも複数分布しているが、紀伊地域は経筒の型式も京周辺と同様の様相を示すことが指摘されており問題はない（村木 1998a）。それを裏付けるように、紀伊地域での出土は貴族層も訪れた聖地である熊野の新宮経塚群や、清原信俊の埋経に用いられた三筋文経容器が出土した粉河産土神社経塚

などであるので、京周辺から持ち込まれたものであると考えられる。

陶製無文経容器…（近江）横川、比叡西塔、比叡南岳／（山城）花背別所、鞍馬寺、修学院、稻荷山、石作、善峯寺、笠置寺／（大和）金峯山⁵⁾／（伊勢）多度大社、青山、峯連山、漆、横谷墳墓群、神宮寺、丁塚、豆石山、朝熊山、蓮台寺滝ノ口、亀谷郷C遺跡、仙宮神社／（伊賀）猪田／（紀伊）高野山、熊野本宮、備崎、那智、神倉山、如法堂／（丹後）真名井神社

無文経容器は、三筋文経容器が山城地域に集中していたのに比較して、広域に分布しているといえる（図4）。無文経容器は特に山城地域と



図3 陶製経容器（三筋文）の分布（筆者作成）

伊勢地域に集中し、二大集中地域といえるが、三筋文経容器の集中する山城地域と、無文経容器のみが出土する伊勢地域とで傾向が異なることが窺える。

分布で注目すべきは、丹後地域に1点のみ出土する陶製経容器である。従来、丹波、丹後、但馬などの地域に陶製経容器は出土していないとされており、本例は異例である。先学によると無文の陶製経容器は、渥美窯産の無文経容器が渥美半島を抑えた伊勢神宮の神官層による朝熊山経塚群で多く用いられていることを指摘されていた（村木 1998a）。その丹後地域で唯一の無文経容器は、真名井神社経塚⁶⁾で出土している。真名井神社は元伊勢籠神社の奥宮であり、伊勢神宮との関係も非常に深い。真名井神社の陶製無文経容器の産地を明確に提示することは叶わないが渥美窯産である可能性が高いと考えられる。伊勢と関係の深いこの地での出土は、本論の主旨のひとつである造営主体が経容器に与え

る影響を考えるうえで重要な例であるといえる。こうした事例があることは、経容器が単なる流通圏や造営主体の財力の影響に留まらず、その背景にある地域社会の置かれた状況や、その背景にある宗教的影響まで反映している可能性が垣間見えるのではないであろうか。

（2）瓦質経容器…（近江）横川、九条／（山城）鞍馬寺、弁天島、東山松原、善峯寺、白川金色院、笠置寺／（大和）御蓋山、広瀬地蔵山墓地、石上神宮／（伊勢）東禅寺、漆／（伊賀）猪田／（紀伊）大藪、粉河産土神社、明王寺、高尾山、仮庵山、備崎、那智、神倉山／（播磨）江ノ上／（丹波）正釈寺、藤山、一ノ宮／（丹後）二ノ宮⁷⁾

瓦質経容器はやや硬質の一群である。「瓦質」として扱われるものは、色調や硬度に幅があり、その定義などは次章において分類を行い基準の詳細を示したい。

瓦質経容器は近畿に広く分布しており、多く



図4 陶製経容器（無文）の分布（筆者作成）

が陶製経容器の分布と重なるといえる（図5）。しかし、陶製経容器の集中している伊勢地域の中心部（伊勢市周辺）からは出土していないことは分布傾向の特徴であるといえる。陶製経容器を使用できなかった層の代用品としての使用の可能性を指摘されているので、代用品としての使用を想定すれば単なる流通圏の差とはいえないであろう（菅原1989）。同様に専用品の陶製経容器を豊富に使用する山城地域周辺と伊勢地域の地域性の比較に関して、ひとつの指標となる可能性がある。

(3) 土師質容器…（近江）横川／（山城）花背別所、鞍馬寺、弁天島、石作／（大和）広瀬地藏山墓地／（伊勢）漆、蓮台寺滝ノ口／（紀伊）熊岡、備崎／（摂津）下深田、清水／（播磨）萩原、北別僧、伽耶院、王子神社、王塚古墳、福地、栗田、江ノ上、甲山、山吹山、八祖山／（丹波）篠神社、今市中、上板井、西山北、上小野原、

立石／（丹後）天台南谷遺跡、二ノ宮、河原山、大虫神社、籠神社、水戸谷遺跡、今西、通り、左坂、幾坂、今市、笛原寺、下宮、杉谷、大田南遺跡、いちの坂、御堂岡、山の神2号、郷、蔵谷、山形古墓、天王山、豊谷遺跡、谷垣、永留、海士、権現山、西明寺、栃谷、新側／（但馬）畑森、宮ノ谷、一乗寺、比丘尼、馬場ヶ先古墳、田多地、野上

土師質容器は出土遺跡数として最も多くの遺跡から出土しているが、墳墓の蔵骨器との区分の問題⁸⁾は未だ解決していない（図6）。本論では、経塚として取り上げられたことのある遺跡を抽出し取り扱ったが、墳墓が含まれている可能性は排除できず、名称を「経容器」とせず「土師質容器」の名称を使用した。

最も軟質で粗製品であり、形態としては円筒形の筒身に宝珠形のつまみをもつ蓋や皿状の蓋が伴うものが多いが、一部では蓋がなく倒置する形態で使用される。つまみは本来、宝珠形を



図5 瓦質経容器の分布（筆者作成）



図6 土師質容器の分布（筆者作成）

模したものであると考えられるが、土師質容器ではほとんどで意匠が崩れている。

分布傾向としては、丹後地域に極めて集中しており、丹波北部地域や但馬地域などの周辺地域にも広がりを見せる。この他にも、播磨、摂津地域や山城地域にも比較的密に分布しているが、特に丹後地域での出土遺跡数は、経塚造営の中心地ともいえる京周辺の経塚の数をも凌ぐ。こうした出土数の多さの背景には、一定数墳墓の蔵骨器が含まれている可能性が高いと考えられるが、この地域の経塚造営期間が長期に亘ることも影響していると考えられる。

(4) 須恵質経容器…(山城) 弁天島／(摂津) 滝ノ奥、下深田／(播磨) 北坊、伽耶院、王子神社、二塚古墳、円満寺、西田原、鶏足寺、宮山／(丹波) 稲葉山、高田山、平石山、上板井、小野原住吉

播磨地域を中心に摂津西部地域や丹波西部地

域に分布している(図7)。東播系須恵器の窯を擁する播磨地域に密に分布することから東播系須恵器の窯で製作されたものが主体であると推察することが許されよう。生産窯に製作を依頼して作られた専用品であることから、転用品である東播系須恵器の甕を用いた経塚より、高位の層による使用と考えられる。

(5) 石製経容器…(近江) 横川／(山城) 浄土寺南田／(大和) 御蓋山／(紀伊) 那智／(和泉) 槇尾山

石製経容器は近畿ではかなり稀有な材質であり、5遺跡で確認されるのみである(図8)。もう一方の経塚の集中地域である九州で、石製経容器が多く用いられるのとは対照的であるといえる(村木 1998b)。分布の傾向に大きな偏りはなく、近江、山城、大和、紀伊、和泉に分散しているが、京から熊野三山に向かうルート上に重なるといえるので、京周辺の造営主体によるも



図7 須恵質経容器の分布(筆者作成)



図8 石製経容器の分布 (筆者作成)

のであることが想定される。

石製経容器の形態は、5遺跡のうち横川（3点）、御蓋山（2点）、槇尾山では円筒形を呈しており、浄土寺南田のみ櫃形（箱形）である。また、那智経塚では蓋のみが確認されている。石材の種類は、九州の石製経容器で滑石製を主として一部で軽石製を用いている一方で、近畿で用いられるのは花崗岩もしくは凝灰岩である（村木 1998b）。

(6) 特殊容器

比較的出土数がまとまってみられる専用品とは違い、少数のみが出土する特殊な容器が用いられた事例がある。本論では陶器系・土器系経容器を中心に扱うものであるが、経容器を考えるうえで確認しておきたい。横川経塚では、内部に経箱を納めた銅塔が出土しており、この銅塔は1031年に上東門院によって納められたものであることが知られる（滋賀県教育委員会 1979）。

銅塔は、いわば外容器の役割をしているものである。初期の埋経事例や間接容器（外容器）を知るうえで重要な遺例であるといえる。

このほかでは、油江経塚から木製の曲物が出土している（梅原 1925a）。転用品の可能性もあるが、出土状況からは外容器の役割を果たしていた可能性が考えられるものである。高野山経塚で木製内容器が使用された事例もあり、経塚では一定数の木製容器が用いられていた可能性が考えられる（蔵田・巽 1975）。

2.2 転用品の傾向

つぎに、日用品として使用される甕や壺などを転用したものについて確認しておきたい。東播系須恵器の甕、常滑焼の甕・壺、十瓶山窯須恵器の甕については、それぞれの生産窯で編年が試みられており、そちらを参考とする。

(1) 常滑焼（甕・壺）…（近江）横川／（山城）

花背別所、弁天島、北野天満宮／（伊勢）豆石山、朝熊山、蓮台寺滝ノ口／（伊賀）猪田〈三筋壺〉、霊山／（紀伊）隅田八幡神社、粉河産土神社、比井王子、高尾山、仮庵山、備崎、神倉山〈三筋壺〉、庵主池／（和泉）槇尾山／（摂津）大門寺、若宮八幡／（丹波）正釈寺／（丹後）塚ヶ谷／（但馬）野上

転用品では、常滑焼の甕や壺が多く用いられており、比較的広域に分布している。山城周辺や伊勢などにまとまって使用されるが、播磨周辺では出土していない（図9）。既に先学によって示された傾向であるが、東播系須恵器の転用品と分布傾向を異にしている（村木 1998a）。資料数が増加した現在においても、その傾向に相違はない。

常滑焼の甕や壺が転用される時期は、常滑窯の「赤羽・中野生産地編年」⁹⁾で1b型式から5型式（1130～1250）のものがみられるが、主体は1b型式から3型式である（中野 1995）。甕がほと

んどの事例を占めるが、一部では三筋壺を使用している。

（2）東播系須恵器…（山城）弁天島／（紀伊）大藪、明王寺、高尾山、朝来、那智／（摂津）二本松古墳／（播磨）高男寺、鳥羽、栗田、江ノ上、瀧ノ内／（丹波）篠神社、大道寺、田ノ口、小野原住吉／（丹後）橋木林、天王山／（但馬）久畑、清滝神宮、一乗寺、妙楽寺D、鎌田・若宮古墳

近畿の経塚で多く用いられる、もう1種の転用品に東播系須恵器がある。分布傾向は、東播系須恵器の生産窯を抱える播磨地域や周辺地域に広がっている（図10）。東播系須恵器には長年の研究の蓄積があり、鉢を中心として様々な編年が提示されているが、萩野繁春の編年¹⁰⁾を用いて時期を確認したい（萩野 1985）。経塚の外容器として使用される時期は、萩野編年でⅢ期からⅤ期（12世紀中葉～13世紀中葉）のものである。



図9 常滑焼（甕・壺）の分布（筆者作成）



図10 須恵器系転用容器の分布（筆者作成）

(3) その他の転用品

常滑窯や、東播系須恵器甕などの主要な転用品以外にも複数の転用品がみられる。産地未詳なものも一定数含まれるが、一部を取り上げて傾向を確認したい。

渥美焼（甕）…（紀伊）那智、庵主池

紀伊の那智三山付近では、渥美焼も外容器に転用されている。このうち、庵主池経塚の三筋文をもつ個体は、文様の形態から檜崎編年V期（12世紀第4四半期）に位置付けられる（檜崎 1978）。

越前焼（甕・壺）…（丹波）正釈寺？／（丹後）水戸谷遺跡、山の神

丹波窯や常滑窯と分離が難解で、産地が共通認識に達していない個体¹¹⁾もみられるが越前焼も外容器に転用される。正釈寺経塚例は13世紀前半、山の神経塚例は13世紀中葉に比定されている（吉岡 1985）。

珠洲焼壺…（但馬）大平寺

大平寺経塚例が、近畿の経塚で唯一の事例である。珠洲窯研究における壺A類に該当し、体部の張りや口縁部から吉岡康暢の珠洲窯編年でⅡ期の13世紀前半に位置付けられる個体であると考えられる（吉岡 1994）。

十瓶山窯須恵器…（山城）弁天島／（大和）御蓋山¹²⁾

北部九州を中心として、西日本の経塚ではしばしば外容器に転用されているが、近畿ではごく少数である（図10）。九州を中心とした西日本で、十瓶山窯の甕が外容器に転用されるのは12世紀前半であるとされるので、近畿でもこの時期に使用されたもののようである（片桐 2004）。

北近畿型…（丹波）藤山／（丹後）天台南谷、上野／（但馬）大生部神社、入佐山

荻野繁春によって北近畿型とされた瓦質の須

恵器系丸底甕も経容器として使用されている(図10、荻野1993)。北近畿に集中するので、流通圏内で日用的に使用されたものを転用したものと考えられる。この甕の使用時期は、12世紀代を想定されているので、経塚でもこの頃に用いられたものと考えて差し支えないであろう(荻野1993)。荻野が北近畿型に分類した藤山経塚の須恵器甕について、吉岡康暢は魚住窯30号、33号窯灰原などに類例が認められると指摘している(吉岡1985)。北近畿型も東播系須恵器に関係するものであろう。やはり、近畿の西部では東播系須恵器の系譜に連なる類のものが外容器に転用されたようである。

その他の須恵器系容器

(山城)四明ヶ嶽、吉田、弁天島／(紀伊)備崎／(摂津)池田／(播磨)北坊、家氏／(丹波)平石山／(丹後)今市／(但馬)井ノ谷

産地未詳などの須恵器系転用容器や産地不詳の陶器類が確認されている。須恵器系容器は、産地不詳でも分布傾向が近畿西部や北近畿に集中する傾向から、播磨周辺の須恵器生産地によって製作されたものが多いのであろう。

2.3 分布にみる地域性

ここまで、材質別に分布の傾向を中心に確認してきたが、材質別にみた分布では一定の傾向がみられた。特に顕著な傾向がみられるのは、丹後周辺地域と播磨周辺地域である。

まず、播磨地域周辺では須恵器系の容器を豊富に用いている。東播系須恵器の生産窯を擁する播磨に特に密に分布しており、須恵質経容器と東播系須恵器甕が中心である。専用品、転用品ともに須恵器系容器が主体の地域である。

つぎに、丹後周辺地域では、丹後、但馬、丹波北部地域を主体として、かなりの密度で土師質容器を用いている。播磨や摂津西部にも土師質容器の分布がみられるが、分布密度から主体は丹後周辺であると考えられる。

丹後周辺地域と播磨地域周辺は、土師質容器などで分布圏が重なる部分もあるが、主として用いる材質は、丹後周辺地域で土師質容器、播磨地域周辺では須恵器系容器を中心としている。いずれにしても、丹後地域周辺や播磨地域周辺は、山城周辺などとは地域性として一線を画していることが窺える。

材質別に分布を確認し、最も慎重に検討が必要なのは、山城周辺や紀伊、伊勢などの地域である。大枠では、同様に陶製経容器を用いている一方で、一部では分布に差異がみられる。陶製経容器で三筋文と無文の分布に偏りがみられることや、陶製経容器と類似の分布傾向を示す瓦質経容器が伊勢地域の中心部には出土しないことなどが挙げられる。これらの地域は、先学の地域区分において難解であった地域であるので、次章以降該当地域の詳細な地域区分について検討したい(村木1998a)。

3. 専用経容器の考察

前章では、材質別に分布の傾向を中心として確認してきた。ここでは、専用品の経容器について検討していく。専用品のうち、地域性などに傾向がみられる土師質容器や須恵質経容器以外に焦点を当て、陶製経容器、瓦質経容器、石製経容器について考察していく。

3.1 陶製経容器

陶製経容器は大きく三筋文経容器と無文経容器に大別でき、それぞれの分布の傾向は既に触れてきたので、経容器自体の各部の形態や、数値を中心とした法量などから時期差を中心に検討してみたい。

(1) 形態分類

まず、陶製経容器の各部の形態についてである。蓋と筒身に分けて窺い、それぞれの各部形態を以下のように分類した。

①蓋の各部形態

蓋は、天井部、端部、つまみの形態について分類した（図11）。

<天井部形態>

I⇒緩やかな湾曲をもつもの

II⇒アーチ状の弧を描き下方に降りるもの

III⇒平坦な天井部からやや湾曲し長く下方に延びるもの

IV⇒ほぼ平坦な天井部をもつもの

<端部形態>

a⇒外方へ延びるもの

b⇒端部付近にかけてやや内傾し下方に延びるもの

c⇒天井部からほぼ下方に降りるもの

d⇒端部付近にかえりをもつもの（攪乱された1点のみ出土）

<つまみの形態>

1⇒宝珠形つまみ

2⇒上部が扁平な宝珠形つまみ

3⇒無文のつまみ

4⇒相輪などを模した特殊なつまみ

0⇒つまみをもたないもの

②筒身の各部形態

筒身は、筒身部を三筋文と無文に大別し、それに加えて口縁部、体部の形態について分類した（図12）。

<筒身部形態>

三筋文⇒筒身部に三筋文を巡らせるもの

無文⇒筒身部に三筋文をもたないもの

<口縁部形態>

a⇒口縁部附近に段状の受け部をもつもの

b⇒口縁部附近を内に窪めるもの

c⇒口縁部にかけて内傾し端部を上方につまみ上げるもの

d⇒内傾するもの

e⇒口縁部附近で変化し内傾するもの

f⇒大きな変化を持たずほぼ真っ直ぐ延びるもの

g⇒口縁部附近の外面に突帯状の受け部をもつもの

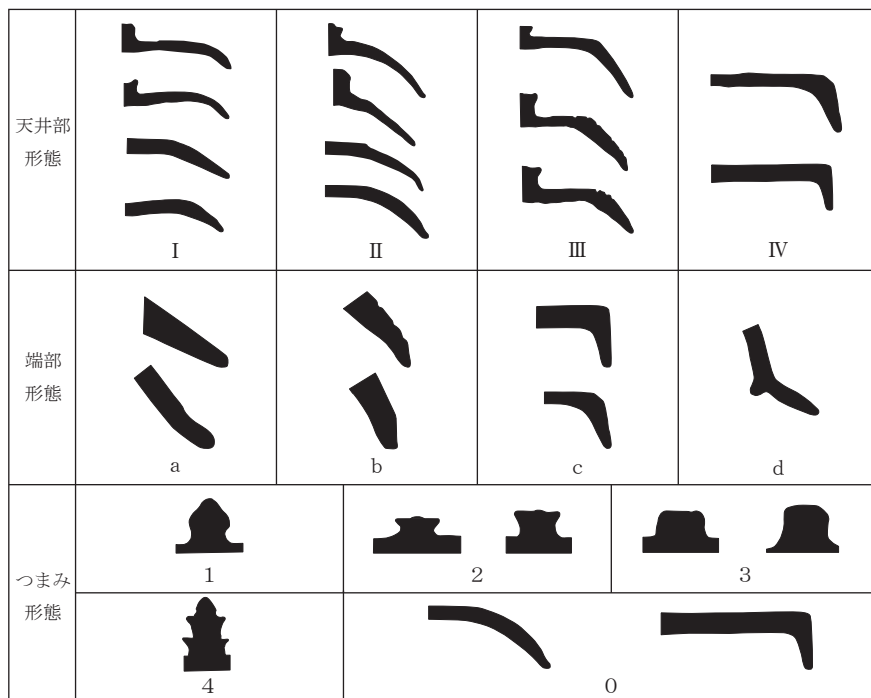


図 11 蓋の形態分類

（報告書・筆者実測図を参考に一部トレースし作成）

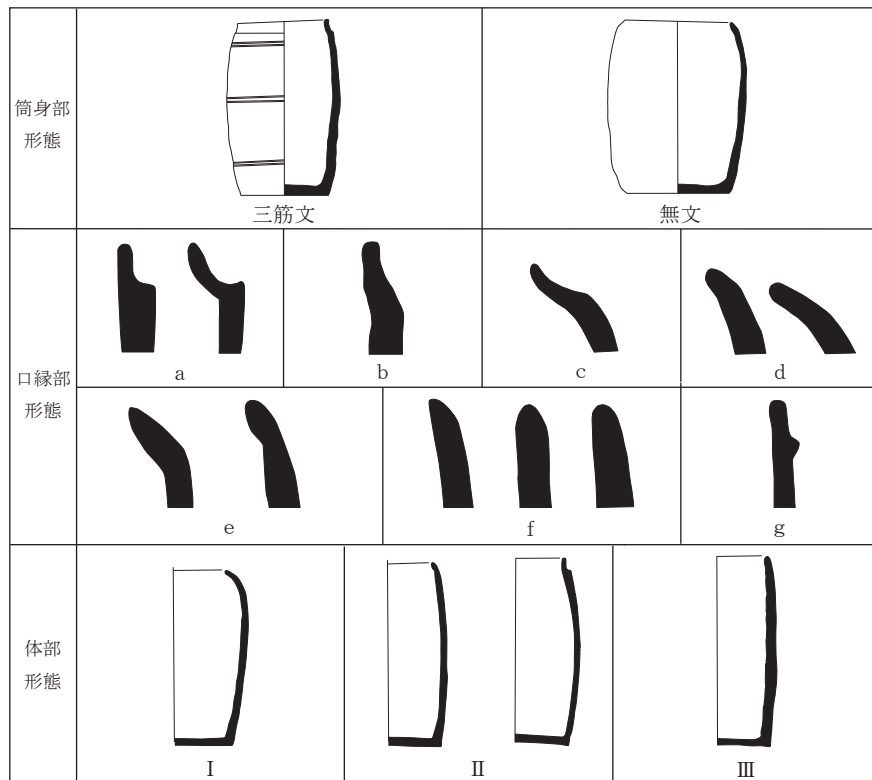


図 12 筒身部の形態分類
(報告書・筆者実測図を参考に一部トレースし作成)

＜体部形態＞

I⇒上部は大きく内傾した膨らみを有し底部付近にかけて窄まるもの（棗型）

II⇒胴部に膨らみを有するもの

III⇒胴部に膨らみを持たずほぼ真っ直ぐ延びるもの

以上の各部の分類を参考に、時期を反映する各部の形態や組合せを検討し、時期的な様相を窺っていきたい。器高の縮小傾向に加えて、形態分類では蓋と筒身ともに端部や口縁部の形態に変化が見られ、時期的変化の影響を受けている部分である可能性が考えられる。

(2) 属性の時期的傾向

形態分類を行った各属性のうち、時期的な特徴を顕著に反映している形態について確認しておく（図13）。

まず、近畿の経塚出土の三筋文をもつ経容器

の主要産地である猿投窯では、三筋文の編年が組まれている（植崎 1978）。そのなかで、猿投窯の三筋文容器に13世紀に下る資料は確認されておらず、12世紀代に収まることが指摘されていた。しかし、近年では猿投窯の三筋文系陶器の生産窯では、1基に第3型式（11世紀末～12世紀前葉）の尾張型山茶碗が出土しているほかは、そのほとんどに尾張型山茶碗第4型式（12世紀中葉）・第5型式（12世紀後葉～13世紀初頭）が共伴することが示されている（愛知県史編纂委員会編 2007）。共伴遺物の年代から13世紀初頭まで生産が続けられた可能性があるが、生産の中心時期は12世紀であると考えられる¹³⁾。

また、三筋文をもつ経容器の時期を示す要素としては、三筋文の沈線の位置が時代が下ると上部に移ることが指摘されている（植崎 1978）。

つぎに各部の形態についてである。口縁部形態eは、紀年銘を有するなど年代が窺えるものが

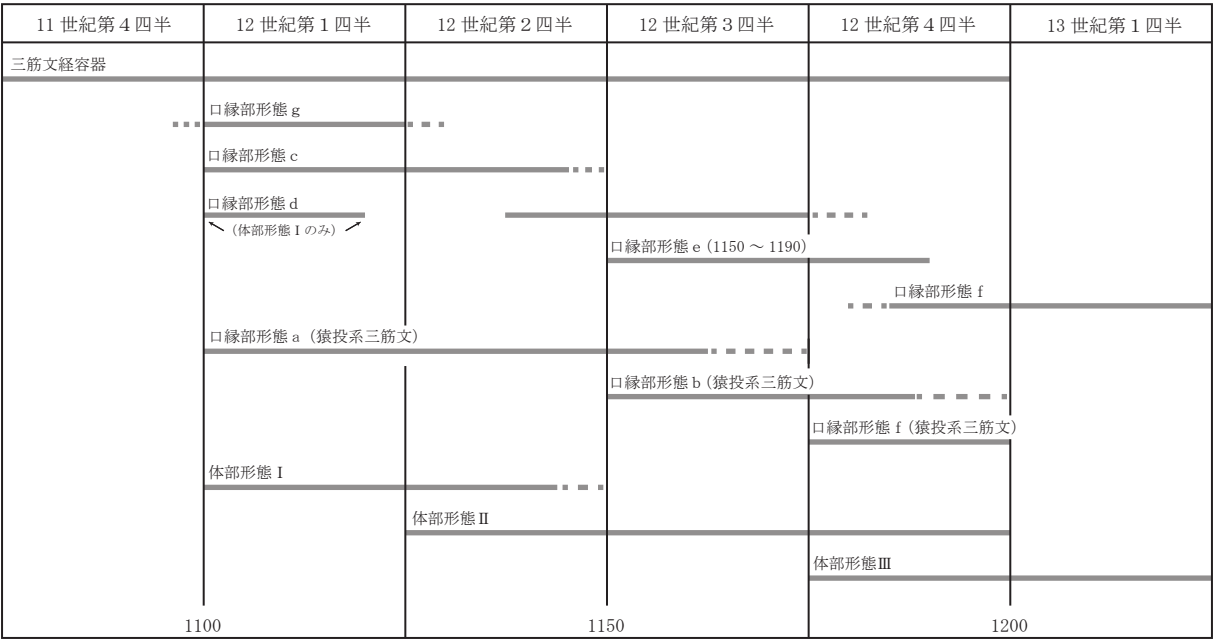


図 13 属性の時期的傾向（筆者作成）

多い。朝熊山5号（1156）、朝熊山3号B（1169）、神宮寺（1172）、朝熊山1号（1173）、朝熊山10号C（1185）が該当し、口縁部形態eは1150～1190年の年代が窺える。口縁部形態d類の朝熊山8号例が、朝熊山5号例と同様の字体で同日の紀年銘が認められるので、口縁部形態eと口縁部形態dが併行して存在する期間があることになる。

口縁部形態gは、粉河産土神社1号（三筋文）、高野山奥之院、熊野本宮で、12世紀第1四半期の年号が確認できる。器高も3例すべてで33cm前後であり、三筋文、無文ともに12世紀第1四半期の年代が与えられる。三筋文と無文に共通して、同様の年代をもつ紀年銘が確認されていることから、ある程度時代的特徴を共にしていることを予見させる。善峯寺経塚例にも口縁部形態gの陶製経容器が発見されているが、器高が25cmとやや小さく、共伴遺物の年代からやや遅れる可能性がある。口縁部形態gで、且つ器高が30cm以上のものが12世紀第1四半期の年代を与える目安となる可能性があるといえる。

体部形態では、体部形態I所謂棗型の時期の位置付けが重要である。棗型の体部形態Iは、朝熊

山経塚群や鞍馬山経塚など、12世紀前半から造営が行われた比較的古い時期が想定される経塚から出土している。しかしながら、朝熊山経塚群と性格が類似する経塚群の蓮台寺滝ノ口経塚群では確認されていない。蓮台寺滝ノ口経塚群の造営期間は、12世紀中葉から13世紀第3四半期が想定されているので、それに先行する朝熊山経塚群の造営時期である12世紀前半頃に、体部形態Iが用いられたことが想定される（伊勢市教育委員会 1998）。棗型の体部形態Iは、12世紀前半までで消滅し、同時に口縁部形態が移り変わっていくことが考えられる。口縁部形態c類は体部形態Iにみられることが多く、この時期に位置付けられよう。一部の体部形態Iには、口縁部形態dをもつものも確認できる。

こうした陶製経容器の編年は、生産窯である渥美窯などで既に検討がなされている。近畿で最も豊富な陶製経容器を用いている朝熊山経塚群では、経塚群出土の渥美窯経筒編年が組まれている（山澤 2011）。また、生産窯である渥美窯の経筒外容器編年として、『愛知県史』に編年が提示されている（愛知県史編纂委員会 2012）。

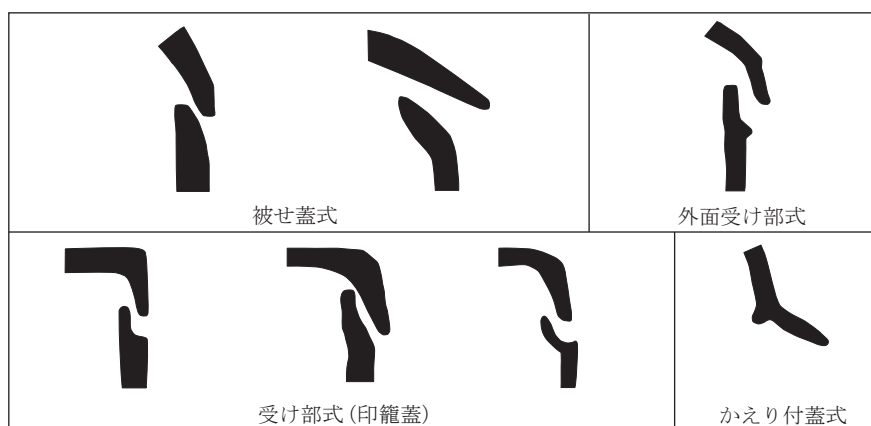


図 14 蓋と筒身の組み合い方
(報告書・筆者実測図を参考に一部トレースし作成)

これらには、差異が認められるものの稟型を呈するものを最初期に位置付けるなどの共通性も認められる。

なお、従来の編年では蓋と筒身を合わせて提示されていたが、蓋と筒身の組み合わせ方には、複数のバリエーションがあるので、経容器の変化を考察するうえでは筒身を参考にして編年を試みていきたい(図14)。

ここまで、色濃く時期的変化を示す形態について検討してきた。最も色濃く時期的な変化を反映している部分、口縁部形態であることが明らかになったので、口縁部形態の変遷について確認しておきたい。従来の編年研究や、紀年銘をもつなどする基準作があるものを中心に前後関係を検討し、型式学的検討を考慮して変化を窺った(図15)。段状受け部は次第に形骸化が認められるといえる。しかし、渥美窯では段状の受け部を用いず、器形の時代的变化に合わせて内傾する位置が変化する。次第に内傾が緩やかになり、次第に口縁部附近にのみ内傾を残すように変化する。

(3) 属性の組合せパターン

各部の形態分類を行ったので、各部の分類の組合せについて確認しグルーピングを行った。グルーピングに際して、蓋ではつまみはバラエ

ティに富んでいるので、天井部形態と端部形態の組合せを主とした。筒身では、体部形態がある程度口縁部形態を反映し連動しているので、筒身部形態と口縁部形態の組合せを主としている。

まず、蓋の属性対応について確認する。蓋では、天井部形態と端部形態の組合せにより、8類に区分できる(表1)。

つぎに、筒身の属性対応である。筒身部形態と口縁部形態の組合せから、三筋文4種と無文7種のあわせて11類に区分できる(表2)。無文では、分類した全ての口縁部形態が確認されるのに対して、三筋文では4種のみである。三筋文では、口縁部形態gの位置付けは課題であるが、大まかには口縁部形態a→b→fのような口縁部の簡素化を示しているといえる。図15の口縁部形態の変化を裏付けているといえる。

最後に、蓋と筒身で確認できた属性対応の種類の設定関係について確認しておく(表3)。一応の設定関係を提示したが、蓋が筒身の器高に対して大きく、被さるような場合も多く、単純に口径では決められない(図14)。蓋と筒身のセット関係も、決まった属性をもつもの同士がセット関係を示すわけではなく、複数の蓋と筒身の組合せが認められる。発見時既に攪乱によって、セット関係が不明な場合も多く、今後

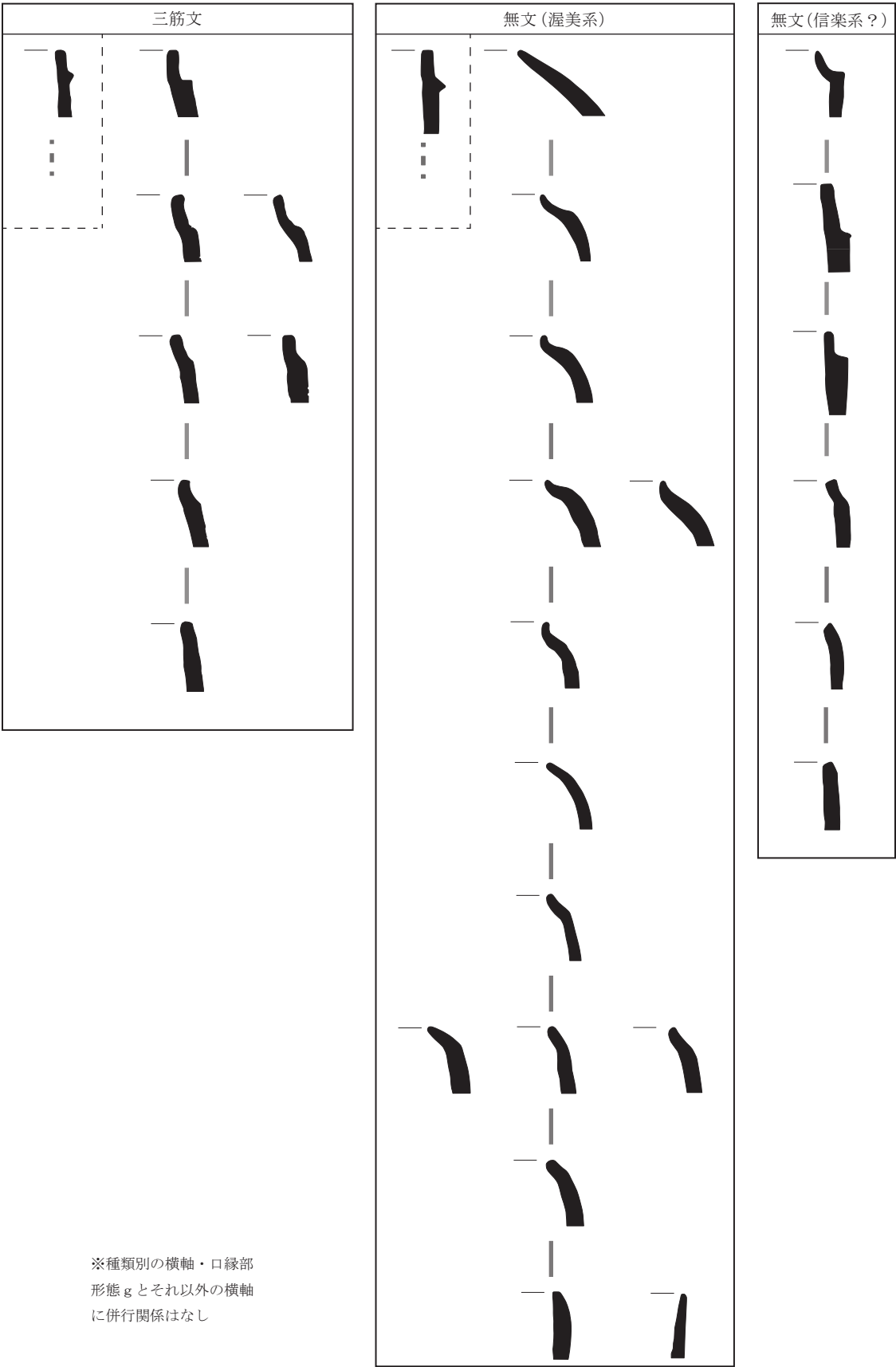


図 15 口縁部形態の変化
(報告書・筆者実測図をトレースし作成)

表 1 蓋の属性対応表（筆者作成）

	天井部形態				端部形態				つまみ				
	I	II	III	IV	a	b	c	d	1	2	3	4	0
Ia	●				●						●		
	●				●							●	
	●				●								●
Ib	●					●				●			
	●					●					●		
IIa		●			●					●			
		●			●						●		
		●			●								●
IIb		●				●				●			
		●				●					●		
		●				●							●
IIIa			●		●					●			
			●		●						●		
			●		●								●
IIIb			●			●			●				
			●			●				●			
			●			●							●
IVb				●		●							●
IVc				●			●		●				
				●			●			●			
				●			●						●

未知のセット関係が明らかになる可能性もあるので、時期的な変遷を検討するうえでは蓋と筒身で分けて検討することが望ましいであろう。

（4）数値からみた陶製経容器

ここまで、器形の側面から陶製経容器について傾向を窺ってきたので、ここでは口径や器高などの数値の側面から検討していく。陶製経容器は、胴部に膨らみをもつものや口縁部付近で大きく変化し内傾するものが多くあるので、一般的な口径と器高によって算出される法量に限らない方法を用いて検討してみたい。

まずは、先学に指摘されている時期的傾向を、紀年銘などを有し年代が特定できるものから近畿の陶製経容器で再確認しておく（図16）。外容器は、経筒の変化と同様に器高が縮小することが早くから指摘されているが、近畿の陶製経容器でも概ね時代の下降に伴って器高に縮小傾向が認められる（石田 1929）。しかし、同時期の平均値からは外れる器高をもつ個体も認められ、単に器高のみで時期を判定することは困難である。口径では、器高のような傾向はみられず、口径はあまり時期的変化を反映していないといえる。

表 2 筒身の属性対応表（筆者作成）

	筒身部形態		口縁部形態							体部形態		
	無	三	a	b	c	d	e	f	g	I	II	III
無文A類	●		●									●
無文B類	●			●							●	
	●			●								●
無文C類	●				●					●		
	●				●						●	
	●				●							●
無文D類	●					●				●		
	●					●					●	
	●					●						●
無文E類	●						●				●	
	●						●					●
無文F類	●							●			●	
	●							●				●
無文G類	●								●			●
三筋文A類		●	●								●	
		●	●									●
三筋文B類		●		●							●	
		●		●								●
三筋文C類		●						●			●	
三筋文D類		●							●			●

表 3 蓋と筒身の属性対応表（筆者作成）

	蓋型式								
		Ia	Ib	IIa	IIb	IIIa	IIIb	IVb	IVc
筒身型式	無A								●
	無B								●
	無C			●	●				
	無D	●		●	●	●	●	●	
	無E	●	●	●		●	●		●
	無F	●	●	●	●		●		●
	無G				●		●	●	●
	三A								●
	三B						●		
	三C								●
	三D								

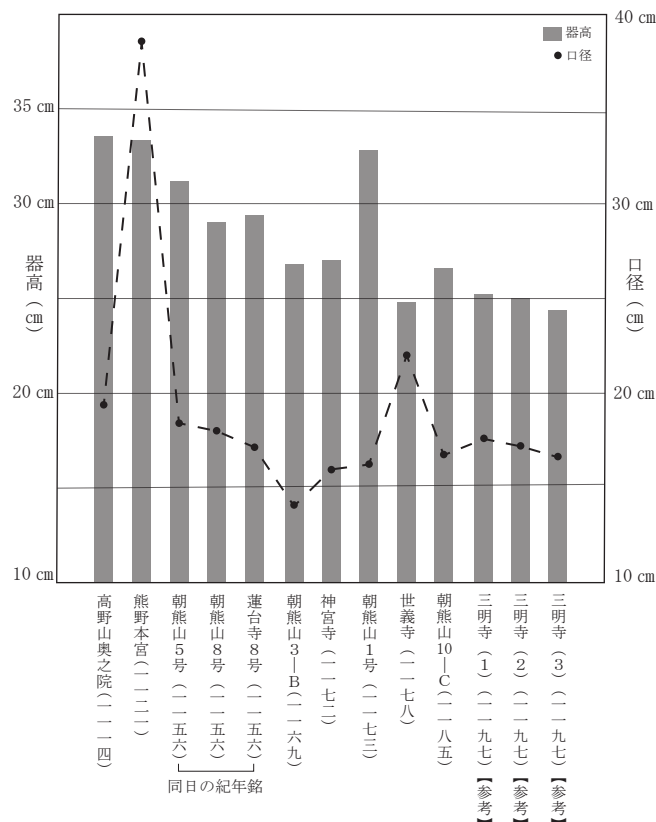


図16 口径・器高の時期的傾向
(各報告書の図を参考に筆者作成)

つぎに、器形の変化の傾向を窺っていく。器形の変化を窺うため、口径と最大径の差と底径と最大径の差を用いてみたい。まず、紀年銘を有する陶製経容器を参考とする(図17)。

口径と最大径の差は、1170年頃まで差が大きくなり、以降急激な縮小傾向が見て取れる。底径と最大径の差では、1170年から1180年頃まで拡大傾向が続き、以降緩やかな縮小傾向を示すが、口径のような急激な縮小傾向はみられない。1185年以降は、口径と最大径の差がほぼなくなって直行することを示し、口縁部形態が主流となるといえる。

また、少数ではあるが変則的なものも見受けられる。神宮寺例は、蓮台寺滝ノ口15号に似るので、前代の傾向を残しているといえ、朝熊山3号B、朝熊山1号、朝熊山10号Cでは、同様の傾向を示しながら緩やかな変化がみられる。世義寺では、後代に主流となる三明寺例に似た数値

を示すので、器形の変化を先駆けているといえよう。これらの変則的な数値を示すものが併存することから、器形の変化や口縁部形態の変化は、いくつかの形態が併存しながら変化してきたことが提示できる。特に前代の傾向を残す個体や、後代に主流となる形態の先駆けの個体が共存する1170年から1185年までの時期について、器形の変化における過渡期であるといえるかもしれない。大枠の傾向としては、胴部中央が張るものから口縁部にかけて内傾が大きくなり、以降は、器形が下部にかけて窄まる形状となっていくといえる。

この傾向をひとつの参考として、伊勢地域の無文経容器に同様の手法を用いて時期的な変化を検討する。器高で窺えるのはおよその時期であり、口縁部形態の時期にも併存期間が認められるので、型式学的検討により想定される口縁部形態の変化順に並べ、器形の変化の傾向を数

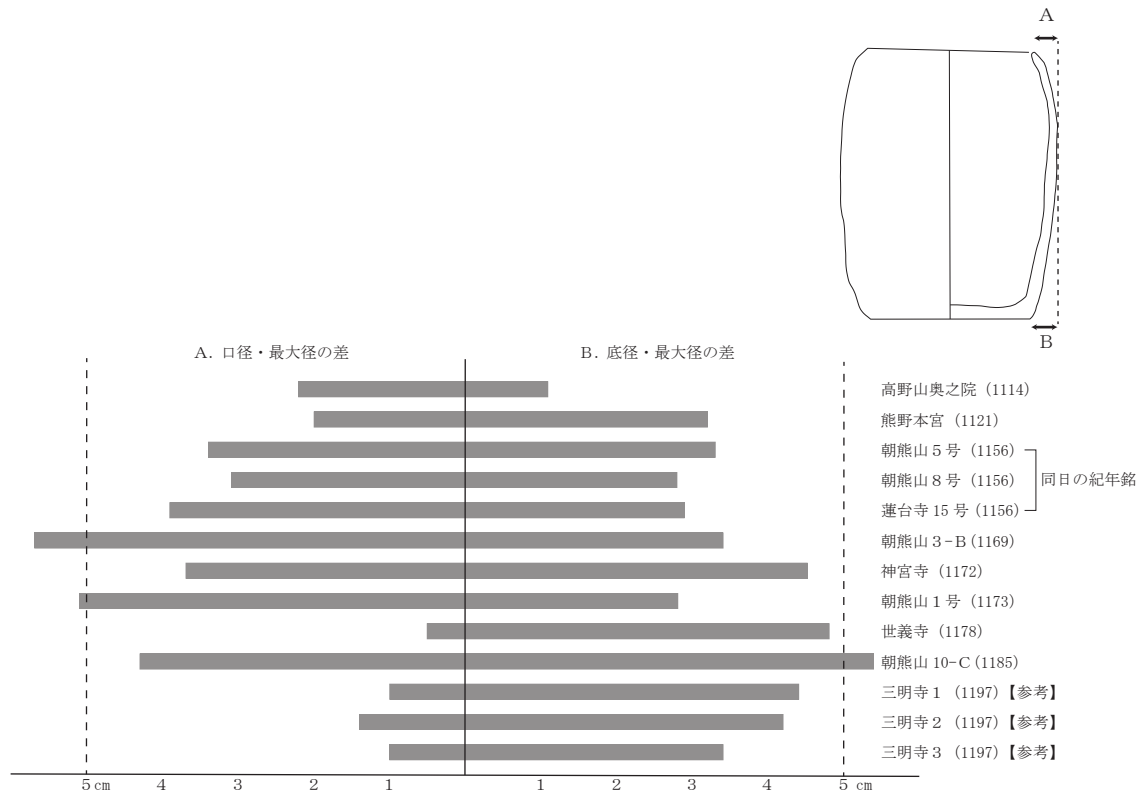


図 17 数値からみた陶製経容器の器形
(各報告書の図を参考に筆者作成)

値的に検討した¹⁴⁾(図18)。口縁部形態と胴部の張りの関係性について可視化することができると考えられる。

やや個体差や変則的な個体がみられるが、全体を通しての所見として時期の下降とともに口径と最大径の差が減少していく傾向が認められる。口縁部形態cやいわゆる棗型を呈する個体などで、口径と最大径に7～8cmほどあった差は、口縁部形態f類ではほとんどなくなる。これは、口縁部形態の変化に伴って、器形も変化し胴部の張りがなくなることを示している。いわゆる棗型を呈する個体では、口径と最大径に約7～8cmの差が認められるが、口縁部形態d類などこれを引き継ぐ口縁部形態では、口径と最大径の差が約5～6cmで口縁部形態と胴部の張り、つまり器形は相関関係が認められるといえよう。また、底径と最大径差には口径と最大径の差ほどの顕著な縮小傾向はみられないので、時期の

特定には口径と最大径の差や、口縁部形態を用いることが有効と考えられる。

ここでさらに、同じ口縁部形態のなかでの胴部の膨らみの変化について、紀年銘をもつ個体が複数あり12世紀後半に用いられたことがわかる口縁部形態eから検討していく(図19)。紀年銘をもつ個体で類似した数値を示すのは、朝熊山5号(1156)と神宮寺(1172)が類似し、朝熊山3号B(1169)と朝熊山1号(1173)も類似している。紀年銘をもつ個体でも、明確な順を追った変化は認められない。器高順でみても明確な変化を確認できない。いずれも詳細な前後関係を窺うには至らず、単に胴部の膨らみで前後関係を判断するのは危険である。やはり、器高や胴部の張りよりは口縁部の属性が優先されると考えられる。

ここまでの検討から消費地編年の検討には、大まかな時期の傾向を表す器高と、時期的変化

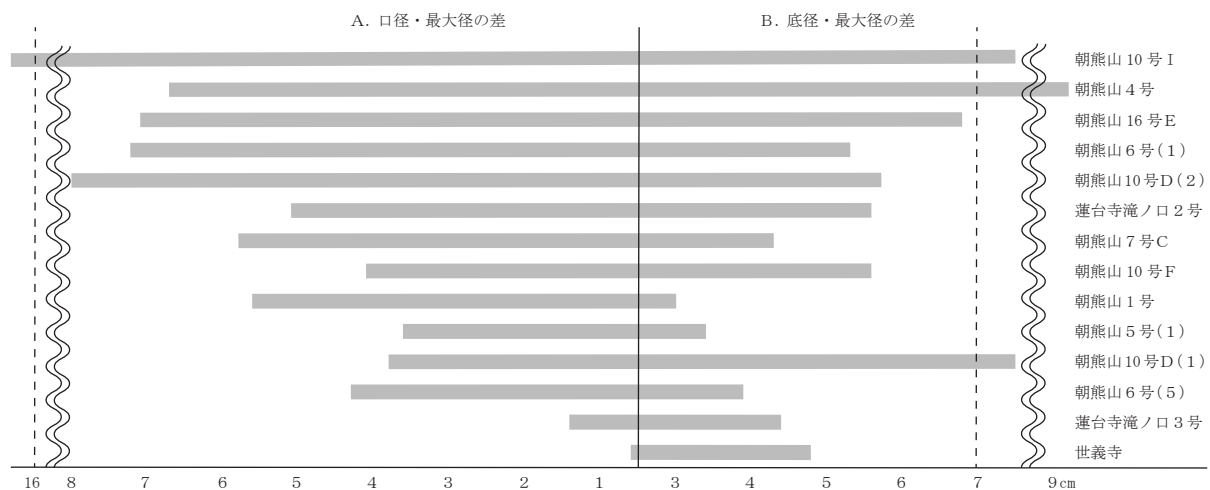


図 18 伊勢地域の最大径差（口縁形態順）
（各報告書の図を参考に筆者作成）

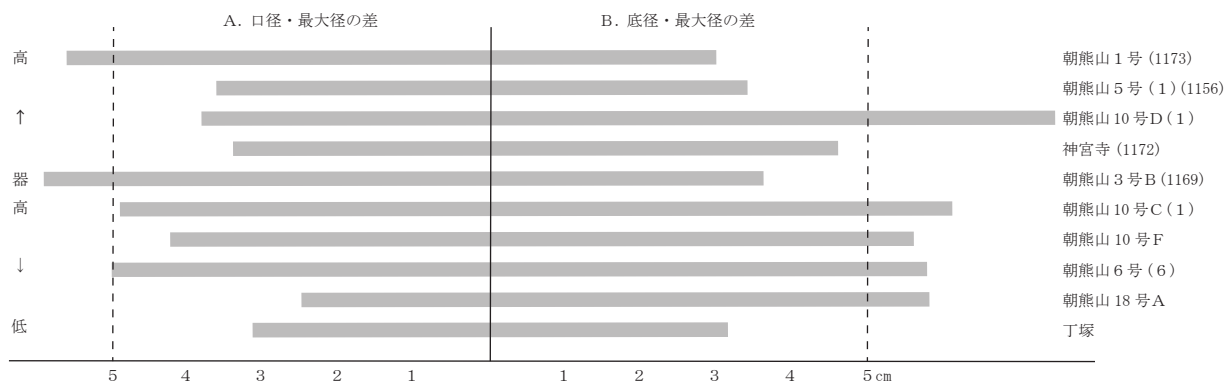


図 19 口縁部形態 e 類の器形差
（各報告書の図を参考に筆者作成）

を一番反映している口縁部形態を参考とすることが必要であるといえる。また、口縁部形態では、段状の受け部に簡素化がみられ、渥美窯では口縁部の変化に伴って、器形が橐型から寸胴形へと変化していることが数値的にも表せる。

3.2 瓦質経容器

瓦質経容器は比較的広域に分布しており、割合点数が確認できる。しかし、近畿では東海産を中心とした豊富な専用陶製経容器の存在することから、瓦質経容器はこれまで粗製品や模倣品として、経容器研究において注目を浴びることはなかった。よって、近畿出土の瓦質経容器の総合的、広域的な視点による詳細な検討は行

われていない。そこで、瓦質経容器に目を向けて、その定義、分類を行ったうえで使用時期や使用階層を検討してみたい。瓦質経容器が、先学に指摘されるような単なる粗製品や模倣品であるのか、その位置付けを考えたい。

(1) 瓦質経容器の定義

瓦質経容器の検証を行う前に重要となるのが、瓦質経容器の定義である。これまで明確な共通の定義が行われていなかったために、同一の経容器が別の材質に分類された事例も見受けられる。よって、瓦質経容器について考察を行う前に、本論において「瓦質経容器」として扱うものの定義付けを行っておきたい。

経容器を材質で分けた際、主に黒色や灰色を呈し、やや硬質の一群があり、従来では「瓦質」や「瓦製」などと複数の名称によって呼称されてきた。これらの一群に対して本論では、「瓦質経容器」の名称を用いる。「瓦質」という名称を用いると、一般には燻しがかけられた黒色を呈する土器を想起させるが、近畿の瓦質経容器は一様でなく、ここで用いる「瓦質」という語には幅がある。本論において「瓦質経容器」とする経容器は、先学や各経塚の報告書において、「瓦製」、「瓦器製」、「瓦器質」、「瓦質」、「瓦質土器製」などと呼称されてきたものである。過去に瓦質と分類されてきたものは、瓦の系譜を想定させる硬質な瓦質焼成の経容器や、瓦器や瓦質土器のようにやや硬質で燻しをかけた土器を指しているようである。しかし、「瓦質」とするものの明確な基準は提示されていなかった。先学においては、「瓦製」や「瓦器質」などの語が用いられてきたが、本論においては「瓦質経容器」の語を用い、瓦の系譜に連なるもの、瓦器・瓦質土器の系譜になるものを含めて、広義において「瓦質」としている。便宜上「瓦質」の語を使用した。製作技法や焼成、燻しによる炭素の吸着にも個体差がみられる。いわゆる瓦器・瓦質土器系のものには、焼成や硬度だけで分類すると瓦質より軟質で寧ろ土師質に近いと言える資料が含まれる。しかし、そうした個体には表面の炭素吸着が甘い事例や、長年地表に露出していたため表面の炭素吸着の劣化が見られるものが存在する。単なる硬度による分類を行うと土師質との基準が曖昧となる個体が現れるため注意が必要である¹⁵⁾。

以上のように個体差がみられるが、次の3種のいずれかに該当するものを「瓦質経容器」に定義する。

まず、第1には製法において瓦の系譜に連なるものである。内面に布目痕、外面に縄叩きの痕跡が見受けられる、またはその一方の確認できるものである。これは瓦工人の手によって製作

されたことが想定できよう。第2には、一般的に瓦器・瓦質土器と呼称される類のものが挙げられる。焼成はやや硬質のいわゆる瓦質焼成で、最たる特徴は外面を中心として燻しをかけていることである。第3は、上記に挙げた瓦の製作技法によって製作されたものや、瓦器・瓦質土器の類で製作されたものの軟質製品である。最も他の材質との基準が難解なものであり、焼成、硬度では瓦質より寧ろ土師質に近い軟質の製品も含まれる。丹後周辺を中心にみられるような土師質容器との分類基準は、燻しによる炭素吸着をもつか否か、外面を中心に工具ナデなどで平滑に仕上げる調整の有無で区別する。焼成で瓦質と呼ぶにはやや軟質であっても、燻しをかけている場合や外面を中心としてヘラナデなどによって平滑に仕上げている場合は瓦質とする。現状において明確な炭素の吸着が確認できない事例も含まれるが、長年地上に表出していたことによって、外面の炭素吸着が劣化していることも考えられ総合的な判断が必要である。外面を平滑に仕上げるナデ調整は、縦方向の工具によるナデであることが多いようである。

このように技法や焼成の差は一様ではなく、陶製と比較して一様に粗製品とされてきた瓦質経容器には、土器工人や瓦工人の手に成るものが含まれているのである。

また、陶製や土製とされてきた個体においても、本論の定義では瓦質経容器に含まれるものが複数ある。

(2) 使用時期の想定

本論における「瓦質経容器」の定義付けを行ったので、ここで瓦質経容器の使用時期について検討してみたい。

まず、先学の指摘や他地域での使用例を参考に傾向を窺っておく。西日本における瓦器生産を研究した菅原正明は瓦器の経筒について、銅経筒、国産陶器経筒などの高価な経容器の代替品として高価な青銅製や陶製の経筒を入手でき

ない人々によって使用されたとした（菅原 1989）。さらに瓦器経筒の畿内における生産状況を図に示し、12世紀末から14世紀前半まで製作されたとしている。菅原が出現期とした12世紀末は、陶製経筒の隆盛期であるといえるので、陶製経容器との関係性や変化の関連性についても確認しておきたい。

まず、菅原正明の指摘を含め、12世紀に係る時期に近畿で瓦質経容器が用いていたのかについて考えてみたい。他地域の様相から考えると西日本では、四国の研究が見受けられ、片桐孝浩や首藤久士の考察がある（片桐 2004; 首藤 2009）。

片桐孝浩は、香川県下の経塚における瓦質土器製経筒外容器の編年を組み、使用時期に12世紀から13世紀前半を想定した（片桐 2004）。編年はⅠ期からⅤ期に分類し、口縁部に段状の受け部を持つⅠ類がⅡ期まで、それ以降は真っすぐ上方に伸びるⅡ類に移り変わることを提示した。こうした口縁部附近の変化は、陶製の生産窯などで指摘される傾向と同様である（楢崎 1978）。くわえて、ミガキの簡素化や焼成が軟質になることも指摘されている。これらの実年代として、12世紀第1四半期を第Ⅰ期に充て、以降1期の期間を四半世紀として、Ⅴ期を13世紀第1四半期としている。

また、首藤久士は四国の瓦質土器の変遷を考察しており、讃岐では日用雑器に先行して瓦質経筒外容器が出現すると指摘された（首藤 2009）。

瓦質の経筒外容器は、12世紀前半から13世紀前半に見られ、口縁部附近に段状の受け部を持つものから変化を持たずにそのまま上方に伸びるものに変化するようである。12世紀前半から中頃に口縁部附近に受け部を持つものを想定している。

四国の事例を参考とすれば、瓦質経容器は陶製経容器の変化をある程度反映して製作されたことが想定される。さらに、宗教的な特注容器である経容器が日用雑器に先行して製作されていることは近畿の瓦質経容器を考えるうえでも

重要な指摘である。

しかし、近畿では器壁に厚みがあり、器形に変化をもたない円筒形の瓦質経容器が多数含まれていることには注意が必要である。受け部を作らないものも多く、すべてが陶製経筒や青銅製経筒の模倣品として製作されていないと考えられる。

また、近畿の瓦質経容器には製作技法や器形に差がみられ製作の系統が複数考えられる。菅原正明は、西日本の瓦器経筒にもミガキを施すなどした技法のものと、内面に布目痕、外面に縄目叩きを残すものなど工人差がみられることを指摘している（菅原 1989）。製作者として、前者を土師器工人、後者は瓦工人によって製作されたと考えられた。菅原が指摘するように瓦質経容器が高価な材質の経容器の代替品である可能性があるが、すべてが模倣品や代替品ではなく瓦質として特注された品が含まれている可能性も考えられる。これら系統の差については、次項において分類を行う。

つぎに、共伴遺物を中心に瓦質経容器の使用年代を考察してみたい。現在において、近畿で瓦質経容器に直接紀年銘をもつ個体の発見はなく、共伴する経筒や外容器に紀年銘が認められた例も確認されていない。同じ専用品である陶製経容器では、生産地の一部が特定され生産地編年の構築が進められてきたことから使用時期の一端を窺うことができる。一方、瓦質経容器は生産地の特定は進んでおらず、紀年銘によって使用時期の一端を示すこともできない。よって、使用時期を検討するために瓦質経容器の出土した経塚の共伴遺物と造営年代の2つの視点から近畿における瓦質経容器の使用年代の幅を窺ってみたい。

まず、共伴遺物からである。出土状況が不明なものも多く、確実に共伴する遺物が不明なものも多い。副納品には攪乱の可能性があるので、セット関係の明らかな瓦質経筒の外容器をみていく。瓦質経筒の外容器で年代が判明するのは、

大藪経塚と粉河産土神社2号経塚である。大藪経塚では外容器に東播系須恵器の甕を使用し、Ⅴ期（12世紀末～13世紀中葉）に位置付けられる（荻野 1985）。粉河産土神社2号経塚では、外容器に常滑焼の甕を用いて東播系須恵器の鉢を被せて蓋としている。粉河産土神社2号経塚は常滑焼の甕が2型式（12世紀第3四半期）に、東播系須恵器の鉢はⅤ期に位置付けられるようである（荻野 1985; 中野 1995; 村木 1998a）。

共伴外容器から使用時期の一端を窺えたので、つぎに遺跡の造営年代から使用時期の絞り込みを行ってみたい。図20は、各経塚の大まかな造営時期をまとめたものである（表4、図20）。ある程度年代観が窺える経塚で、転用品の外容器の編年、古銭、青銅製経筒の器高などからの造営が行われた可能性の高い時期である。経塚群の場合は、直接瓦質経容器の出土した経塚以外の経塚の造営時期を含み、経塚群として造営が続けられた可能性がある時期を示した。概ねその中心時期は12世紀後半から13世紀前半にみられ、この傾向は共伴外容器の年代とも合致する。

ここまで、瓦質経容器の使用された年代を考えてきた。直接紀年銘をもつものは確認されていないが、共伴遺物などから概ね12世紀末から13世紀前半を中心とした時期に用いられたことが明らかになった。

(3) 分類

従来では、瓦質経容器は粗製品や代替品とされ、分類されることなく一様に考えられていた。その位置付けは、陶製と比較して粗製品、土師質と比較して上位に位置付けられていた。しかしながら、近畿の瓦質経容器は製作技法や器形でみても差異が認められるので、分類を行い瓦質経容器が一様であるのか、本当に粗製品であるのか考えてみたい（図21）。

- AI類⇒土器の製作技法を基調として製作されているもの。ナデ調整やハケ調整が認められ、凹凸を残すものが多く含まれる。粘土紐痕が認められるものもA類とする。
- AII類⇒土器の製作技法によるA類のうち、ミガ

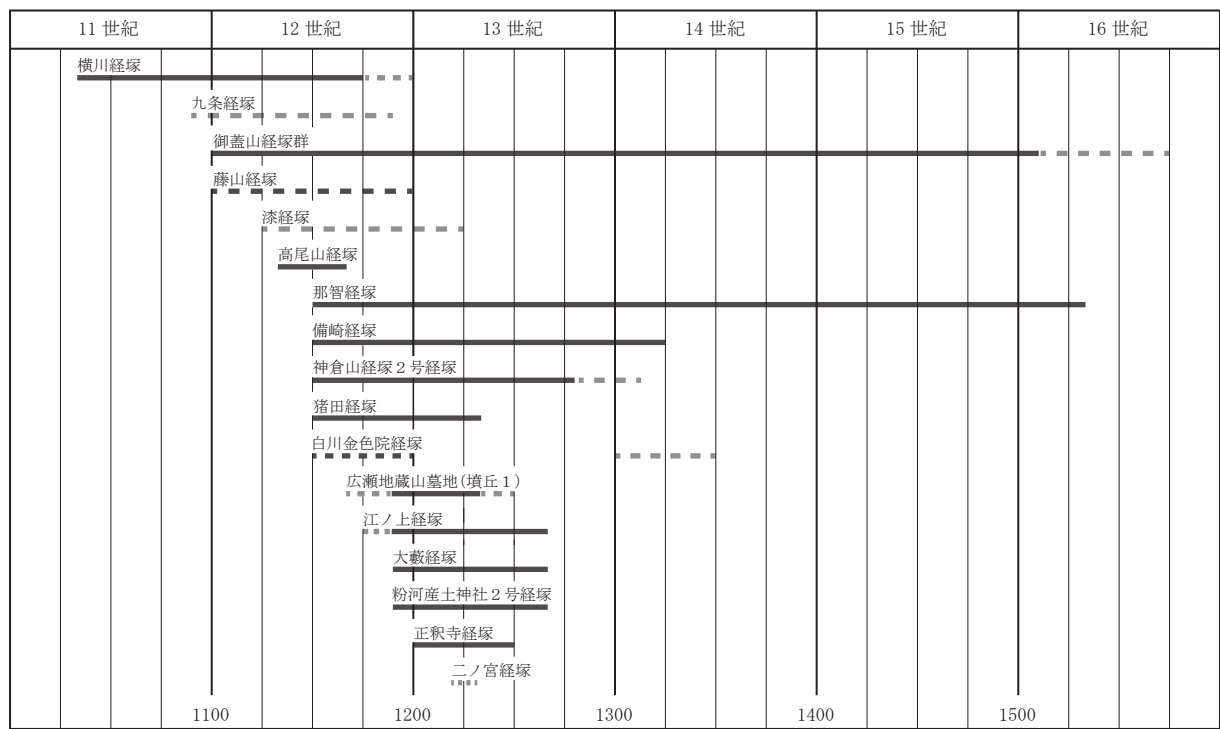


図 20 瓦質経容器出土経塚の造営期間（筆者作成）

表4 瓦質経容器出土経塚の年代決定基準遺物（筆者作成）

経塚	上限		下限		備考
	年代	基準遺物	年代	基準遺物	
横川	1031年（長元4）	上東門院彰子埋経	12世紀第3四半期	常滑甕2型式	三筋文編年の上では12世紀第4四半期まで
九条	平安時代頃	経筒総高25.3cm	平安時代頃	経筒総高25.3cm	青銅製経塚高による参考
御蓋山	12世紀前半	十瓶山甕・古銭	15世紀後半～16世紀初頭頃	瓦質土器深鉢	古銭で最も新しいものは政和通宝（初鑄：1111年）
藤山	12世紀代？	北近畿型甕	12世紀代？	北近畿型甕	北近畿型甕による参考
漆	12世紀第2四半期	陶製経容器	13世紀初頭？	山茶碗	青銅製経筒高・山茶碗・陶製経容器からの参考
高尾山	1130年	常滑甕1b型式	12世紀中葉	東播甕Ⅲ期	瓦質→攪乱／1・3号→1b型式／2号→Ⅲ期
那智	1153年（仁平3）	仁平3年銘経筒	1530年（享禄3）	享禄3年銘経筒	
備崎	12世紀後半	常滑甕	14世紀前半	常滑甕7型式頃	常滑甕多数出土
神倉山2号	1150年	常滑三筋壺2型式	1281年（弘安4）	弘安4年銘経筒	攪乱され時期は延びる可能性がある
猪田	1150年	常滑甕2型式	13世紀前葉頃	伊賀型瓦器碗6期？	
白川金色院	12世紀後半？	和鏡	12世紀後半？	和鏡	報告では瓦質であることをもって14世紀と評価
広瀬地藏山（墳丘1）	12世紀後葉～末頃	伊賀型瓦器碗6期	13世紀前葉頃	伊賀型瓦器碗6期	古銭9枚で最も新しいものは政和通宝（初鑄：1111年）
江ノ上	12世紀後葉	東播甕Ⅳ期	13世紀中葉	東播甕Ⅴ期	瓦質→2号／1号→Ⅳ期／4号→Ⅴ期
大藪	12世紀末	東播甕Ⅴ期	13世紀中葉	東播甕Ⅴ期	東播甕の中から瓦質経筒出土
粉河産土神社2号	12世紀末	東播甕Ⅴ期	13世紀中葉	東播甕Ⅴ期	東播鉢・常滑甕の中から瓦質経筒出土
正釈寺	13世紀前半 1220年	越前焼？ 常滑甕5型式	13世紀前半 1250年	越前焼？ 常滑甕5型式	瓦質経容器と越前壺？ もう1基に常滑甕5型式
二ノ宮	1125年（嘉禄元）	経巻	1125年（嘉禄元）	経巻	別の場所に再埋納されたもので、詳細には諸説があるが嘉禄元年銘の経巻が伝来しており、この前後の可能性はある

図20と対応

キ・暗文を施すもの。瓦器系の製作技法を踏襲している一群。
B類⇒外面をヘラナデ（工具）などによって平滑に仕上げるもの。粘土紐痕が認められ

るものは含まれない。一部に布目痕が確認される個体が含まれる。主体は縦方向のヘラナデであるが、多くの個体の内面底部付近にヨコナデが確認できるので、

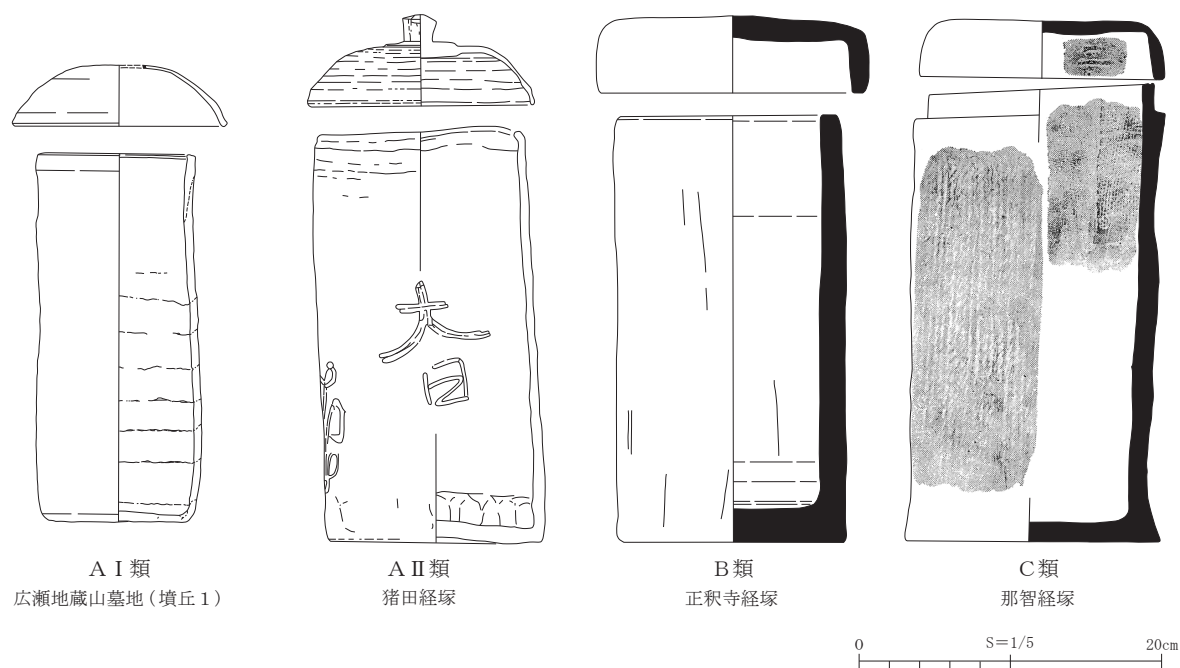


図 21 瓦質経容器の分類

（AI 橿原考古学研究所 1989, AII 上野市教育委員会 1975, C 巽 1964 を再トレース, B 南丹市立文化博物館蔵：筆者実測）

瓦当面の接合方法に共通するといえる。

C類⇒ナデ消さず内面に布目痕、外面に縄目叩き痕を残すもの。瓦の技法を踏襲している。

＜近畿の瓦質経容器＞

AI類：弁天島、善峯寺、白川金色院、御蓋山、石上神宮、広瀬地藏山墓地、東禅寺、漆、神倉山、江ノ上、一ノ宮、二ノ宮

AII類：猪田、漆、大藪、粉河産土神社

B類：横川、九条、東山松原、笠置寺、御蓋山、備崎、正釈寺、藤山

C類：那智、伝新宮経塚群

以上が製作技法を中心に分けた近畿の瓦質経容器の分類である。一括に捉えられてきた近畿の瓦質経容器には、いくつかのグループがみられるのである。先学にも示されたように複数の工人の系統があるが、この分類によっても大きく土器系工人と瓦工人によるものが確認できる（菅原 1989）。

A類はナデ調整やミガキを施すことから、土器系工人によって製作されたことが窺える。凹凸があるものも多く、一括に考えられてきた瓦質経容器が、粗製品といわれたのはA類の印象によるところが大きいと思われる。

他方で、B類は丁寧に外面を平滑に仕上げるなどしており、A類とは系統を異にする。B類には内面に布目痕が確認されているものが含まれるので、瓦の製作技法を踏襲している可能性が考えられる。

C類は、瓦の技法による製作で瓦工人の手に成るものであるといえるが、現在において那智経塚と伝新宮経塚群に確認されるのみである。この伝新宮経塚群例は未報告資料であり、新宮経塚群のどの経塚から出土したものは不明であるが、外面に縄叩き痕が確認できる（図22）。この個体と那智経塚の個体との違いは内面をナデで調整していることである。外面には縄叩きをもつことから、瓦生産の技法を用いていることが窺えるので、内面のナデは布目痕をナデ消していると考えられる。つまり、伝新宮経塚群

例はB類とC類の中間的な位置付けにあるといえる。B類では横川経塚などに、布目痕が確認されているものが含まれるので、B類もまた瓦工人によって製作された可能性が高いと考えられる。C類の内外面の縄叩きと布目痕をヘラ状の工具などを用いてナデ消したものがB類になると考えられる。よって、B類とC類は瓦の工人、あるいは一定程度瓦の技法を踏襲しているといえよう。

(4) 瓦質経容器の考察

前項までに行った分類と検討から近畿の瓦質経容器の位置付けについて検討する。

まず、分類の結果を基にそれぞれについて考察すると、AI類はナデ調整やハケ目調整を行うなど土器系工人の手に成るものである。技法や焼成などで、最もバラエティに富んでおり、多くが瓦質経容器のなかでは粗製品である。高級材質の経筒や外容器の代用品と考えられる。

AII類は、ミガキや暗文をもつ点で、青銅製経筒を意識したものと考えて差し支えないであ

う。青銅製経筒を模したもので経筒としての用途が想定される。それを裏付けるように外容器内から出土し経筒であることが確実な、大藪経塚や粉河産土神社2号経塚もAII類である。また、セット関係の確実な外容器は確認されていないが、報告において、経筒の可能性を指摘された猪田神社経塚もAII類に該当する。このことからAII類は、青銅製経筒を手にするのでできなかった造営主体による模倣品である可能性が考えられる。

B類はハケ調整や粘土紐を用いた痕跡は確認できず、青銅製経筒の模倣としてのミガキ調整も確認できない。さらに、内面に布目痕をもつ個体が確認されることから、瓦工人の手になる製品と考えられる。瓦の製作を踏襲している点で、一般的に瓦質とされてきたものとは異なる。また、A類では凹凸を残し粗雑な印象を受ける個体がみられたのに比べ、B類では外面を丁寧に平滑に仕上げることからA類と比較し精製品であることが窺える。B類は、模倣品ではなく、一定の階層の特注品として瓦工人に依頼して製



伝 新宮経塚群

図 22 瓦質経容器の縄目叩き
(熊野速玉大社蔵／筆者撮影・作成)

作されたと捉えることができるのではないだろうか。製作地や生産窯は不明であるが、分布の傾向として山城附近に集中することから、山城近郊の窯によるものである可能性は考えられるが、確実性がない以上これ以上の言及は避けたい。分布の傾向が山城附近にまとまることは、やはり貴族層など一定の階層による使用の可能性が考えられる（図23）。

C類は、那智経塚と伝新宮経塚群で確認されるのみである。縄目叩き痕と布目痕を残すため瓦工人による製作であるといえる。瓦の技法を採用することからB類と類似する系譜が窺える。

分類によって、粗製品と考えられてきた瓦質経容器には製法や品質に差があることが明らかになった。A類は、従来言われてきた粗製品や代用品に位置付けられる。一方でB類は、瓦工人によって製作された特注品の精製品瓦質経容器といえる。

B類は瓦工人に依頼できる権力を有している

人々の使用であることが想定できることから、東海で製作された専用品の陶製経容器に対して京周辺で製作された専用品といえるかもしれない。陶製経容器が上位に位置付けられることについては依然として変わりはないことはいうまでもないが、横川経塚や笠置寺経塚などかなり高位の埋経と考えられる経塚からも瓦質経容器が出土しており、ある程度高位の階層による埋経でも瓦質経容器を用いている可能性が考えられる。

従来の瓦質経容器の位置付けは、陶製経容器より粗製品で、土師質容器よりは精製品といったところであった。精製品の瓦質経容器が認められたことにより、陶製経容器＞精製品瓦質経容器＞粗製品瓦質経容器＞土師質容器といった位置付けになるといえよう。精製品の瓦質経容器は、陶製経容器のやや下、もしくは粗製品の陶製経容器と同格に位置付けられる。

最後に使用時期であるが、既に瓦質経容器全

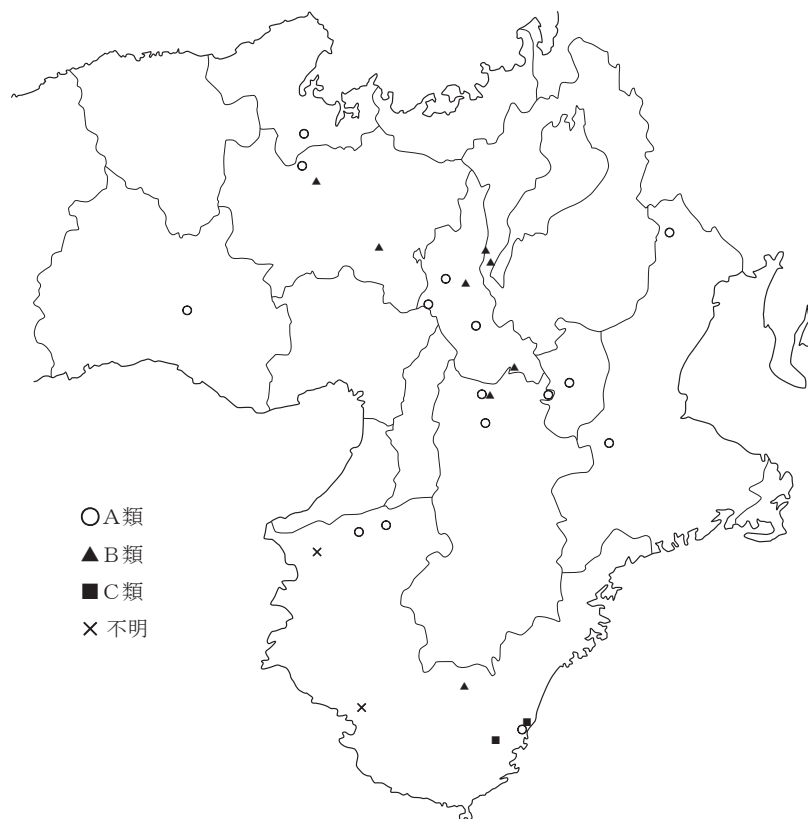


図 23 瓦質経容器の分類別分布（筆者作成）

体として12世紀後半から13世紀前半頃に用いられた時期のピークがあることを示した。A類はバラエティに富み使用時期の幅を窺うことは難解であるが、B類は出土経塚の他の出土遺物の年代などから、12世紀後半から13世紀前半の作である可能性が考えられる。

(5) 製作技法の復元

ここでは、瓦の製作技法を踏襲しているとした瓦質経容器B類・C類について、瓦質経容器に残された製作技法の痕跡から製作工程の復元を試みた(図24) 途中の工程までは同様の技法であると考えられるので、工程の多いB類から検討を行った。

1. 型に布を巻く
2. 布を巻いた型に粘土板(粘土紐)を巻く
3. 縄を巻いた叩き板で型に押し付ける
4. 型を外し別作りした円形の底部を合わせる
5. 内側で筒本体と底部の円盤を繋ぎ合わせる(底部付近ヨコナデ)
6. ヘラ状工具で内面をナデ(布目痕跡を消す)
7. ヘラ状工具で内外面を縦方向(下から上)にナデ(縄目痕跡を消す)

以上が製作技法の痕跡から想定される瓦質経容器B類の製作工程である。横川経塚やC類の那智経塚などで、内面に布目痕跡が認められることが報告されており、瓦製作同様にきねや模骨のような型に布を巻いているようである(滋賀県教育委員会 1979; 巽 1964)。経容器の場合は型から外す際に円筒形のまま型から外すことになるが、きねでは円筒形を保ったまま外すことが可能であるか若干の疑問がある。もう一方の模骨のようなものを想定するにしても、後のヘラナデによって整形されており確証を得ない。

那智経塚例や伝新宮経塚群例は外面に縄目叩き痕が確認できるが、両例の縄目叩き痕は縦方向で揃っている(図21, 図22)。両例を参考にす

るならば、型に押し付ける叩きの工程は叩き板による不定方向の連続叩きではなく、経容器の器高より長い縄を巻いた叩き板を用いて少しずつずらしながら周回させ粘土板を押し付けているようである(図23)。

また、円筒形を製作し別作りの底部を合わせるとは、藤山経塚に底部円盤を別作りにして合わせた事例が認められるため、この技法を採用していることがわかる(時野谷 1938a)。現状では後のヘラナデによって別作りにした底部を合わせたことが確認できないものも多くみられる。しかし、横川経塚例や笠置寺経塚、正釈寺経塚の例では総じて内面底部付近のみにヨコナデを施していることが確認できる。これは、別作りの底部を合わせた際の調整痕跡とみることができるであろう。さらに、最後のヘラナデは、およそ1cmから1.2cm幅のヘラ状工具を用い、筆者が確認できた笠置寺経塚の3点、正釈寺経塚では総じて下から上に向かって行われている。製作技法の共通性は、ある程度限られた生産地で製作されていた可能性が考えられよう。

瓦質経容器B類は瓦の製作技法を採用しているが、大量生産品ではないことは出土数をみても明らかである。現在残された瓦質経容器をみても、丁寧なヘラナデによって製作痕跡を消すなど、製品化を意識している。外面のヘラナデが、縦方向にやや重ねながら1周していることからその意識を感じられる。従来のように一様に模倣や代用品であるとの位置付けではなく、特注された専用品として評価したい。

3.3 石製経容器

ここでは、石製経容器について検討してみたい。円筒形を呈するのは、横川経塚3点、御蓋山経塚群2点、槇尾山経塚があり、浄土寺南田経塚例は唯一の櫃形である。この他に、神倉山経塚から蓋のみが出土している。

まず、近畿の石製経容器の用途を検討する。内部に経筒が遺存していたのは櫃形の浄土寺南

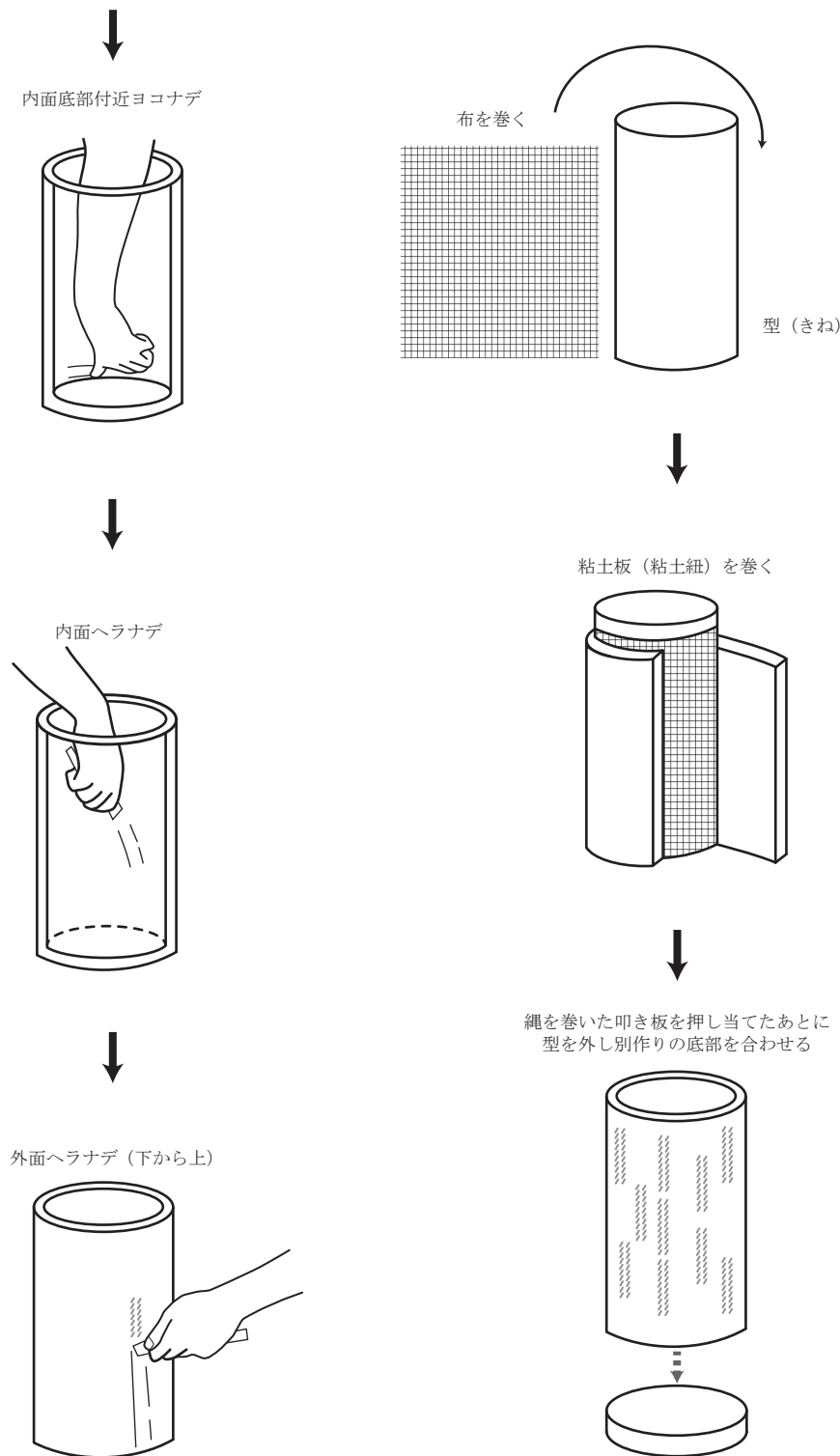


図24 瓦質経容器の製作技法(筆者作成)

田だけであり、出土状況として用途を確定できるのは、この1点のみである。九州においては、筒身が細身で経筒を入れていたことを想定しづらいものや、台座を作り出した特殊なものなど

については、経筒としての使用用途が想定されている(村木1998b)。しかし、近畿出土のものには、こうしたものはみられない。石材の違いによる加工の都合もあるかと思われるが、特殊

な意匠がみられないため法量を参考としたい。一般的な経容器よりは、器高や口径は大振りである。横川経塚のうち1個体は臼形を呈するが、その他の円筒形を呈するものでは器高が概ね30cmを超え、口径は25cmから27cm程である（秋山 1983; 大場 1975; 滋賀県教育委員会 1979）。内径でも14cmから15.8cmであるので十分に青銅製経筒を納めることができよう。近畿では特殊な意匠もなく、多くが大型品であるので外容器として用いられたものであるかと考えられる。

つぎに、石製経容器の使用された時期について西日本の例も参考として検討してみたい。近畿で確認された8例のうち、使用年代が確認できるのは浄土寺南田経塚例のみで、櫃形石製経容器内に納められていた経巻から1289年に使用されたことがわかる（川勝 1958）。

一方で、円筒形の石製経容器に年代を直接示す資料は確認されていない。そこで、円筒形の石製経容器が出土した経塚の造営期間から検討することにしたい。各経塚の想定造営期間は、横川経塚が11世紀前半から12世紀第3四半期、御蓋山経塚群が12世紀前半から室町時代頃、槇尾山経塚が12世紀代を中心とした経塚である（秋山 1983; 滋賀県教育委員会 1979; 末永 1949）。このことから、円筒形の石製経容器は12世紀に中心時期があるとみえ、12世紀代の経塚隆盛期に用いられたようである。櫃形の浄土寺南田例のみは13世紀後半の年代を示している。

これら少数の石製経容器は、埋納地で入手したとも言えず、生産体制が整っていた専用経容器とも性質が違うかなり特殊な容器であるといえるが、藤原氏関係の埋経地でもある横川経塚や、御蓋山経塚群などに出土している状況から、使用階層が下位とは言い難い。何らかの事情によって、比較的高位の階層で使用されたものの可能性が考えられる。末法の世において、耐水性に長けた石を用い経典を後世に残そうとした結果なのかもしれない。

4. 経容器の位置付け

前章までの専用経容器についての検討を総合して、近畿の経容器編年と経容器の位置付けを行う。編年では陶製経容器を中心とし、瓦質経容器の相対的な時期も含めた。

4.1 近畿の経容器編年

陶製経容器では、口縁部形態の変化に大きく时期的な傾向が表れていることが明らかになったので、その変化の順に経容器を並べると図15のようになる。系譜の上では、このような変化を辿るが、各口縁部形態の属性には併存期間があるので、陶製三筋文、陶製無文、瓦質経容器のそれぞれについて時期と前後関係を確認したうえで、最後に消費地編年としてまとめたい。

(1) 三筋文経容器

まず、陶製経容器のうち三筋文経容器についてである。近畿の三筋文経容器では、猿投窯産が主体である。猿投窯の三筋文陶器は、13世紀初頭まで生産が続けられているようであるが、生産の中心時期は12世紀代であると考えられるので12世紀の変化を探っていく（愛知県史編纂委員会 2007）。時期の傾向として、榑崎彰一は沈線の位置が次第に上部に寄る傾向を指摘している（榑崎 1978）。

三筋文経容器は、本論の形態分類による口縁部形態で多くが口縁部形態aに該当する。よって、口縁部形態の崩れ方と沈線の位置に注目したい。これに、生産地である榑崎編年¹⁶⁾を参考にして消費地である近畿の経塚での前後関係を提示する（図25）。

口縁部形態が段状を呈することや、沈線の位置が低いことから槇尾山経塚や横川経塚C1は古い時期に位置付けられよう。榑崎編年のⅡ期頃の器形を呈するが、槇尾山経塚例ではやや沈線の位置が高く、Ⅱ期からⅢ期に併行すると考えられる。つぎに笠置寺経塚では、槇尾山経塚に比べ段状受け部が簡素化しており、沈線の位置

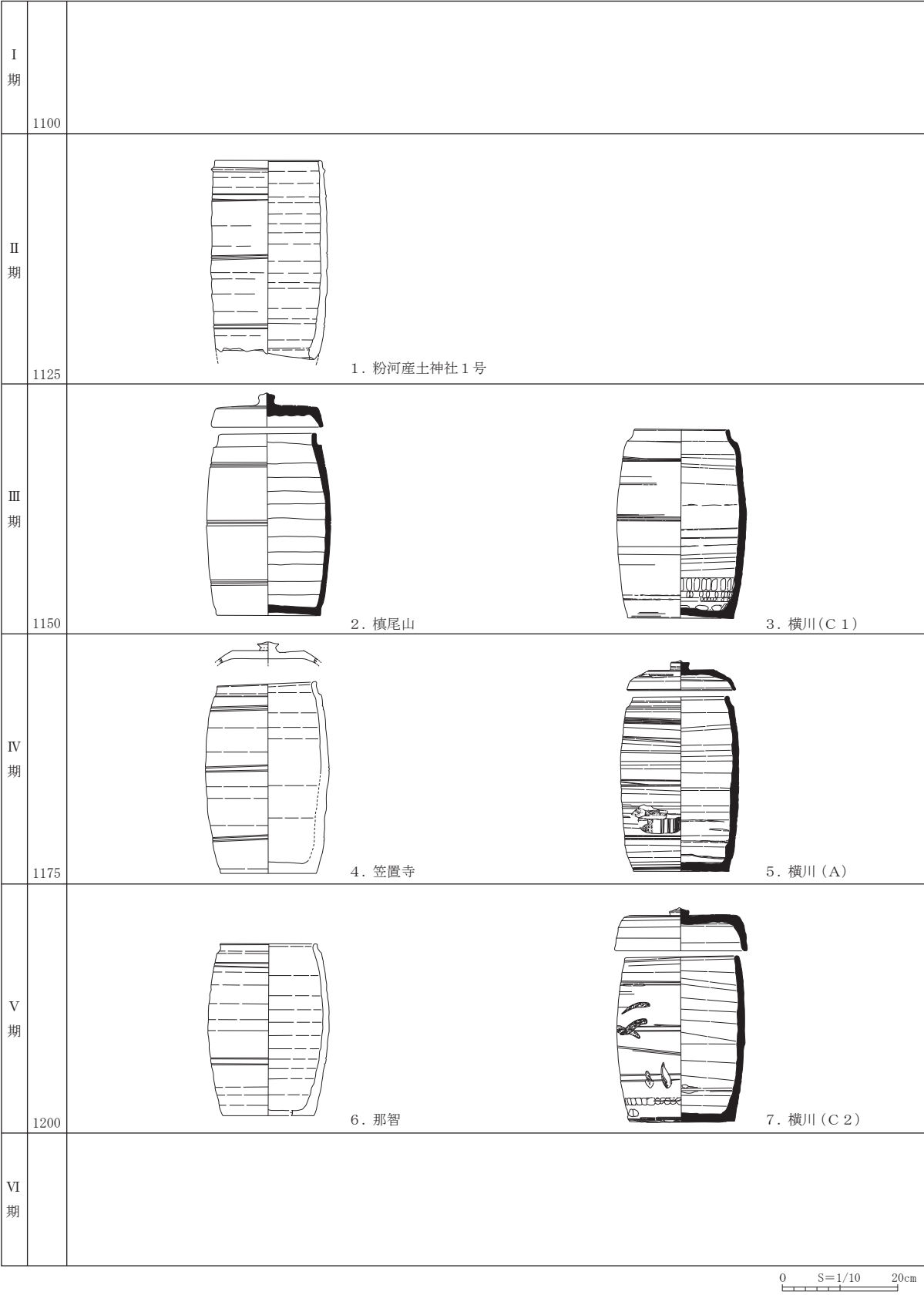


図 25 陶製経容器（三筋文）編年
(1 奈良国立博物館 1977, 2 秋山 1983, 3. 5. 7 滋賀県教育委員会 1979,
6 東京国立博物館 1985 を再トレース, 4 笠置寺蔵・筆者実測)

も高くなっていることから、笠置寺経塚の方が後に位置付けられる。那智経塚では、口縁部受け部の中央がやや反るなど笠置寺経塚例の口縁部に通じる箇所があるが、沈線が二条ではあるものの2段になっているため、その位置も高い。

複数の三筋文経容器が出土している横川経塚の3個体を、想定される口縁部形態の変化順に整理すると、C1→A→C2の順となる。同様に沈線の位置の高さもこの順に高くなっていく。この事例からも口縁部形態の崩れ方と沈線の高さが比例していることがわかるので、先の榑崎の指摘には妥当性があると認められる（榑崎 1978）。C1は、榑尾山経塚のものよりは段状の受け部が崩れるものの、笠置寺経塚や横川経塚Aよりは受け部を残しており、12世紀第2四半期に位置付けられよう。Aは笠置寺経塚例に通じるので同時期頃のものであろう。口縁部形態に受け部がなくなるC2例は、横川経塚の最末期に用いられたと考えられ、横川経塚の造営終了時期は12世紀第3四半期頃であると思われるのでこの頃のものと思われる。

以上の前後関係をまとめると、榑尾山・横川C1→笠置寺→横川A→那智→横川経塚C2のような流れが想定できよう（図25）。これにより先学に指摘される口縁部形態の簡素化と、沈線の位置が高くなるといった傾向が近畿の経塚でも認められた（榑崎 1978）。

比較した各個体の時期であるが、榑尾山経塚例¹⁷⁾が榑崎編年Ⅱ期からⅢ期に該当し、およそ1100～1150年頃のものと思われるので、12世紀前半を想定することができる。特にⅡ期からⅢ期の過渡期である1120年から1140年頃が想定できよう。それに似る笠置寺経塚は、口縁部形態では榑崎編年Ⅳ期に近いが、器形の上では榑尾山経塚例に近く、この間に位置付けられるであろう。やや傾向は異なるが受け部が短くなる打見山経塚も同時期頃であると思われる。那智経塚例は、器形のうえでは前代の笠置寺経塚例など雰囲気を残しながらも、沈線が2段となりかな

り上部に寄っており、1世代は遅れる。

横川経塚C2は、横川経塚造営末期の12世紀第3四半期から、第4四半期の早い時期までの幅が想定でき、1175年前後の年代が与えられる。

このほかに経筒の紀年銘によって年代が確定する1125年の粉河産土神社1号経塚例があるが、この個体以降の変化を追えずこれ以降に続く系譜を想定できていない。

また、金峯山経塚出土の破片について本論では無文に分類したが、胴部に描かれた文様から牡丹文をもつ東山105号窯の製品に類似する。榑崎編年でも最初期に位置付けられ、近畿の経塚で使用された初期の専用陶製経容器であるといえるものである（帝国博物館 1937; 榑崎 1978）。

（2）無文経容器

つぎに、陶製経容器のうち無文経容器の編年である。無文の容器では、口縁部形態の変化に大きく時期が反映されていることが明らかになったので、前章で確認した属性の継続期間を整理し前後関係を提示する（図26）。

まず、体部形態Ⅰや口縁部形態cは、12世紀前半期に造営が開始された朝熊山経塚群に確認されるが、同様の性質をもつ蓮台寺滝ノ口経塚群にはないことから12世紀前半に用いられたことがわかる。京周辺でも12世紀第1四半期頃の鞍馬寺経塚に橐型に口縁部形態c類の陶製経容器が認められる。蓮台寺滝ノ口経塚群には、端部をつまみ上げるc類の要素を残しながら、崩れた段状の受け部を呈し体部形態はⅡ類になっているものがみられるので、これらの要素の消滅・移行時期は、蓮台寺滝ノ口経塚群造営初期の12世紀中葉であると考えられる。

その他では、口縁部形態がd→e→fの順に共存時期をもちながら変化していくことがわかっている。朝熊山経塚群と蓮台寺滝ノ口経塚群で確認された同様の紀年銘をもつ個体から口縁部形態d類とe類の併存期間は12世紀中葉から12世紀第3四半期頃の事と考えられる。口縁部形態eは、

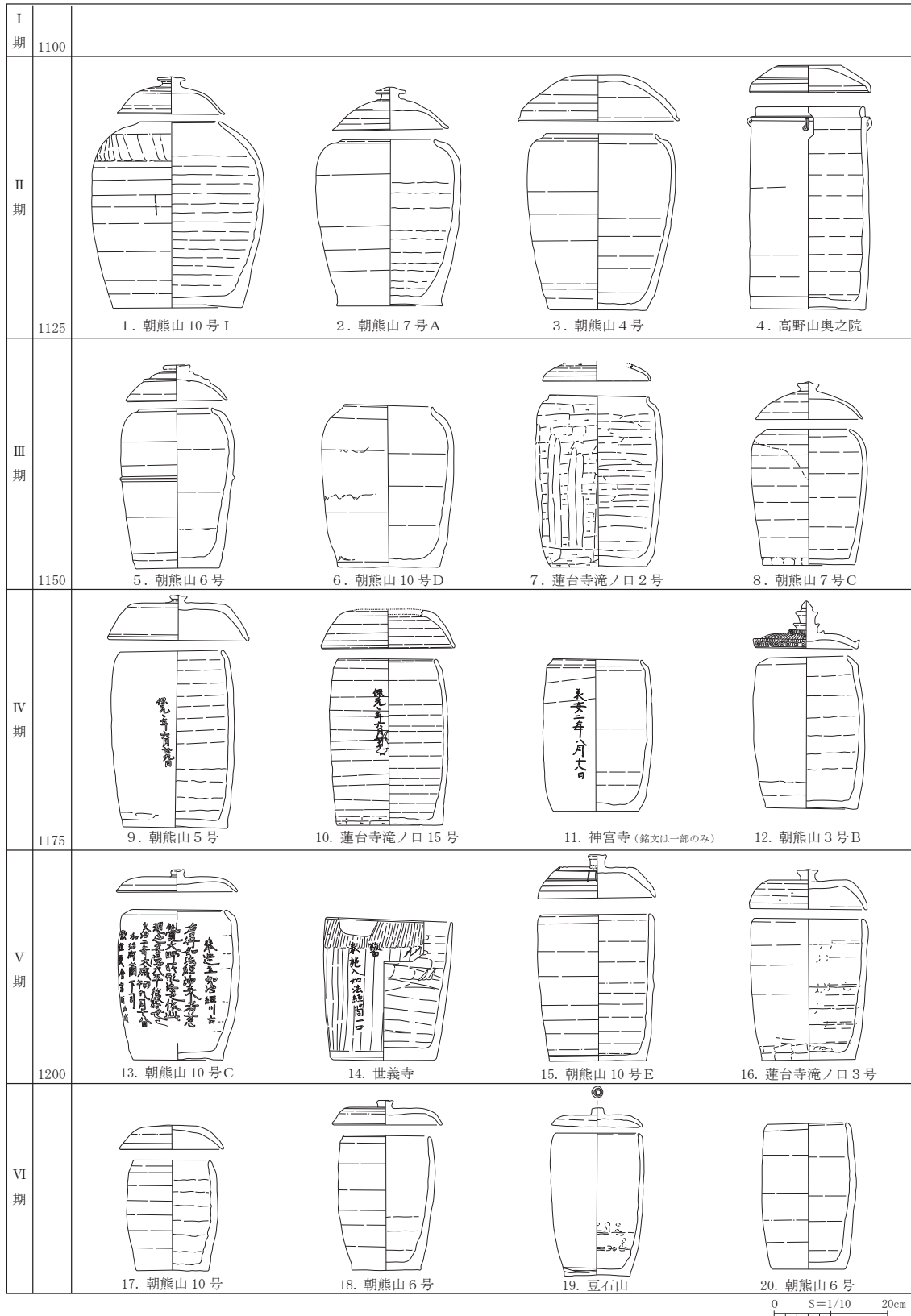


図 26 陶製経容器（無文）編年

(1～3. 5. 6. 8. 9. 12. 13. 15. 17. 18. 20 山澤 2011, 4 奈良国立博物館 1977, 7. 10. 16 伊勢市教育委員会 1998, 14 愛知県史編纂委員会 2012 (刻文・土器の実測図のうち土器実測図のみ引用), 19 皇學館大学考古學研究会 1986 を再トレース, 11 神宮寺蔵・筆者実測)

紀年銘から1150年～1190年に使用されたものであり、口縁部形態f類は12世紀第4四半期には出現するようで、世義寺例が初期に位置付けられる。同じく口縁部形態f類を呈する真名井神社の陶製経容器も、共伴すると想定されている青銅製経筒の紀年銘が文治5年（1189）であり、12世紀第4四半期を示している（橋本 2008）。先行するe類と併存して、f類に移り変わっていくようであり、併存期間は12世紀第4四半期頃のことと考えられる。

また、三筋文経容器と同様に口縁部形態g類の複数の個体で、12世紀第1四半期の紀年銘が確認され早くから出現するが、こちらもこれに続くものを提示できない。

（3）瓦質経容器

瓦質経容器は、陶製経容器ほどの出土数がなく、口縁部形態などにも大きな変化がみられず円筒形を呈する個体が多くを占めている。よって、明確な前後関係を提示することは難しく、前章の分類から凡その使用期間を検討した。全体を通しての傾向としては、瓦質経容器の出土している経塚の造営期間から12世紀後半から13世紀前半が隆盛期であるといえる。

瓦質経容器A類は一様でなく、12世紀後半から13世紀前半に亘って長期的な使用が考えられる。このうち、青銅製経筒を模倣したと考えられるAII類は、12世紀末葉から13世紀中葉までの期間に用いられている。

つぎに瓦質経容器B類であるが、出土遺跡で最も古い時期の経塚は横川経塚であり、最も時期が遅れるのは正釈寺経塚である。横川経塚の造営期間と、同じくB類の出土した九条経塚や備崎経塚の造営期間が重なる12世紀後半に使用時期の上限が求められよう。下限は、やや造営期間が遅れる正釈寺経塚例から13世紀前葉であろう。正釈寺経塚のB類は、備崎経塚などに比較してやや軟質であるが粗雑な印象は受けず、ここに大きな使用時期の差はないと考えられる

ので、B類の下限は13世紀前葉までの範囲に収まる可能性が想定できる（図27）。

同様に瓦の技法を採用しているC類も同時期であろう。出土遺跡数も多くなく、比較的短期間に用いられているので限られた層によって使用された可能性がある。B類は瓦の技法により製作されており、量産できる技法を採用しながら使用が限定的である一方で丁寧な仕上げをすることからは、瓦工人に特注した品であることを裏付けているといえよう。

（4）消費地編年

ここまでの検討を基に、おおよそ1期を四半世紀として、I期からVI期までの6時期に区分した（図25～27）。

< I 期 > （11 世紀末）

生産地で陶製三筋文経容器などが作られ始めた時期であり、近畿の経容器の陶器系・土器系経容器には、この時期に確定できる経容器は確認できていない。しかし、金峯山経塚の陶製経容器は破片となるものの、その文様は三筋文編年I期にも通じるものである（植崎 1978）。I期に比定できる可能性をもつ個体があるので、今後のさらなる検討は必要であるが、I期を11世紀末としておきたい。

< II 期 > （12 世紀第 1 四半期）

陶製三筋文経容器では、段状の受け部を呈するものが使用される。陶製無文経容器で棗型の経容器が主流となる。口縁部形態は、c類とd類が使用される。この時期の口縁部形態d類の組合せは、体部形態I類のみである。山城の鞍馬寺経塚や伊勢の朝熊山経塚群などで出土しており、山城と伊勢で同様にこの形式を用いている。また、三筋文と無文で共通して口縁部形態g類が認められる。

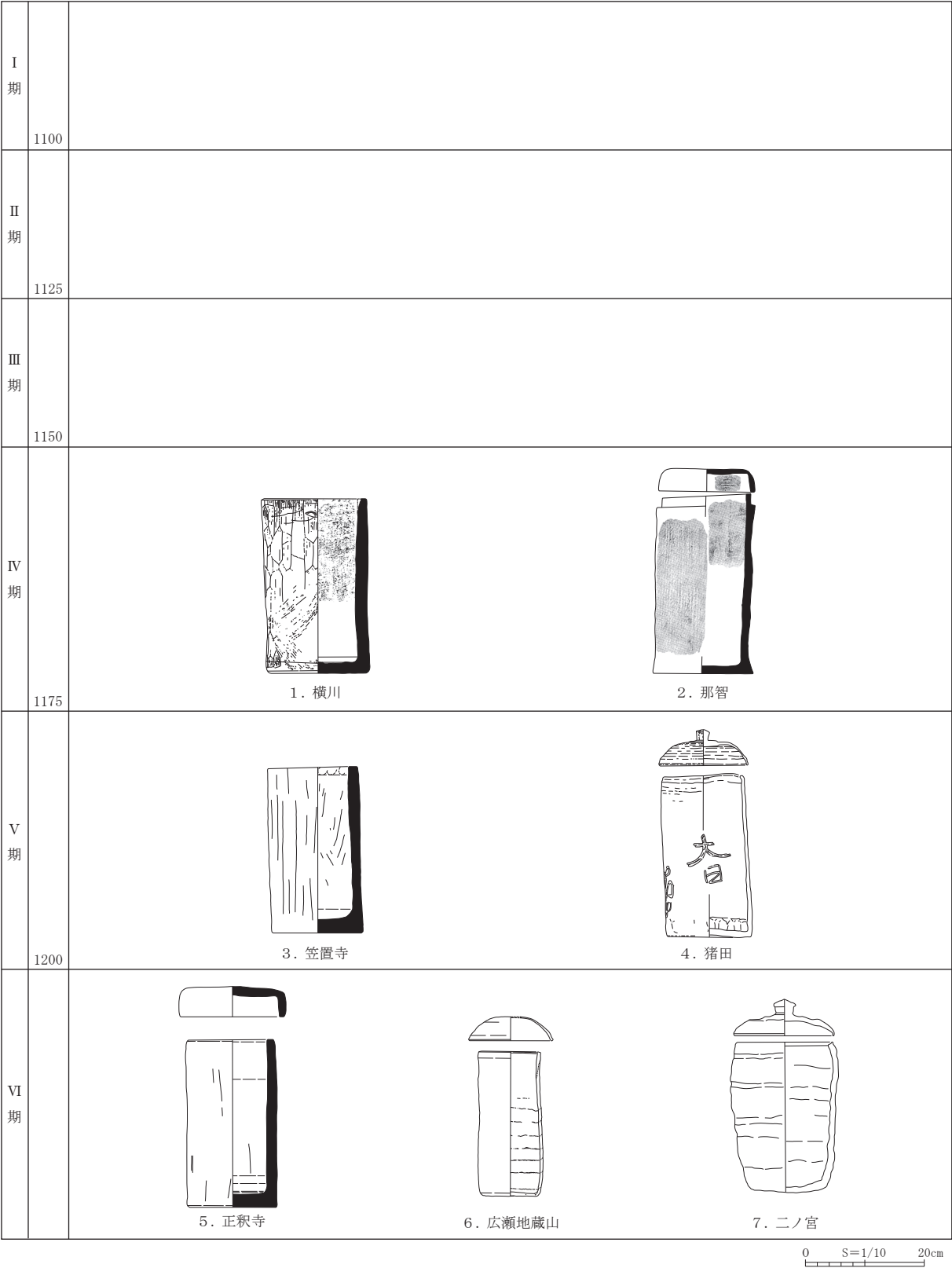


図 27 瓦質経容器編年

(1 滋賀県教育委員会 1979, 2 巽 1964, 4 上野市教育委員会 1975, 6 橿原考古学研究所 1989, 7 増田・百田ほか 1980 を再トレース, 3 笠置寺蔵, 5 南丹市立文化博物館蔵・筆者実測)

＜Ⅲ期＞（12世紀第2四半期）

陶製三筋文経容器で、器形のうえではⅡ期を残すものの、受け部がやや簡素化してⅡ期より沈線が上部に寄る傾向が見え始める。陶製無文経容器では、口縁部形態cの最終段階で胴部も極端な橢型を呈するものは減少する。

＜Ⅳ期＞（12世紀第3四半期）

陶製三筋文経容器は、一部でⅤ期に下がるものがある可能性は否定できないものの基本的に最終段階であると考えられる。沈線がかなり上部に寄り、受け部もかなり形骸化する。

陶製無文経容器では、口縁部形態d類が残りながらも体部の張りは目立たなくなる。口縁部形態e類の出現期でもあり、次第にd類からe類に移り変わる過渡期である。

瓦質経容器の出現期であると考えられる。

＜Ⅴ期＞（12世紀第4四半期）

陶製経容器は無文に限られ、口縁部形態fが出現する。Ⅳ期に見られた口縁部形態e類も1190年頃まで残り、次第に直行する口縁部形態fへと移り変わる。

＜Ⅵ期＞（13世紀前半）

陶製無文経容器で、口縁部形態f類となる時期で、器高が縮小すると考えられる。瓦質経容器では、AⅡ類が青銅製経筒の代用品として使用された時期ある。正釈寺経塚例などB類の終焉期である。

以上に記述したように、近畿の専用経容器は属性の併存期間もあり、一様に移り変わるわけではないが併存期間も考慮した編年を編んだ。これまで、各経塚での編年や器高の縮小、器形の膨らみの変化を指摘されるなかで語られてきた経容器について、属性や数値によって近畿の経塚を通した消費地編年を編むことで、経容器の時期差の問題にひとつの指針を示せたと思う。

4.2 経容器の位置付け

ここでは、近畿の瓦質経容器について、使用階層の検討のためにも、品質について位置付けを行う。

まず、新たに瓦質経容器を複数に分類したので、そちらの位置付けを検討する。瓦質経容器のうち、土器工人が製作したと考えられるA類は、AⅠ類が凹凸を残すなど粗製である。AⅡ類もミガキの存在などから、青銅製経筒の模倣と考えられ、青銅製経筒を用いることのできなかった層による使用であるので上位には位置付けられない。

一方で、瓦工人による製作の瓦質経容器であるが、数はさほど多くなく、瓦の技法を踏襲しながらも型を基にして大量生産しているわけではないことが窺える。口径などにも若干差異が認められ、さらに瓦製法による調整痕跡を丁寧にナデ消しており、単なる量産品ではないことが窺える。B類が瓦工人に特注したもので、生産元の窯に発注することができる層による使用であるので、A類よりは高位の使用であろう。しかし、陶製経容器を逆転するほどのものではない。

その他の材質であるが、播磨地域では主に東播系須恵器などを用いており、須恵質経容器→東播系須恵器転用品の順である。土師質容器も比較的豊富に用いており、粗製品である土師質容器と転用品との位置関係が求められる。須恵質経容器と一緒に土師質容器を用いている事例があることから、専用品である土師質容器の方が上に位置付けられる可能性がある。丹後地域周辺では、その多くに土師質容器が用いられており、顕著な地域性を示しているが、やはり粗製品であることに変わりはない。

以上のことを考慮し、近畿の経容器の品質を比較すると次のようになる（図28）。まず、東海の諸窯で製作された専用品の陶製経容器が上位に位置付けられる。つぎに、瓦工人によって製作された瓦質経容器が位置付けられる。この瓦

質経容器は陶製の粗製品と同等クラスであった可能性がある。これに須恵質経容器と土器工人による瓦質経容器が続く。播磨では、陶製経容器や瓦質経容器をほとんど用いていないことから、須恵質経容器が専用品として上位に位置付けられる。陶製経容器には及ばないが、京周辺でそれに次ぐ瓦質経容器と同等クラスであろう。その下には、土師質容器、各種転用容器が続くといえる。

さらに、埋経の初期に位置付けられる横川経塚の銅塔は、かなりの優品であり、最高位といっても過言ではないだろう。また、少数のみが出土する石製経容器の位置付けは、未だ手掛かりが少ないが、横川経塚や御蓋山経塚群のような高位の層による埋経を想定できる経塚であることから考えると、比較的上位に位置付けられる可能性が高いと思われる。

5. 地域性の検討

材質別の分布傾向によって、須恵器系容器を主とする播磨地域や土師質容器を主体とする丹

後周辺地域の地域性が窺えた一方で、山城周辺、紀伊、伊勢などの範囲の地域区分が課題となった。ここでは、課題となったこれらの範囲の地域区分について検討していく。

近畿の経塚の地域区分については、既に多角的な視点によって地域区分¹⁸⁾が提示されているので、変更の無い地域区分の名称はこちらを踏襲したい(村木 1998a)。先学の研究では、京周辺や紀伊の「京の経塚」、播磨を中心とした「播州の経塚」、丹後や但馬の「三丹の経塚」に加え、伊勢地域を「東海西部の経塚」に区分し、近畿の経塚は4地域が提示された(村木 1998a, 2003)。

5.1 伊勢地域の地域性

伊勢地域は、近畿の経塚のなかでも陶製経容器の集中する経塚造営が盛んに行われたといえる地域である。伊勢地域は近畿の経塚では、京と東海西部の立地的中間に所在し、両地域と類似性が認められる地域である。よってその地域的位置付けは、他地域に比べてやや難解である。

先学においては、村木二郎が近畿の経塚を3地

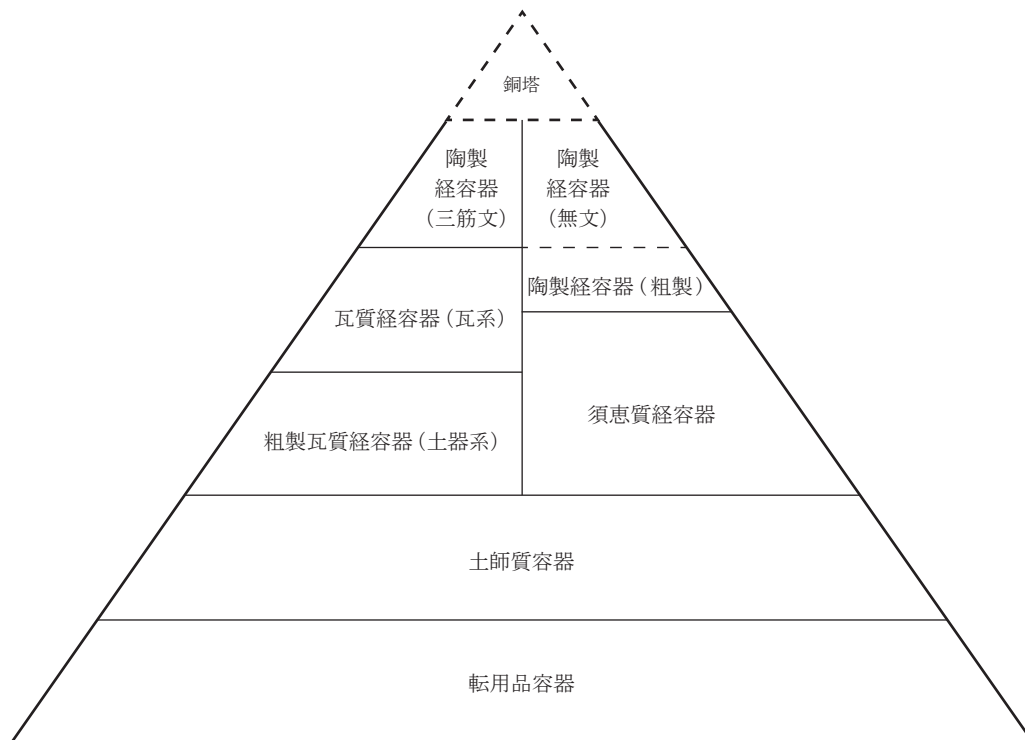


図 28 経容器の位置付け (筆者作成)

域に区分した際、伊勢地域を京周辺や紀伊と同様の地域である「京の経塚」として区分した（村木 1998a）。しかし、同時に東海地域との比較によって「京の経塚」から切り離せる可能性を提示していた。のちの東日本の経塚研究において、伊勢地域が東海の一部と同様の傾向を示すとして、濃尾平野から三遠地域の経塚に伊勢地域を加えて「東海西部の経塚」とした（村木 2003）。ここでは、京と東海西部の立地的中間に所在し、両地域と類似性が認められる伊勢地域の地域性について、経容器を通して再検討し地域的な位置付けを行いたい。

（1）京の経塚との比較

京の経塚と伊勢地域の経塚が経容器において類似する点は、専用品の陶製経容器を豊富に用いていることである。先学で一時同様の地域と区分されたのには、こうした類似性が認められるといった事情がある。一方で同じ陶製専用品

の経容器でも異なる傾向が認められる点が存在する。

まずは、陶製経容器の種類の差である。山城周辺では、三筋文経容器がまとまって用いられているのに対して、伊勢地域では三筋文経容器が出土していない（図29）。村木二郎は、渥美半島を抑えていた伊勢神宮の神官層の影響を指摘している（村木 1998a）。渥美半島を抑えていたことで、単純に手に入れやすかったことも大きいであろうが、これに流通論の視点だけではなく、経容器から窺えるその他の影響を加えて検討してみたい。

無文の陶製経容器の背景にある影響を考えるうえで、丹後地域に唯一出土している陶製経容器に注目したい。この陶製経容器は、真名井神社経塚の出土とされる。真名井神社は、元伊勢とされる籠神社の奥宮であり、伊勢神宮とかなり深い関係をもつ。丹後地域は、材質でほとんどを土師質容器が占める。この陶製経容器の生



図 29 三筋文と無文の分布比較（筆者作成）

産窯の特定については、筆者の力量では言及を避けたい。かなり稀有な存在の陶製経容器が、伊勢神宮の関係地から出土していることから、東海系の無文経容器であれば、単なる流通圏の差ではなく造営主体の差に起因していることが指摘できる可能性がある。

さらに、材質別の経容器分布傾向で、注目すべきは瓦質経容器の分布傾向である。瓦質経容器は、陶製経容器の模倣であるとの指摘がなされている陶製経容器との関係が深い材質の容器である（菅原 1989）。その瓦質経容器は、概ね近畿全域に分布するが、経塚が集中する伊勢の中心地域では出土していないのである（図5）。瓦質経容器の分布と陶製経容器の出土経塚の分布を比較すると、山城地域周辺では両材質が付近や同一遺跡で出土し重なりを見せるのに対して、伊勢の中心地域ではそもそも瓦質経容器が出土していない（図30）。

こうした分布の偏りは、単に供給圏に起因す

る可能性や陶製容器の豊富さによる可能性も想定される。しかし、陶製経容器では、山城地域周辺、伊勢地域の両地域とも、あえて東海地方の生産地から専用品を取り寄せており、伊勢地域では東海地方から専用品の陶製経容器を取り寄せるが、瓦質経容器を取り寄せることはしていないということになる。したがって、山城地域周辺と伊勢の中心部は、流通や宗教的環境などの少なくとも何れかが異なっていたことを示しているといえるだろう。

京の置かれた山城地域の周辺と、伊勢地域の中心部の経塚で大きく異なるのは、造営主体の違いであろう。山城や紀伊などでは、貴族層による埋経が行われたが、一方で伊勢では、伊勢神宮の神官層による埋経が盛んに行われた。経容器はこうした地域間の差を反映しているといえよう。特に旧国単位の伊勢ではなく、伊勢神宮周辺を主体として経容器の傾向が異なることは、ある程度宗教的な独占性、つまりは地域信



図30 陶製と瓦質の分布比較（筆者作成）

仰を経容器が示しているといえるかもしれない。

こうした傾向から、少なくとも京の経塚と伊勢地域の経塚が別地域に位置付けられるのは明白である。

(2) 東海西部の経塚との比較

「京の経塚」と伊勢地域の経塚について比較を行い、別地域に区分されることを示したが、ここでもう一つの隣接地域である「東海西部の経塚」との比較を行う。伊勢の経塚と東海西部の経塚は、同様に陶製経容器を用いている地域で、傾向も類似しているといえるが、一部で異なる傾向がみられるので検証してみたい。

村木二郎が東海西部の経塚に伊勢地域を含めたのは、外容器を必ず使用すること、その産地が東海系に限られること、専用品が多いこと、このような東海西部が示す傾向に、伊勢地域の傾向が同様であるとされたことからである（村木 2003）。

まず、本論の主題とは異なるが基礎的な傾向で異なるのは、青銅製経筒である。東海西部でも近畿系青銅製経筒を用いており、複数の経塚から青銅製経筒が出土しているが、伊勢地域で青銅製経筒が出土したのは朝熊山経塚群のみである（村木 2003）。

さらに、東海地域と無文の陶製経容器自体の違いは、伊勢地域の陶製経容器には比較的多く銘文を有する個体がみられることである。伊勢地域の陶製経容器のうち銘文をもつものには、朝熊山に加え、蓮台寺滝ノ口15号、世義寺、神宮寺などが挙げられる。一方の東海西部の経塚出土の専用品陶製経容器には、直接日付以外の銘文をもつ個体は確認されていない¹⁹⁾（静岡県 1992; 村木 2003）。青銅製経筒出土の遺跡数に違いがみられることも考慮すれば、陶製経容器を陶製経筒として使用したために、青銅製経筒に記載されることの多い銘文を直接陶製経容器に記した可能性も指摘できるであろう。

伊勢では、一般に陶製外容器とされるような

専用品の陶製円筒容器を陶製経筒として使用している可能性がたびたび指摘されている²⁰⁾。伊勢地域、特に伊勢中心部で青銅製経筒が出土するのは、朝熊山経塚群のみである。朝熊山経塚群は伊勢神宮の鬼門に建てられた金剛證寺付近に造営された経塚群である。出土遺物の銘にも、伊勢神宮の神官である荒木田氏や度會氏の銘がみえる。さらに、伊勢神宮の祭主である大中臣氏によって造営された可能性の高い蓮台寺滝ノ口経塚群と極めて類似した字体で、同日の銘を刻んだ陶製経容器も出土している（伊勢市教育委員会 1998; 稲垣 1988; 山澤 2011）。こうしたことから、朝熊山経塚群は伊勢神宮の神官層による総合的な経塚であることが想定されている。

朝熊山経塚群からは50点を超える陶製経容器が出土しているが、青銅製経筒は破片となるものも含め8個体分のみである（山澤 2011）。これらは、6基の経塚で何れも陶製経容器内から出土しており、これらの例では陶製経容器が外容器として使用されている（山澤 2011）。しかし、伊勢地域では他に青銅製経筒の出土する経塚もなく、出土する朝熊山経塚群でも陶製経容器に対して極めて少数である。こうした状況から想定される可能性は、(1) 基本的に青銅製経筒を用いない地域である可能性、(2) 発見時までに青銅製経筒が持ち去られた可能性、(3) 有機質経筒（木製や竹製）を用いていた可能性である。

伊勢地域で、青銅製経筒が出土するのは朝熊山経塚群のみであるので、積極的に青銅製経筒を用いた地域とは言い難いであろう。青銅製経筒が持ち去られ可能性も否定できないが、数基の経塚を除いて、高価な鏡や刀子、青白磁製品が出土していることから青銅製経筒のみが持ち去られたと考えるのは説得力に乏しい。伊勢地域では、盛んに経塚造営が行われ、豊富に陶製経容器が発見されているが、朝熊山経塚群以外に出土しないことも不自然である。有機質によって製作された経筒を用いている可能性もあるが、現在において伊勢地域にそのような報告例は確

認されていない。

これらのことから、伊勢地域では一般に陶製外容器とされる経容器を陶製経筒として使用したと想定することが穏当であろう。推察の域を出ないところもあるが、伊勢地域では通常陶製外容器として使用される様な容器類を陶製経筒として使用している可能性が高いと考えられるのではなかろうか。その前提に立つならば、この朝熊山経塚群の青銅製経筒は、伊勢地域では異質なものであることになり、出土した理由を検討する必要がある。そこで想定されるのは、京周辺などから持ち込まれた可能性である。

三宅敏之は、『玉葉』に記載された九条兼実や慈円の関係した埋経行為に関する研究を行っている（三宅 1958）。『玉葉』の記述および三宅の研究で本論に関係するところでは、寿永元年九月の記述がある。その概要は、3年前から写経の準備を始め、写経後に一度横川に送られたのちに6ヵ所に埋経が行われたというものである²¹⁾。注目すべきは九月十四日条で、次のような埋経地に関する記載がある。

是如法経六部筒上、以木筆石墨奉書銘。

太神宮、八幡、賀茂、春日、日吉、天王寺。件六所々願成就之後可奉埋也。

次手自奉植紙麻。善根時至、植種々之勝因。²²⁾

三宅は、この6ヵ所の埋経地のうち「太神宮」を三重県伊勢太神宮と比定しているが、現在まで伊勢神宮境内からは経塚は発見されていない（三宅 1958）。しかし、この「太神宮」が伊勢神宮を指すことは疑いようがないであろう。では、この「太神宮」が示す埋経場所が伊勢神宮境内ではないとするならば、これに最も該当するのは朝熊山経塚群であろう。伊勢神宮付近には、ほかにも蓮台寺滝ノ口経塚群などが所在するわけであるが、これは大中臣氏の私的な性格の強い可能性が指摘されるなどしている（伊勢市教育委員会 1998）。それに比べ朝熊山経塚群は伊勢神宮の鬼門に造営され、伊勢神宮と関係が深い金剛證寺附近に造営されていることや、伊勢

神宮の神官である荒木田氏や度會氏の銘が入った経容器が出土していることから、こちらを比定するほうが最適であると考ええる。

京周辺からも埋納に訪れる伊勢神宮の経塚が朝熊山経塚群あれば、この経塚群には貴族層が想定される人々によって京の青銅製経筒が一定数持ち込まれたと想定することが許されるのではなかろうか。三宅の研究からは、少なくとも京の貴族層が近畿の聖地に経塚を造営する際、伊勢神宮の関係地（周辺地）に経塚を営んでいたことは明らかである。伊勢地域ではかに青銅製経筒の出土がなく、朝熊山経塚群以上に「太神宮」にふさわしい経塚がない以上、これらの青銅製経筒は基本的に京周辺などから持ち込まれた、当該地域では異質なものと考えておきたい。

しかし、朝熊山経塚群3号経塚では陶製外容器内から青銅製経筒が発見され、内部の経巻には平治元年(1159)の銘と奥書が確認されている（石田 1961; 保坂 1971）。その奥書には、度會雅彦に対する追善の目的であることが記されており、度會氏は伊勢神宮の神官である（中村 1989）。つまり、伊勢神宮の神官である度會氏に近い人物による埋経で青銅製経筒が用いられていたことになるので、朝熊山経塚群出土の青銅製経筒の全てが京周辺から持ち込まれたものとはいえない。けれども、この3号経塚はほかの伊勢神宮神官層によって造営されたことのわかる経塚とは若干差異が認められるので順に述べてみたい。

まず、外容器として使われた陶製経容器である。朝熊山経塚群からは多数の陶製経容器が出土しているが、3号経塚のものはほかの渥美窯の円筒形を呈する陶製無文経容器とは形態が異なっている。ほかの陶製経容器は円筒形が通常であるが、本例は胴部中央が大きく張り出し球形に近いのである。また、ほかの経塚では専用品の蓋を用いるのに対して、3号経塚では片口鉢を転用している。加えて、朝熊山経塚群で伊勢神宮の神官層によって造営されたことの確実な

経塚では陶製無文経容器を用いてその外面に銘文を記しているが、本例では外容器外面は無銘である。3号経塚の場合は、經典の奥書に銘文を記載している。

さらに、青銅製経筒自体も、近畿の青銅製経筒の型式分類による二段盛蓋B式であり、本型式は使用された中心地域は明らかになっていない（村木 1998a）。近畿の広域で出土するもので、京周辺とは異なる経容器の傾向を示す播磨地域でも出土する。よって、この青銅製経筒で地域性を判断することは困難である。

以上のような差異が認められることから、寧ろ朝熊山経塚群の中ではこちらが異質であり、この1点をもってここまでの検討を覆すまでには至っていないと思われる。

ここまでの検証から伊勢地域の経塚は、「東海西部の経塚」と類似する特徴をもつといえるが、青銅製経筒や陶製経容器の銘文などの経容器を中心として差異が認められる。さらに、瓦質経

容器の分布傾向なども考慮すれば、旧国単位としての「伊勢」が地域区分として独立するわけではなく、伊勢神宮（伊勢市）周辺を中心とした地域が、「京の経塚」や「東海西部の経塚」とは別地域に位置付けられるといえる（図31）。この地域の経塚については、「伊勢の経塚」と呼称することとしたい。伊勢地域は、京と東海西部の両地域の影響を受けながら、宗教的影響から独自の地域性を有しているといえる。

東海西部では、外容器に専用品、転用品を問わず、東海系の陶製容器が多数を占める。東播系須恵器などのように、生産窯付近の流通地域に消費されることは珍しくなく、東海西部の場合は単純に製品の供給圏として陶製経容器が流通したと解釈することができるのではないであろうか。

5.2 近畿における経塚の地域性

ここまで、近畿の経塚の地域性について経容



図 31 近畿の経塚の地域区分（筆者作成）

器を中心に検証してきた。

近畿に所在する経塚の地域区分については、先学によって4地域に区分することができると指摘された（村木 1998a, 2003）。本論で近畿として扱う地域の経塚は、村木二郎による区分で京周辺や紀伊付近の「京の経塚」、播磨を中心とした「播州の経塚」、丹後や但馬の「三丹の経塚」、それに加えて「東海西部の経塚」に含まれる伊勢地域で、4地域と区分されてきた。しかし、今回の検証によって伊勢地域を地域の類似する「京の経塚」と「東海西部の経塚」の双方の地域から独立させることが可能であるといえる。つまり、近畿の経塚は4地域に区分することができることには変わらないが、貴族層が中心と考えられる京周辺の「京の経塚」、東播系須恵器を豊富に用いる播磨周辺の「播州の経塚」、丹後周辺を中心に土師質容器を用いる「三丹の経塚」、京と東海西部両地域の影響を受けながら独自の地域性を示す伊勢神宮周辺の「伊勢の経塚」の4地域²³⁾に区分できる（図31）。そして、さらに東の「東海西部の経塚」も近畿で豊富に用いられる陶製経容器の生産窯を抱えるなどして、近畿の経塚造営に影響しているのである。

伊勢地域が京周辺や東海西部の影響を受けながらも独自の地域性を示すことは、なんといても伊勢神宮が鎮座することが多大な影響を与えているだろう。経容器に表れる地域性が単なる流通圏によるものに留まらず、宗教的環境や地域間の影響を反映していることが窺える。

6. まとめ

近畿の経塚から出土した経容器のうち、青銅製経筒以外の経容器から経塚造営の実態や位置付けを可能とすることを目的として検証を行ってきた。特に地域性、時期（時代性）、階層差（造営主体）の3点を明らかにすることに主眼を置き検証したので、これらを中心に各章での考察についてまとめる。

近畿の経塚が示す地域性は、従来の青銅製経

筒などを取り上げて検証されたものと大枠は変わらないものの、陶製経容器や瓦質経容器の考察によって伊勢地域中心部が独自の地域性を示すことが明らかになった。伊勢地域と類似の傾向を示す隣接地域である、山城周辺などの「京の経塚」と「東海西部の経塚」との比較検討を行った。京の経塚との比較では、両地域で豊富に用いられる陶製経容器の傾向が異なり、京周辺では三筋文経容器を用いるが、伊勢地域では無文経容器に限られた。また、陶製経容器と瓦質経容器の分布傾向も異なることが明らかになった。東海西部の経塚との比較も行い、青銅製経筒の存在や、陶製経容器に銘文が記された個体の差などについての検討から、隣接する両地域とは別地域に区分することができるとの結論に至った。近畿の経塚が山城や紀伊などの「京の経塚」、伊勢の中心地域の「伊勢の経塚」、東播系須恵器を中心とした播磨周辺の「播州の経塚」、土師質容器を主体とする「三丹の経塚」の4地域に区分することができることが明らかになった²⁴⁾。

つぎに、経容器の時期について陶製経容器を中心として検証を行った。形態分類などによる分析で、口縁部形態に時期的傾向が大きく反映されていることを示し、その変化にも併存期間があることを提示した。これに各生産窯での編年研究も加味して、近畿の経塚での時期的傾向を編年的に提示した。

最後に階層差や造営主体の影響については、これまで、一様に粗製品として考えられた瓦質経容器を製作技法によって細分し、瓦工と土器工人による製作の差を明らかにした。その分布傾向などから、瓦工人によって製作されたものが高位に位置付けられると考えられた。この検証を反映して、単なる材質の差に限らない経容器の位置付けを提示した。

以上が各章での考察である。このように陶器系・土器系の経容器からは、地域性や時期、階層差を明らかにすることができるのである。さらに、その背景には地域信仰や地域社会の動向

が反映しているといえる。

経塚は末法の世において、畏れや祈りによって造営が流行する。しかし、その経塚造営を支えているのは、地域の信仰や経容器の流通、埋納品を製作する技術者であり、経塚遺物には社会的背景が反映されているといえるのである。経容器を中心とした経塚の検証をさらに行えば、経塚が埋納品を通して往時の地域社会の情景を映し出すであろう。

おわりに

ここまで、陶器系・土器系の経容器を中心とした検証を行ってきたので、考古学的手法による経塚研究に関する今後の展望を述べておわりとしたい。

経塚は、宗教的な遺跡であるが故に特殊な性格をもつ遺跡であると解釈されることがあるが、経塚は地域信仰、流通論、階層差など地域社会の動向などを反映している遺跡であるといえよう。さらに、時期や技術論、工人差についての検証を経塚遺物から行うことも可能である。地域社会の動向を明らかにするうえで、考古学的手法による経塚の研究は有効である。

本論は、近畿地域を対象としたものであったので、対象地域の拡大による広域的な検証が必要になる。経塚の考古学的手法を用いた検証からは、文献史学的研究には表出しづらい京から離れた地域社会の動向や、下位の階層による経塚造営の実態や信仰を研究することができると考えられる。それによって、従来では見えてこなかった地域社会の動向が窺えることが想定される。今後のさらなる検証には対象地域の拡大に加え、研究の手法の拡大や精度の向上により、経容器からの研究手法を確固たるものにしていかなければならない。特に本論で行った経容器の材質による分類に頼らない、製作技法などによる分類の方法を強化していきたい。

経塚の考古学的手法による研究によって、中世地域社会の動向を明らかにすることを今後の

課題として筆を擱く。

付記

本論は、2023年度に奈良大学大学院文学研究科へ提出した修士論文を基調として、一部を削除し、加筆・修正を行ったものである。修士論文執筆にあたっては、奈良大学の相原嘉之、小林青樹両先生に御指導を賜りました。国立歴史民俗博物館の村木二郎先生には、修士論文執筆時より御助言をいただき、改稿にあたっての御指導・御助言を賜りました。

また、以下の諸氏・諸機関に資料調査をはじめとして多大なる御指導・御教示・御協力をいただきました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

海部憲子、犬持雅哉、大串享平、大河内智之、岡崎崇、岡本祐範、加藤晃靖、加藤實、掃部光淳、小林慶昭、小林慶範、小林高太、坂本亮太、狭川真一、奈良康正、濱中孝成、松尾史子、山崎靖彦、吉井秀夫、和澄浩平、和田大作

うめ振興館、笠置寺、かつらぎ町教育委員会、京都大学、京都大学総合博物館、熊野神宝館、熊野速玉大社、熊野本宮大社、籠神社、新宮市教育委員会、神宮寺（丹生大師）、仙宮神社、丹後郷土資料館、南丹市立文化博物館、琵琶湖文化館、真名井神社、みなべ町教育委員会、山城郷土資料館、善峯寺、和歌山県立博物館

（敬称略・五十音順）

註

- 1) 近畿の範囲として2府5県、旧国で近江、山城、大和、伊勢、志摩、伊賀、河内、和泉、紀伊、摂津、播磨、丹波、丹後、但馬を対象とした。先学の地域的研究で「近畿」とされた範囲を参考とした（関 1984; 村木 1998aほか）。
- 2) 本論で扱う「経塚」は、いわゆる紙本経を埋納した経塚のうち、経容器の出土した経塚を対象としている。したがって、廻国納経に関わる経塚、瓦経塚、礫石経塚などについては除外した。先学の区分では、坂詰秀一の「埋経の経塚」（坂詰 1990）、関秀夫の「古代の経塚」（関 1985, 1990）

- に該当する。
- 3) 一部では先学や報文での研究の呼称に準拠した箇所がある。
 - 4) 修学院経塚（山城）の陶製経容器は蓋に沈線が引かれており、本来であれば筒身も三筋文のものが組み合う可能性が高いが、報告書の写真では沈線が確認できないため無文経容器に分類した。
 - 5) 破片資料で、先学の本文で特に言及の無い金峯山経塚、多度大社経塚は無文としたが、三筋文である可能性を残している。また、無文と分類した修学院経塚は三筋文である可能性がある（註4に同じ）。
 - 6) 真名井神社経塚からは、文治5年（1189）銘をもつ青銅製経筒が確認されている。現在において陶製経容器と青銅製経筒との確実なセット関係は不明である。
 - 7) 石作経塚には土師質とされる4点の経容器が伝わっているが、外面に燻しの可能性を感じさせる黒色になる部分がある。筆者はこれらの資料を実見できる立場になく、本論では先学に従い「土師質」に分類したが、石作経塚の土師質容器も瓦質経容器に区分できる可能性があることを示しておきたい。
 - 8) 杉原和雄は、土師質容器や甕の用途は経筒以外に火葬骨を納めた可能性などがあり、経塚以外に墓地を想定する必要を指摘して、直ちに経塚として扱うことには慎重な立場である（杉原1981, 1987, 1989, 2021）。
 - 9) 常滑窯編年では、現在広く浸透している「赤羽・中野生産地編年」を採用した。編年の各時期は、1b型式（1130～1150）、2型式（1150～1175）、3型式（1175～1190）、4型式（1190～1220）、5型式（1220～1250）である。
 - 10) 東播系須恵器は現在でも研究が進んでおり、日本中世土器研究会によって「東播系須恵器―編年と分布から考える―」として鉢や生産窯を中心とした研究が行われている（日本中世土器研究会2015）。しかし、鉢による編年研究が中心であり、本論では鉢および甕双方の編年が提示されている荻野編年を使用した。
 - 11) 吉岡康暢（1985）で丹波とされるものを参考としたが、山の神経塚例を村木二郎は常滑とするなど産地は定まっていない（村木1998a）。
 - 12) 十瓶山窯では、生産窯で編年が編まれているのでそちらを参考とした（片桐1992; 佐藤1993）。両編年には若干の差異は認められるものの甕Cとされるものに該当する。上部が欠失している個体も含まれるが12世紀代のものである可能性があり、九州の経塚に使用された事例を踏まえると、特に12世紀前半が想定される。
 - 13) 常滑窯の三筋壺生産も、6a型式に位置付けられる資料が示されるなど13世紀まで生産が続くことが示されている（愛知県史編纂委員会編2012; 中野2013）。しかし、生産量は2～3型式が多く4型式までは生産されるが、5型式以降では急激な生産量の減少が指摘されている（中野2013）。やはり、三筋文系陶器は13世紀以降も生産が続けられたようではあるが、12世紀代が生産の中心時期であることがわかる。
 - 14) 朝熊山経塚群などで詳細な法量が公表されていないものがあり、図面を参考に法量の分析を行った（伊勢市教育委員会1998; 山澤2011）。
 - 15) 単に焼成・硬度のみによる分類で瓦質を分類しては、同一遺跡内で同様の製作技法を用いた経容器に片方を瓦質、もう一方を土師質などと分類する可能性がある。これは、製作の系譜の考察にも影響し、本来捉えられるはずの同一遺跡内での焼成・硬度の時期的変化について見失うことに繋がる懸念から製作技法による分類を採用した。
 - 16) 檜崎編年では11世紀後半から13世紀前半までをI期からVI期の6期に区分している。1期の期間は四半世紀に区分している（檜崎1978）。
 - 17) 槇尾山経塚からは保延5年（1140）の銘をもつ青銅製経筒が出土している。この青銅製経筒がどの外容器に伴うものであるかは明らかになっていないが、経塚の年代を決定するにあたって、ひとつの指標となるもので、陶製経容器の年代の裏付けになろう。
 - 18) 村木二郎が青銅製経筒と外容器によって提示した地域区分は、「京の経塚」山城・近江・大和・河内・和泉・紀伊・伊賀・丹波南東部・摂津東部、「播州の経塚」播磨・摂津西部・丹波南部、「三丹の経塚」丹波北部・丹後・但馬、「東海西部の経塚」濃尾平野から三遠地域・伊勢である。伊勢地域は一時「京の経塚」に区分されたが、東海の経塚との比較によって別地域に区分できる可能性が指摘されていた（村木1998a）。その後、東海西部との比較によって同様の傾向を示すとして「東海西部の経塚」に区分された（村木2003）。
 - 19) 小国神社経塚では、陶製経容器ともされる個体が出土している。この個体は、先学において、素焼きや土師質とされる場合が多く、土師質として扱った（向坂1971; 村木2003）。本例を陶製

とした場合でも、基本的には日付を記載したもので、伊勢地域の銘文のように願主の名や経緯を記載したものではない。また、三ツ谷新田経塚で藤原顕長銘を含む銘文をもつ壺が確認されている。銘をもつので、壺でありながら製作時既に外容器としての用途を想定されていたものである。しかし、いわゆる円筒形の専用品陶製経容器とは異なるもので、同様に豊富な東海系の専用品を用いることが違う傾向といえる。

- 20) 伊勢では度々陶製経容器について、早くから「陶製経筒」の名称が使用されてきた（大西 1921; 佐藤 1935ほか）。
- 21) 『玉葉』寿永元年（1182）九月十四日条・九月十九日条
- 22) 『玉葉』寿永元年（1182）九月十四日条
- 23) 従来の地域性と重なる地域では、先学の名称を踏襲している（村木 1998a, 2003）。
- 24) 註23に同じ

引用・参考文献

愛知県史編纂委員会（編）

- 2007 『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系。愛知県。
- 2012 『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世 常滑系。愛知県。
- 2015 『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系。愛知県。

秋山進午

- 1983 『和泉槇尾山経塚発掘調査報告書』和泉市久保惣記念美術館。

石田茂作

- 1929 「経塚」『考古学講座』20 國史講習會（雄山閣）。
- 1961 「伊勢朝熊山経塚」『立正考古』18: 1-4。

五十嵐和博

- 2006 「有機質経筒の諸問題—陸奥・駒壇経塚の再検討—」『考古学の諸相II』: 559-572。匠出版。

伊勢市教育委員会（編）

- 1998 『蓮台寺滝ノ口経塚群』。

伊勢市立郷土資料館（編）

- 1991 『一埋経信仰—伊勢の経塚』。

稲垣晋也

- 1988 「三重県伊勢市朝熊山経塚発掘ノート—経塚の構造と造営次第—」『MUSEUM』451: 32-40。

岩橋小彌太・梅原末治・中村直勝

- 1924 「叡岳横川根本如法堂址の発見」『歴史

と地理』13(1): 80-110。

梅原末治

- 1925a 「神崎村油江ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査會報告』6: 135-142。京都府（1983 臨川書店から復刻）。

大場磐雄

- 1975 「春日御蓋山の経塚群」『歴史考古学論考』大場磐雄著作集4: 151-155。雄山閣出版（1949『かしはら』6に公表されたものを再録）。

荻野繁春

- 1985 「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井県考古学会会誌』3: 1-82。

- 1993 「中世西日本における国産貯蔵容器の分布」『福井考古学会会誌』11: 45-94。

奥村秀雄

- 1965 「伊勢地方における埋経—渥美半島との関係において—」『MUSEUM』167: 14-22。

小田富士雄

- 1968 「西日本の石製経筒」『日本歴史考古学論叢』2: 175-205。雄山閣出版（後に1977『九州考古学研究 歴史時代篇』に収録）。

片桐孝浩

- 1992 「讃岐国十瓶山窯製品の流通について」『中近世土器の基礎研究』VIII: 165-201。
- 2004 「経塚出土の陶磁器—四国地域の様相—」『貿易陶磁研究』24: 19-28。

羯磨正信・伊勢田進

- 1979 「和歌山の経塚」『和歌山の研究』第1巻 地質・考古篇: 349-374。清文堂出版。

川勝政太郎

- 1958 「浄土寺南田町の経塚遺物」『史迹と美術』280: 16-22。

蔵田 蔵・巽 三郎（編）

- 1975 『高野山奥之院の地寶』和歌山県教育委員会・高野山文化財保存会。

皇學館大學考古學研究會（編）

- 1986 「豆石山経塚」『二見町の遺跡と遺物』: 24-26。

坂詰秀一

- 1990 「「経塚」の概念」『古代學研究所研究紀要』1: 25-30。古代學協會。

佐藤亜聖

- 1996 「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XI: 247-268。

- 2022 「第2章 畿内産瓦器碗」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』:187-200。真陽社。
- 佐藤虎雄
1929 「花背村の経塚」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』10: 5-24。京都府。
- 1935 「伊勢國の経塚」『史林』20(1): 120-137。
- 佐藤竜馬
1993 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』: 775-810。関西大学文学部考古学研究室。
- 滋賀県教育委員会（編）
1979 『滋賀県文化財調査報告書』7。
- 静岡県（編）
1992 『静岡県史』資料編3 考古三。
1994 『静岡県史』通史編1 原始・古代。
1997 『静岡県史』通史編2 中世。
- 白石太一郎
1969 「いわゆる瓦器に関する二・三の問題—古代末～中世初頭における土器の生産と流通に関する一考察—」『古代学研究』54: 1-29。
- 末永雅雄
1949 「春日大社本宮跡出土埋経関係遺物」『奈良縣史蹟天然記念物調査抄報』3: 21-23。奈良縣史蹟名勝天然記念物調査委員会。
- 菅原正明
1989 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』19: 167-308。
1990 「「瓦器」はなにを語るか」『中近世土器の基礎研究』VI: 3-20。
- 杉原和雄
1981 「京都府北部出土の土師製筒形容器とその伴出品」『史想』19: 57-67。京都教育大学考古学研究会。
1987 「経塚遺構と古墓—京都府北部を中心として—」『京都府埋蔵文化財論集』1: 425-433。京都府埋蔵文化財調査研究センター。
1989 「経塚と墳墓—丹波・丹後を中心とした筒形容器出土の遺跡について—」『考古学雑誌』74(4): 36-66。
2001 「近年調査された京都府北部出土の土師製筒形容器とその遺跡について—経塚と墳墓を考える—」『京都府埋蔵文化財論集』4: 463-478。京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 2021 「経塚と墳墓」を考える—京都府北部出土の筒形容器と甕・壺の遺跡を中心に—『京都府埋蔵文化財論集』8: 363-376。京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 杉山 洋
1983 「熊野三山の経塚」『文化財論叢』: 849-868。同朋舎出版。
- 鈴木裕篤
1981 「三明寺経塚とその周辺」『沼津市歴史民俗資料館紀要』5: 57-91。沼津市歴史民俗資料館。
- 首藤久士
2009 「四国における瓦質土器の変遷と流通—瓦器碗から奈良火鉢・茶釜へ—」『中近世土器の基礎研究』22: 103-118。
- 関 秀夫
1984 『経塚地名総覧』考古学ライブラリー24。ニュー・サイエンス社。
1985 『経塚』考古学ライブラリー33。ニュー・サイエンス社。
1990 『経塚の諸相とその展開』雄山閣出版。
- 巽 三郎
1964 「那智山経塚出土の瓦製経筒」『熊野路考古』4: 32。
- 立石堅志
1995 「10. 瓦質土器〔1〕奈良火鉢」『概説 中世の土器・陶磁器』: 437-447。真陽社。
- 田辺市史編さん委員会（編）
1994 『田辺市史』4 史料編I。田辺市。
- 中世土器研究会事務局
2015 「東播系須恵器鉢の分類と編年」『中近世土器の基礎研究』26: 139-151。
- 東京国立博物館（編）
1985 『那智経塚遺物宝』東京美術。
2018 『東京国立博物館図版目録』経塚遺物篇（西日本）新訂。
- 時野谷勝
1938a 「綾部町藤山経塚」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』18: 125-130。京都府（1983臨川書店から復刻）。
- 豊島 修
1978 「笠置寺の修験道」『近畿霊山と修験道』: 140-159。名著出版。
- 中野晴久
1995 「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』: 29-41。小学館。

- 2013 「中世常滑窯の研究」愛知学院大学大学院 博士論文。
- 2022 「第1節 東海諸窯」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』: 231-248。真陽社。
- 中村五郎
- 1989 「豊受大神宮欄宜度會氏の経塚造営とその周辺」『福島考古』30: 63-82。
- 奈良国立博物館（編）
- 1977 『経塚遺宝』東京美術。
- 橋崎彰一
- 1978 「初期中世陶における三筋文の系譜 第1部三筋文系陶器とその編年」『名古屋大学文学部研究論集LXXIV』史学25: 99-146。名古屋大学文学部。
- 日本中世土器研究会（編）
- 2015 『中近世土器の基礎研究』26。
- 新田和央
- 2022 「第6章 瓦質土器（火鉢・風炉）」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』: 315-326。真陽社。
- 沼津市史編纂委員会・沼津市教育委員会（編）
- 2002 『沼津市史』資料編 考古。沼津市。
- 橋本勝行
- 2002 「丹後の経塚と古墓」『太邇和考古』18: 6-8。両丹考古学研究会。
- 2008 『京丹後市の経塚』京丹後市立丹後古代の里資料館。
- 福田典明
- 2006 「伊賀地域における瓦器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究』XX: 21-32。
- 保坂三郎
- 1971 『経塚論考』中央公論美術出版。
- 松本達也
- 2002 「中丹波の経塚と古墓」『太邇波考古』18: 8-12。
- 三重県（編）
- 2008 「経塚概要」『三重県史 資料編』考古2: 149-169。
- 三宅敏之
- 1958 「経塚の営造について—藤原兼実の埋経を中心として—」『史学雑誌』67(12): (「藤原兼実の埋経」として『経塚論攷』雄山閣に1983年収録) ページ
- 1977 「経塚の遺物」『新版 仏教考古学講座』6 経典・経塚: 71-140。雄山閣出版。
- 向坂鋼二
- 1971 「小国神社の経塚遺物をめぐって」『森町考古』1: 2-3。森町考古学研究会。
- 村木二郎
- 1998a 「近畿の経塚」『史林』81(2): 69-109。
- 1998b 「九州の経塚造営体制」『古文化談叢』40: 229-254。
- 2003 「東日本の経塚の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告』108: 165-190。
- 2011 「四天王寺の経塚」『経塚考古学論攷』: 167-181。岩田書院。
- 森内秀造
- 1992 「経筒の形態からみた兵庫県の経塚」『兵庫県の経塚』兵庫県立歴史博物館。
- 2011 「兵庫県但馬地方を中心とした経塚の概観」『経塚考古学論攷』: 183-205。岩田書院。
- 森田 稔
- 1983 「18 滝ノ奥遺跡」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』: 86-96。神戸市教育委員会。
- 1986 「東播系中世須恵器生産の成立と展開—神出古窯址群を中心に—」『神戸市立博物館研究紀要』3: 3-29。神戸市立博物館。
- 山澤義貴
- 2011 「第5節 朝熊山経塚」『伊勢市史』6考古編: 702-750。伊勢市。
- 山本智子
- 2022 「第3章 山茶碗」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』: 201-218。真陽社。
- 吉岡康暢
- 1985 「経外容器からみた初期中世陶器の地域相—須恵器系中世陶器を中心に—」『石川県立郷土資料館紀要』14: 1-132。石川県立郷土資料館。
- 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館。
- 経容器出土経塚一覧表対応文献（参考文献で既出の文献は割愛する）
- 赤穂市史編纂専門委員（編）
- 1984 『赤穂市史』第4巻。赤穂市。
- 安部辨雄
- 1956 「紀伊国熊岡経塚について」『古代学研究』15, 16: 65-67。
- 綾部市史編纂委員会（編）
- 1976 『綾部市史』上巻。綾部市役所。
- 安藤信策
- 2010 「稻荷山経塚覚え書」『京都府埋蔵文化財論集』6: 229-312。京都府埋蔵文化財調査研究センター。

- 石崎善久
1992 「通り古墳群」『京都府遺跡調査概報』50: 85-112。京都府埋蔵文化財調査研究センター。
2000 「大宮町左坂古墳群の経塚状遺構」『京都府埋蔵文化財情報』76: 11-18。京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 石部正志
1959 「三重県霊山経塚」『先史学研究』1: 21-26。同志社大学先史学研究会。
- 石上神宮（編）
1929 『石上神宮寶物誌』。
- 一志町役場企画課（編）
1981 『一志町史』上巻。一志町役場。
- 岩井武俊
1910 「山城國乙訓郡大原野村発掘の経筒」『考古學雜誌』1(2): 34-39。
1912 「山城國稻荷山経塚發掘遺物の研究」『考古學雜誌』2(8): 1-24。
- 岩松 保・森 正・森島康雄
1991 「山形古墓群」『京都府遺跡調査概報』44: 53-64。京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 上野市教育委員会（編）
1975 『猪田経塚』。
- 上野 元・巽 三郎
1961 『熊野新宮経塚の研究』熊野神宝館。
- 宇治市歴史資料館（編）
2003 『白川金色院跡 発掘調査報告書』宇治市教育委員会。
- 梅原末治
1920a 「下夜久野村ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査會報告』2: 115-117。京都府（1983臨川書店から復刻）。
1920b 「久美谷村ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査會報告』2: 136-140。京都府（1983臨川書店から復刻）。
1920c 「海士ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査會報告』2: 142-143。京都府（1983臨川書店から復刻）。
1923a 「花脊村ノ経塚及ビ關係遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告』4: 1-18。京都府（1983臨川書店から復刻）。
1923b 「男山塚ヶ谷ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査會報告』5: 38-42。京都府（1983臨川書店から復刻）。
1925b 「修學院村ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査會報告』6: 38-42。京都府（1983臨川書店から復刻）。
- 1926 「善峯寺ノ経塚」『京都府史蹟勝地調査會報告』7: 79-90。京都府（1983臨川書店から復刻）。
大谷女子大学博物館（編）
2002 『熊野本宮備崎経塚発掘調査報告書』。
- 太田睦郎
1936 「播磨神野村二塚古墳」『考古学雑誌』26(4): 36-45。
- 大西源一
1921 「神宮寺経筒」『考古學雜誌』11(10): 43。
1923 「仙宮神社及仙宮院」『考古學雜誌』13(10): 54-58。
1954 「三重県一志郡倭村経塚」『日本考古学年報2（昭和24年度）』: 114-115。日本考古学協会。
- 大場磐雄
1961 「春日大社の考古学的考察」『春日大社・興福寺』: 42-56。近畿日本鉄道株式会社。
1977 『楽石雑筆（下）』大場磐雄著作集8: 196-197。雄山閣出版。
- 大宮町教育委員会（編）
1998 『左坂古墳群・幾坂経塚・幾坂城跡発掘調査概報』。
2001 『今市古墳群・墳墓群・経塚発掘調査概報』。
2004 『水戸谷遺跡発掘調査概報』。
- 景山春樹
1954 「山城考古展の新資料」『史迹と美術』242: 145-154。
1959 「比良山中腹から経塚遺物発見」『古代文化』3(9): 178-179。
- 樫原考古学研究所（編）
1989 『広瀬地蔵山墓地跡』。
- 梶川敏夫
1976 「北野天満宮境内発見の経塚出土品」『京都考古』24: 5-8（1981『京都考古』1-25合冊所収）。
- 羯磨正信・伊勢田進
1979 「和歌山の経塚」『和歌山の研究』1地質・考古篇: 349-374。清文堂出版。
- 鎌木義昌・亀田修一（編）
1988 『播磨江ノ上経塚発掘調査報告書』瀬戸内考古学研究所。
- 京丹後市立丹後古代の里資料館（編）
2008 『京丹後市の経塚』。
- 京都国立博物館（編）
1986 『経塚遺宝 京都国立博物館蔵』便利堂。

- 京都大学埋蔵文化財研究センター（編）
2006 「京都大学吉田南構内AR24区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2001年度: 158-170。
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター（編）
1983 『京都府遺跡調査報告書』1。
- 京都府立丹後郷土資料館（編）
1977 『経塚 丹後とその周辺』。
- 久美浜町教育委員会（編）
1984 『権現山古墳発掘調査概報』。
- 久美浜町史編纂委員会（編）
2004 『久美浜町史』資料編 久美浜町。
- 蔵田 蔵
1965a 「東京国立博物館保管近畿地方出土の経塚遺物 上」『MUSEUM』174: 21-30。
1965b 「東京国立博物館保管近畿地方出土の経塚遺物 中」『MUSEUM』176: 16-25。
1965c 「東京国立博物館保管近畿地方出土の経塚遺物 下」『MUSEUM』177: 15-29。
- 黒坪一樹
1997 「天王山古墳群」『京都府遺跡調査概報』76。京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 小池 寛
1992 「高田山古墳群（付 高田山中世墓・経塚群）」『京都府遺跡調査概報』49: 73-91。京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 小玉道明
1981 「漆経塚群とその埋納品」『美杉村史』上巻: 141-158。美杉村役場。
- 小檜山一良
1997 「広隆寺旧境内・弁天島経塚群」『京都嵯峨野の遺跡一広域立会調査による遺跡調査報告一』: 154-160。京都市埋蔵文化財研究所。
- 斎宮歴史博物館（編）
1992 『古代の祈り一山岳信仰から経塚へ一』。
- 佐藤虎雄
1930 「大蟲神社境内経塚」『京都府史蹟勝地調査會報告』11: 86-91。京都府（1983臨川書店から復刻）。
- 志賀町史編纂委員会（編）
1996 『志賀町史』1。志賀町。
- 島本 一
1939 「春日山発見の陶筒と石筒」『大和志』6(12): 1-8。大和國史會。
- 高橋健自
1912 「山城稻荷山経塚及發掘遺物に就きて」『考古学雑誌』2(8): 24-33。
- 多紀郡教育事務組合教育委員会（編）
1972 『西山北古墳調査報告書』。
- 竹原一彦
1981 「豊富谷丘陵遺跡（大道寺跡）発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財情報』2: 1-7。京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 龍野市史編纂委員会（編）
1984 『龍野市史』4 史料編I。龍野市。
- 巽 三郎・山本 賢ほか
1962 「紀伊国比井経塚遺跡発掘調査概報」『熊野路考古』1: 1-7。
- 辰馬悦蔵・吉井太郎ほか
1928 「會下山二本松古墳及び経塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』5: 1-16。兵庫県。
- 帝国博物館（編）
1937 『金峯山経塚遺物の研究』。
- 出石町教育委員会（編）
1985 『田多地古墳群・田多地経塚群I』。
- 時野谷勝
1938b 「宮津町河原山経塚」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』18: 131-136。京都府（1983臨川書店から復刻）。
- 時野谷勝
1938c 「下佐濃村永留の経塚」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』18: 137-138。京都府（1983臨川書店から復刻）。
- 富田好久
1966 「大阪府池田市鉢塚古墳上の経塚」『史泉』31: 1-10。
- 豊岡市教育委員会（編）
1975 「付載II 妙楽寺遺跡群」『但馬・妙楽寺遺跡群』: 89-90。
- 豊岡市史編集委員会（編）
1981 『豊岡市史』上巻。豊岡市。
1993 『豊岡市史』史料編下巻。豊岡市。
- 豊岡市立郷土資料館（編）
1990 「鎌田・若宮古墳群」『豊岡市文化財調査報告書集1989年度』: 1-78。但馬考古学研究会。
- 中島史子
2001 「橋木林遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』96: 1-9。京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 中村春寿
1981 「本宮神社附近の経塚遺物」『春日大社古代祭祀遺跡調査報告』: 24-30。春日

- 顕彰会。
 奈良国立博物館（編）
 1977 『経塚遺宝』東京美術。
 1995 『経塚出土陶磁展 畿内に埋納されたやきもの』。
 2004 『七支刀と石上神宮の神宝』。
 2018 『国宝 春日大社のすべて』奈良国立博物館・朝日新聞社・NHKプラネット近畿。
- 西口和彦・水口富夫
 1986 「新宮山経塚・中世墓群」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度: 272-275。兵庫県教育委員会。
- 橋本市教育委員会（編）
 2023 『隅田八幡神社経塚発掘調査報告書』。
- 橋本侑大（編）
 2024 『朝来経塚群発掘調査報告書一和歌山県上富田町における経塚・古墳の調査一』奈良大学文学部文化財学科。
- 服部清道
 1961 「西塔の経塚一叡山考古3一」『史迹と美術』312: 42-51。
- 浜坂町教育委員会（編）
 1988 『井ノ谷古墳群』。
- 肥後弘幸
 1992 「国営農地開発事業関係遺跡平成3年度発掘調査概要〔3〕豊谷遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報（1992）』: 72-83。京都府教育委員会。
- 日高町史編集専門委員会義（編）
 1980 『日高町史資料編』日高町。
- 廣瀬都巽
 1924 「横川経塚」『考古學雑誌』14(5): 1-17。
- 兵庫県教育委員会（編）
 1986 『上板井古墳群』。
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（編）
 1999 『向山古墳群・市条寺古墳群・一乗寺経塚・矢別遺跡』兵庫県教育委員会。
 2002 『薬師前遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会。
- 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部（編）
 2013 『宮ノ谷古墳群Ⅱ』兵庫県教育委員会。
- 兵庫県立考古資料館（編）
 2010 『寺山古墳群・宮ノ谷古墳群・諏訪城跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会。
 2011 『田ノ口遺跡』兵庫県教育委員会。
- 兵庫県立歴史博物館（編）
 1987 『西脇・多可』。
 1992 『兵庫の経塚』。
- 福原潜次郎
 1905 「神戸市石井村発見の経筒及び古鏡に就きて」『考古界』5(3): 141-14。考古學會。
- 藤沢長治
 1957 「兵庫県加東郡王塚古墳」『日本考古学年報』5。日本考古学協会。
- 二見町教育委員会（編）
 2004 『安養寺跡・豆石山中世墓群・五峰山2号墳』。
- 保坂三郎
 1971 『鞍馬寺教塚遺物』中央公論美術出版。
- 舞鶴市教育委員会（編）
 2000 『上佐波賀遺跡・天台南谷遺跡発掘調査概要報告書』舞鶴市。
- 増田信武・百田昌夫ほか
 1980 「二ノ宮経塚調査概要」『水無月山遺跡発掘調査報告書』: 69-82。京都府教育委員会。
- 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター（編）
 1991 「亀谷郷遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報VII』: 53-58。
- 三重県埋蔵文化財センター
 2009 『横尾墳墓群（中・近世墓）発掘調査報告』研究紀要18(2)。
- 三木市（編）
 1970 『三木市史』三木市役所。
- 水口富夫
 1987 「豊岡市気比大平寺経塚遺物」『わたりやぐら』5: 1-6。兵庫県立歴史博物館。
- 三宅敏之
 1970 「稻荷山の経塚」『朱』10: 98-104。伏見稻荷大社（1983「京都・稻荷山経塚」として『経塚論攷』に収録）。
- 宮津市史編纂委員会（編）
 1996 『宮津市史』史料編第1巻。宮津市役所。
 2002 『宮津市史』通史編上巻。宮津市役所。
- 三輪善之助
 1931 「伊勢の陶製経筒」『考古學雑誌』21(8): 44-46。
- 森島康雄・村田和弘
 2004 「天王山古墳群B支群1号墳経塚」『京都府埋蔵文化財情報』91: 27-30。京都府埋蔵文化財調査研究センター。
- 弥栄町教育委員会（編）
 1998 『大田南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡

第2次～第5次発掘調査報告書』。
吉田 清
1971 「廃寺園部善願寺攷」『仏教史学』15(2):
144-159。
和歌山県史編纂委員会（編）
1983 『和歌山県史 考古資料』和歌山県。

和田千吉
1912 「経塚の位置と其内部の状態」『考古學
雑誌』2(8): 34-47。

2024年 8月8日 受付
2024年12月6日 採択決定

経容器出土経塚一覧表

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
近江1	打見山		陶製（三筋文）	陶製（沈線）	景山1959、志賀町史編集委員会1996
近江2	横川 （如法塔）		銅塔		岩橋・梅原・中村1924、滋賀県教育委員会1979、廣瀬1924
			石製筒（花崗岩）		
			瓦質	瓦質	
			石製筒		
	（五輪塔）		瓦質（他数本）	瓦質	滋賀県教育委員会1979
	（裏山）	A	陶製（三筋文）	陶製	
		B	陶製四耳壺		
			陶製（無文）	陶製	
			土師質	土師質	
			土師質	土師質	
			土師質		
			瓦質		
			瓦質		
			常滑甕		
		C	陶製（三筋文）		
			陶製（三筋文）	陶製	
		D	瓦質		
			陶製（三筋文）	陶製	
			石製（凝灰岩）		
	不明		陶製（無文）		
	攪乱		陶製（無文）		
			瓦質		
			釉薬壺		
近江3	比叡西塔 （相輪櫓）		陶製甕		服部1961
	（六所権現）		陶製（無文）		奈良国立博物館1995
			陶製（無文）		
近江4	比叡南岳		陶製（無文）	陶製	蔵田1965b、東京国立博物館2018
近江5	九条		瓦質		蔵田1965b、東京国立博物館2018
近江6	鈴鹿山		陶製壺		蔵田1965b
山城1	花背別所	1号	陶製（組合せ）	陶製（組合せ）	梅原1923a
		2号	土師質	土師質	
		2号	土師質壺		
		3号	常滑甕		
		4号	常滑甕	陶製鉢	

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
山城1	花背別所	5号	土師質	土師質	佐藤1929
		6号	陶製	陶製	
		6号	陶製（三筋文）	陶製	
山城2	鞍馬寺		陶製（三筋文）		京都国立博物館1986
			陶製（無文）		
			陶製（三筋文）	片口鉢	保坂1971
			瓦質		
			土師質	土師質	
山城3	四明ヶ嶽		須恵器甕		景山1954、蔵田1965C、東京国立博物館2018
			須恵器甕		
山城4	修学院	1号	陶製（無文）	陶製（沈線）	梅原1925b
		2号	陶製（無文）		
山城5	浄土寺南田		石製櫃（花崗岩）	石製	川勝1958
山城6	吉田	SX01	須恵器甕		京都大学埋蔵文化財研究センター 2006
山城7	北野天満宮		常滑甕		梶川1976
山城8	弁天島	3号	十瓶山甕		村木1998a、小檜山1997、吉岡1985
		10号	須恵器甕		
		10号	瓦質		
		12号	須恵器甕		
		12号	東播甕		
		12号	瓦質		
		13号	須恵器甕		
		攪乱	陶製（三筋文）		
			常滑		
			陶製（三筋文）		
山城9	東山松原		瓦質	瓦当	蔵田1965c、東京国立博物館2018
山城10	清水寺		陶製（三筋文）		蔵田1965c、東京国立博物館2018
山城11	稲荷山		陶製（無文）	陶製	安藤2010、岩井1912、高橋1912、三宅1970
			陶製（無文）	陶製	
山城12	石作		陶製（三筋文）		岩井1910、蔵田1965c、東京国立博物館2018
			陶製（無文）		
			陶製（無文）	陶製	
			土師質		
			土師質		
			土師質		
			土師質		

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
山城13	善峯寺		陶製（無文）	陶製	梅原1926
			陶製（無文）	陶製	
			瓦質	瓦当	
			瓦質		
山城14	白川金色院	SX5505	瓦質		宇治市教育委員会2003
		攪乱	陶製（三筋文）		
山城15	笠置寺		陶製（三筋文）	陶製	村木1998a
			陶製（無文）	陶製	
			陶製（無文）		
			陶製（無文）		新出資料
			陶製甕		村木1998a
			瓦質	瓦質	新出資料
			瓦質		
			瓦質		
大和1	御蓋山 （春日山）		瓦質	瓦質	大場1961・1975・1977、島本1939
			石製筒（凝灰岩）		
			瓦質	瓦質	末永1949
大和1	御蓋山 （春日山）		瓦質深鉢		末永1949
			十瓶山甕		
			陶製壺		
			瓦質	瓦質	中村1981
			瓦質		
			陶製壺		
			石製筒（花崗岩）		奈良国立博物館2018
大和2	広瀬地藏山 墓地	墳丘1	瓦質	瓦質	檀原考古学研究所1989
		墳丘2	土師質		
大和3	石上神宮		瓦質		石上神宮1929、奈良国立博物館2004
大和4	金峯山		陶製		帝国博物館1937
伊勢1	多度大社		陶製		大場1977、佐藤1935
伊勢2	東禅寺		瓦質		三重県2008
伊勢3	青山 （倭寺屋敷）		陶製（無文）		大西1954、三重県2008
伊勢4	峯連山		陶製（無文）	陶製	一志町役場企画課1981
伊勢5	漆		陶製（無文）	陶製	小玉1981、三重県2008
			陶製（無文）	陶製	
			陶製（無文）	陶製	
			陶製（無文）	陶製	

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
伊勢5	漆		陶製（無文）	陶製	小玉1981、三重県2008
			陶製（無文）	陶製	
			陶製（沈線）	陶製	
			瓦質	瓦質	
			土師質	土師質	
			土師質	土師質	
			土師質		
			土師質	土師質	
伊勢6	横谷墳墓群		陶製（無文）		三重県埋蔵文化財センター 2009
			陶製（無文）		
			陶製（無文）		
			陶製（無文）		
			陶製（無文）	陶製	
			陶製（無文）	陶製	
伊勢7	神宮寺		陶製（無文）		大西1921、佐藤1935、三輪1931
伊勢8	丁塚		陶製（無文）	陶製	伊勢市立郷土資料館1991
伊勢9	豆石山		陶製（無文）	陶製	皇學館大學考古學研究會1986、二見町教育委員会2004
			陶製（無文）	陶製	東京国立博物館2018
			陶製（無文）	陶製	
			陶製（無文）	陶製	
			陶製（無文）	陶製	
			常滑甕	片口鉢	
伊勢10	朝熊山	1号	陶製（無文）		稲垣1988、山澤2011
		3号	陶製（無文）	陶製鉢	
		3号B	陶製（無文）	陶製	
		4号	陶製（無文）	陶製	
		4号		陶製	
		5号	陶製（無文）	陶製	
		5号	陶製（無文）	陶製	
		5号	陶製（無文）		
		5号	陶製（無文）		
		6号	陶製（無文）	陶製	
		6号	陶製（無文）	陶製	
		6号	陶製（無文）	陶製	
		6号	陶製（無文）	陶製	
		6号	陶製（無文）	陶製	
		6号	陶製（無文）	陶製	

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
伊勢10	朝熊山	6号	陶製（無文）	陶製	稲垣1988、山澤2011
		6号	陶製（無文）		
		6号	陶製（無文）		
		6号	陶製（無文）		
		6号		陶製	
		6号		陶製	
		6号		陶製	
		6号		陶製	
		6号		陶製	
		7号A	陶製（無文）	陶製	
		7号B	陶製（無文）	陶製	
		7号C	陶製（無文）	陶製	
		7号D	陶製（無文）	陶製	
		7号E	陶製（無文）	陶製	
		7号E		陶製	
		8号	陶製（無文）	陶製	
		8号	陶製（無文）	陶製	
		8号	陶製（無文）		
		8号B	陶製（無文）	陶製	
		9号C	陶製（無文）	陶製	
		9号D		陶製	
		9号D		陶製	
		10号	陶製（無文）	陶製	
		10号	陶製（無文）		
		10号		陶製	
		10号		陶製	
		10号		陶製	
		10号A	陶製（無文）	陶製	
		10号C	陶製（無文）	陶製	
		10号C	陶製（無文）		
		10号C		陶製	
		10号D	陶製（無文）	陶製	
		10号D	陶製（無文）		
		10号D		陶製	
		10号E	陶製（無文）	陶製	
		10号F	陶製（無文）	陶製	
		10号G	陶製（無文）	陶製	

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
伊勢10	朝熊山	10号I	陶製（無文）	陶製	稲垣1988、山澤2011
		10号J	陶製（無文）	陶製転用	
		14号	陶製（無文）	陶製	
		14号	陶製（無文）	陶製	
		14号	陶製（無文）		
		14号		陶製	
		15号	常滑甕	陶製転用	
		16号	陶製（無文）		
		16号	陶製（無文）		
		16号C	陶製（無文）	陶製	
		16号E	陶製（無文）		
		17号A	陶製（無文）	陶製	
		17号B	陶製（無文）	陶製	
		18号	陶製（無文）	陶製	
		18号A	陶製（無文）	陶製	
		18号B	陶製（無文）	陶製	
		表採	陶製（無文）		
伊勢11	蓮台寺 滝ノ口	2号	陶製（無文）	陶製	伊勢市教育委員会1998
		3号	陶製（無文）	陶製	
		4号 (攪乱)	陶製（無文）	陶製	
		5号 (攪乱)	陶製（無文）	陶製	
		6号 (攪乱)	陶製甕		
			土師質		
				陶製	
		7号		陶製	
		8号 (攪乱)		陶製	
		9号		陶製	
			土師質		
				陶製	
		12号 (攪乱)	土師質		
			陶製壺		
				陶製	
				土師質	
		15号		土師質	
			陶製（無文）	陶製	
				土師質	
		17号 (攪乱)	土師質	土師質	

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
伊勢11	蓮台寺 滝ノ口	18号 (攪乱)	陶製（無文）		伊勢市教育委員会1998
		19号 (攪乱)	陶製（無文）		
		20号 (攪乱)		陶製	
		22号 (攪乱)	土師質		
		敷石下	土師質		
		石列	常滑甕		
		包含層		陶製（沈線）	
				陶製（沈線）	
				陶製	
				陶製	
				陶製	
				土師質	
				土師質	
			陶製壺		
			陶製壺		
伊勢12	亀谷郷C遺 跡（世義寺 旧址地）		陶製（無文）		三重県教育委員会ほか1991
			陶製（無文）		佐藤1935
伊勢13	仙宮神社		陶製（無文）	陶製	大西1923、斎宮歴史博物館1992
伊賀1	猪田	I号	瓦質	瓦質	上野市教育委員会1975
		II号	三筋壺（常滑）		
		III号	瓦質	瓦質	
		採集	陶製（無文）	陶製	
		採集	常滑甕		
		採集	瓦質	瓦質	
		採集	瓦質	瓦質	
		採集	瓦質	瓦質	
		採集	瓦質	瓦質	
		採集	瓦質	瓦質	
		採集	瓦質	瓦質	
		採集	瓦質	瓦質	
		採集	瓦質	瓦質	
		採集	瓦質		
		採集	瓦質		
		採集	瓦質		

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
伊賀2	霊山		常滑甕	陶製鉢	石部1959、三重県2008
			常滑甕		
			常滑甕		
紀伊1	隅田八幡神社	2号	常滑甕		橋本市教育委員会2023
紀伊2	大藪		瓦質	瓦質	和歌山県史編纂委員会1983
			東播甕		
紀伊3	高野山奥之院		陶製（無文）	陶製	蔵・巽1975
紀伊4	粉河産土神社	1号	陶製（三筋文）	平石	奈良国立博物館1977、 和歌山県史編纂委員会1983
		2号	常滑甕	東播鉢	
		2号	瓦質	瓦質	
		3号	常滑甕	東播鉢	
		3号	瓦質三筋壺	須恵器底部	
紀伊5	明王寺		瓦質		羯磨・伊勢田1979 吉岡1985
			瓦質		
			東播甕？		
			甕		
			甕		
			陶製		
紀伊6	比井王子		常滑甕	陶製鉢	巽・山本ほか1962
紀伊7	熊岡		土師質		安部1956
			土師質		
紀伊8	高尾山	1号	常滑甕		蔵田1965a、和歌山県史編纂委員会1983
		2号	東播甕		
		3号	常滑甕		
		攪乱		瓦質	
紀伊9	仮庵山	2号	常滑甕		和歌山県史編纂委員会1983
		2号攪乱	瓦質片		
		3号	常滑甕		
紀伊10	朝来		東播甕		橋本2024
紀伊11	熊野本宮		陶製（無文）	陶製	杉山1983
紀伊12	備崎		土師質	土師質	大谷女子大学博物館2002
			瓦質		
			瓦質		
			瓦質		

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
紀伊12	備崎		陶製（無文）	陶製	大谷女子大学博物館2002
				陶製	
			須恵質甕		
			陶製（無文）	陶製	
			瀬戸焼壺		
			瀬戸焼壺		
			瀬戸四耳付壺		
			瀬戸壺		
			渥美壺		
			渥美壺		
			陶製壺		
			陶製甕片多数		
紀伊13	那智		陶製（無文）	陶製	東京国立博物館1985
			蓮弁文壺（渥美）		
			壺		
			四耳壺		
				瓦質	
			陶製（三筋文）		
			陶製（三筋文）	陶製	
			壺		
			壺		
			壺		
			三筋壺		
			三筋壺		
			三筋壺		
			三筋壺		
			陶製甕		
			陶製壺		
			陶製壺		
			四耳壺		
			東播甕		
			陶製（三筋文）破片多数		
紀伊14	神倉山 （新宮経塚群）	1号	陶製（無文）	陶製	上野・巽1961、和歌山県史編纂委員会1983
			陶製（無文）	陶製	
			陶製（無文）	陶製	
			陶製壺		

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
紀伊14	神倉山 (新宮経塚 群)	1号	瓦質		上野・巽1961、和歌山県史編纂委員会1983
			瓦質甕		
		2号	常滑焼三筋壺		
			渥美壺		
			陶製壺		
			陶製甕		
			陶製（三筋文）		
		2号	陶製（無文）	陶製	上野・巽1961、和歌山県史編纂委員会1983
	2号攪 乱		瓦質	瓦質	
		3号	陶製（無文）	陶製	
		不明		石製	
	(新宮経塚 群)	不明	瓦質		新出資料
紀伊15	庵主池 (新宮経塚 群)	1号	陶製壺		上野・巽1961
		2号	常滑甕	陶製鉢	
紀伊16	如法堂 (新宮経塚 群)	3号	陶製（無文）		上野・巽1961
			陶製（無文）		
		4号	陶製（無文）	陶製	
		5号	渥美蓮弁壺		
			渥美蓮弁壺		
		6号	陶製壺		
和泉1	槇尾山	1号	石製筒（凝灰岩）	平石	秋山1983
		2号	陶製（三筋文）	陶製	
		3号	常滑壺		
摂津1	大門寺		常滑甕		蔵田1965b、東京国立博物館2018
摂津2	若宮八幡宮 (岩崎神社)		常滑甕		蔵田1965b、東京国立博物館2018
摂津3	鉢塚古墳		須恵器甕	須恵器碗？	富田1966
摂津4	下深田		土師質		兵庫県立歴史博物館1992
			須恵質		
摂津5	滝ノ奥		須恵質	須恵器鉢	森田1983
摂津6	清水		土師質		福原1905
摂津7	二本松古墳		東播甕		辰馬・吉井ほか1928
摂津8	池田		須恵器甕	須恵器鉢	兵庫県立歴史博物館1992
播磨1	北坊		須恵質		兵庫県立歴史博物館1992
			須恵器甕		

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
播磨2	萩原		土師質		兵庫県立歴史博物館1992
播磨3	北別僧		土師質		兵庫県立歴史博物館1992
播磨4	伽耶院	A	土師質		三木市1970、兵庫県立歴史博物館1992、村木1998a
			土師質		
			土師質		
			土師質		
			土師質		
			土師質		
			土師質		
			須恵質	須恵質	
			須恵質	須恵質	
			須恵質	須恵質	
			須恵質	須恵質	
			須恵質	須恵質	
			須恵質	須恵質	
			甕		
播磨5	高男寺		東播甕		兵庫県立歴史博物館1992
播磨6	王子神社		須恵質	須恵鉢	兵庫県立歴史博物館1992
			土師質		
播磨7	王塚古墳		土師質		藤沢1957、村木1998a
播磨8	二塚古墳		須恵質	蓋？	太田1936
			須恵質		
播磨9	福地		土師質		兵庫県立歴史博物館1987
播磨10	円満寺		須恵質		兵庫県立歴史博物館1987
播磨11	鳥羽		東播甕		兵庫県立歴史博物館1987
播磨12	栗田		土師質	皿状破片	蔵田1965b、 兵庫県立歴史博物館1992
			土師質	皿状破片	
			土師質		
			東播甕		
播磨13	江ノ上	1号	東播甕	東播鉢	鎌木・亀田1988
		2号	瓦質	瓦質	
		3号	土師質		
		4号	東播甕	東播鉢	
播磨14	西田原		須恵質		蔵田1965b、 兵庫県立歴史博物館1992
播磨15	甲山		土師質		兵庫県立歴史博物館1992
			壺		

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
播磨16	鶏足寺		須恵質		兵庫県立歴史博物館1992
播磨17	宮山		須恵質		兵庫県立歴史博物館1992
播磨18	瀧ノ内		東播磨		兵庫県立歴史博物館1992
播磨19	家氏		須恵器甕		龍野市史編纂委員会1984
播磨20	山吹山		土師質		龍野市史編纂委員会1984、 兵庫県立歴史博物館1992
			土師質		
			土師質		
			土師質		
播磨21	八祖山		土師質		赤穂市史編さん専門委員1984、 兵庫県立歴史博物館1992
丹波1	正釈寺 (向河原)		瓦質		吉岡1985、吉田1971
			陶製甕（越前？）		
			常滑甕		
丹波2	篠神社		土師質		綾部市史編纂委員会1976、 京都府立丹後郷土資料館1977
			土師質		
			東播磨		
			須恵器甕		
丹波3	藤山	1号	須恵器甕 (北近畿)	平石	時野谷1938、東京国立博物館2018
		2号	瓦質		
丹波4	一ノ宮		瓦質		綾部市史編纂委員会1976、 京都府立丹後郷土資料館1977
			瓦質		
丹波5	稲葉山	9号	須恵質		京都府立丹後郷土資料館1977
丹波6	高田山	1号	須恵質	須恵質	小池1992
			須恵質	須恵質	
		2号	須恵質	須恵質	
丹波7	大道寺		東播磨	東播鉢	京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983、 竹原1981
丹波8	今西中		土師質	土師質	梅原1920a
丹波9	田ノ口遺跡		東播磨	東播鉢	兵庫県立考古資料館2011
丹波10	平石山		須恵質		兵庫県立歴史博物館1992
			須恵器甕		
丹波11	上板井		土師質	土師質	兵庫県教育委員会1986
			須恵質	須恵質	
丹波12	西山北		土師質	土師質	多紀郡教育事務組合教育委員会1972
			土師質	土師質	
丹波13	諏訪腰		甕		兵庫県立歴史博物館1992

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
丹波14	上小野原		土師質		兵庫県立歴史博物館1992
			土師質		
丹波15	小野原住吉		東播磨	東播鉢	兵庫県立歴史博物館1992
			須恵質		
丹波16	立石		土師質		兵庫県立歴史博物館1992
丹後1	橋木林遺跡	SX01	東播磨	東播鉢	中島2001
		SX03	須恵器甕		
丹後2	天台南谷 遺跡	SX02	須恵器甕		舞鶴市教育委員会2000
		SX03	瓦質甕（北近畿）		
		SX04	瓦質甕（北近畿）		
		SX14	土師質	土師質	
			土師質	土師質	
			陶製壺		
丹後3	油江		曲物		梅原1925a
丹後4	二ノ宮		瓦質	瓦質	増田・百田ほか1980
			瓦質		
			土師質	土師質	
丹後5	河原山 （家ノ谷）		土師質	土師質	時野谷1938b
丹後6	大虫神社		土師質		佐藤1930
丹後7	塚ヶ谷		常滑甕		梅原1923b
丹後8	籠神社		土師質	土師質	宮津市史編纂委員会1996・2002
			土師質	土師質	
丹後9	真名井神社		陶製（無文）		京丹後市立丹後古代の里資料館2008、 宮津市史編纂委員会1996
丹後10	上野		須恵器甕 （北近畿）		蔵田1965c
丹後11	水戸谷遺跡	SX10	土師質	土師質	大宮町教育委員会2004
			越前壺	土師鍋	
丹後12	今西		土師質		京丹後市立丹後古代の里資料館2008
丹後13	通り	SX01	土師質	土師質	石崎1992
			土師質	土師質	
			土師質	土師質	
		SX02	土師質	土師質	
			土師質	土師質	
丹後14	左坂	SX01	土師質	土師質	石崎2000
		SX02	土師質	土師質	
		SX03	土師質	土師質	

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
丹後14	左坂	SX05	土師質	土師質	石崎2000
丹後15	幾坂		土師質	土師質	大宮町教育委員会1998
丹後16	今市		土師質	土師質	大宮町教育委員会2001
			須恵器甕		
丹後17	笛原寺 (妙井)		土師質	土師質	京丹後市立丹後古代の里資料館2008
丹後18	下宮		土師質	土師質	京丹後市立丹後古代の里資料館2008
丹後19	杉谷		土師質	土師質	京丹後市立丹後古代の里資料館2008
丹後20	大田南遺跡		土師質	土師質	弥栄町教育委員会1998
			土師質	土師質	
			土師質	土師質	
			土師製容器	土師製鉢	
丹後21	いちの坂 (和田野)		土師質	土師質	京都府立丹後郷土資料館1977、 京丹後市立丹後古代の里資料館2008
丹後22	御堂岡(郷)		土師質	土師質	京丹後市立丹後古代の里資料館2008
丹後23	山の神 (円頓寺)	2号	土師質	土師質	京都府立丹後郷土資料館1977、久美浜町史 編纂委員会2004
			土師質	土師質	
			土師質	土師質	
			土師質	土師質	
			土師質	土師質	
			土師質	土師質	
			土師質	土師質	
			越前甕		
丹後24	郷		土師質		久美浜町史編纂委員会2004、 京丹後市立丹後古代の里資料館2008
丹後25	蔵谷		土師質		久美浜町史編纂委員会2004、蔵田1965c
			土師質		
丹後26	山形古墓	SX03	土師質	土師質	岩松保・森・森島1991
			土師質	土師質	
丹後27	天王山	A13	東播甕		黒坪1997、森島・村田2004
		A19	土師質	土師質	
			土師質		
丹後27	天王山	A19	東播甕	須恵器甕底部	黒坪1997、森島・村田2004
		B1	土師質	土師質	
丹後28	豊谷遺跡	1号	土師質	土師質	肥後1992
		2号	木製容器？		

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
丹後28	豊谷遺跡	3号	土師質	土師質	肥後1992
			土師質	土師質	
		4号	土師質	土師質	
		5号	土師質	土師質	
		6号	土師質	土師質	
		7号	土師質	土師質	
		8号	土師質	土師質	
		9号	土師質	土師質	
			土師質	土師質	
		10号	土師質	土師質	
			土師質	土師質	
		11号	土師質	土師質	
丹後29	谷垣		土師質	土師質	京丹後市立丹後古代の里資料館2008
丹後30	永留		土師質	土師質	時野谷1938c
丹後31	海士		土師質	土師質	梅原1920c、久美浜町史編纂委員会2004
			土師質	土師質	
			土師質		
丹後32	権現山	GM 9・10	土師質	土師質	久美浜町教育委員会1984
			土師質	土師質	
		GM 13・14	土師質	土師質	
		GM15	土師質	土師質	
丹後33	西明寺		土師質	土師質	京都府立丹後郷土資料館1977
丹後34	栃谷		土師質	土師質	梅原1920b、久美浜町史編纂委員会2004
丹後35	汁谷		甕		梅原1920b、久美浜町史編纂委員会2004
丹後36	新側		土師質	土師質	梅原1920b、久美浜町史編纂委員会2004
但馬1	大生部兵主 神社		須恵器甕 (北近畿)		京都府立丹後郷土資料館1977
但馬2	久畑		東播甕		兵庫県立歴史博物館1992
但馬3	清滝神宮		東播甕	東播鉢	兵庫県立歴史博物館1992
			東播甕		
			陶製甕		
但馬4	ホウキザキ		須恵器甕		京都府立丹後郷土資料館1977
但馬5	畑森		土師質		兵庫県立歴史博物館1992
但馬6	宮ノ谷古墳	I SK2	土師質	土師質	兵庫県立考古資料館2010
				土師質	
但馬6	宮ノ谷古墳	II	土師質	土師質	兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財 調査部2013

旧国 番号	経塚		経容器	経容器蓋	文献
	経塚名	号数			
但馬7	薬師前遺跡	C-1	須恵器甕	須恵器鉢	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務室 2002
			須恵器甕	須恵器鉢	
		C-3	須恵器甕	須恵器鉢	
		採集	須恵器甕		
但馬8	一乗寺	1号	土師質	土師質	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1999
		2号	土師質	土師質	
			土師質		
		3号	東播甕		
但馬9	新宮山		東播甕		西口・水口1986
但馬10	比丘尼		土師質		森内2011
但馬11	馬場ヶ先 古墳		土師質	土師質	日高町史編集専門委員会義1980、 兵庫県立歴史博物館1992
			土師質		
			土師質		
			土師質		
			土師質		
但馬12	入佐山		須恵器甕 (北近畿)		蔵田1965b、東京国立博物館2018、萩野 1993、和田1912
但馬13	田多地		土師質	土師質	出石町教育委員会1985
但馬14	妙楽寺	D	東播甕	東播鉢	豊岡市教育委員会1975、豊岡市史編集委員 会1993
但馬15	鎌田・若宮 古墳		東播甕	石	豊岡市立郷土資料館1990
但馬16	野上		土師質		東京国立博物館2018、和田1912
			常滑壺		
但馬17	大平寺		珠洲焼壺		豊岡市史編集委員会1981・1993、水口1987
但馬18	井ノ谷	2号	須恵器甕		浜坂町教育委員会1988
		3号	須恵器甕		

※一部で報告から材質を改めたものがある。